

ナ113-32

国民文庫

404

日本共産党闘争小史

市川正一 著



国民文庫社

315.1  
1752n  
k  
00327835

X  
複写



国民文庫

404

日本共産党闘争小史

市川正一著

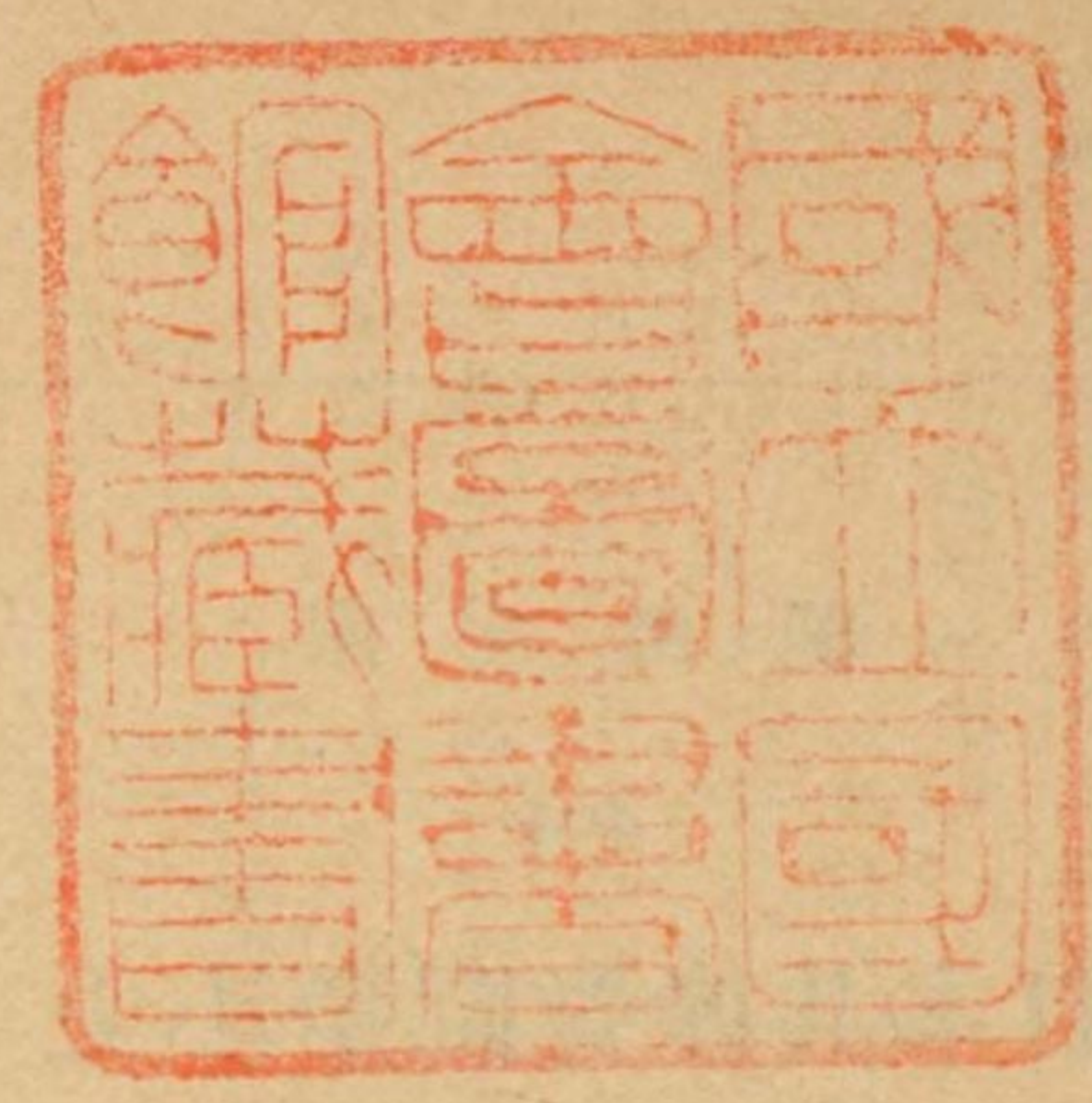


国民文庫社

315.1 I 752 n k II

編者例言

- 一 本書は、日本共産党員故市川正一氏が、一九三一年七月、「日本共産党事件」の公判廷で、代表陳述の一つとして前後五日にわたって述べた記録にもとづいて編集したものである。
- 二 本書は、一九二六年四月までの事実を述べたものであって、その後の記述は欠けているから、それをおぎなうために、日本共産党書記長徳田球一氏の論文『日本共産党三十周年に際して』（一九五二年六月）をそえた。
- 三 市川正一氏の生涯については、雑誌『前衛』一九五四年三月号山辺健太郎執筆『市川正一の生涯』を参照されたい。
- 四 本書は、暁明社発行の改訂版に、用字上の訂正をくわえ、市川氏の陳述に見られた二、三の誤記または誤解であることあきらかなものについては注で訂正してある。



327835

目次

日本共産党三十周年に際して ..... 日本共産党書記長 徳田球一 ..... 七

序 ..... 日本共産党書記長 徳田球一 ..... 二五

はしがき ..... 一九三二年七月十日、日本共産党アヂ・プロ部 ..... 二七

日本共産党闘争小史

序論 ..... 三〇

一 日本共産党の成立 ..... 三七

1 国際情勢 ..... 三八

2 国内情勢 ..... 四〇

3 日本のブルジョアジー ..... 四三

4 日本の社会民主主義者 ..... 四八

5 日本資本主義の発達とプロレタリアート ..... 五一

6 党創立直前の時代 ..... 五七

7 党成立の具体的事情 ..... 六一

8 党創立におけるコミンテルンと日本共産党 ..... 六三

二 創立からいわゆる解党決議まで ..... 六九

1 いわゆる第一次日本共産党の創立とその闘争 ..... 六九

2 六月検挙とこれにたいする闘争 ..... 八一

3 震災テロル（朝鮮人虐殺、龜戸事件） ..... 八二

4 解党決議 ..... 八三

三 コミンテルンの解党否認から再建まで ..... 八七

1 委員会時代 ..... 八七

2 一九二五年一月決議 ..... 八八

3 ビューロー時代 ..... 八九

4 共産主義グループの創設 ..... 九二

5 コミンテルン執行委員会第六回総会における日本共産党再建のための決議 ..... 九五

四 再建大会から再組織まで ..... 九七

1 再建大会 ..... 九七

2 一九二七年における闘争 ..... 一〇五

3 コミンテルン執行委員会の日本にかんするテーゼ ..... 一一〇

五 二七年テーゼにもとづく党の再組織から第六回世界大会まで ..... 一一六

1 再組織 ..... 一一六

2 再組織から三・一五検挙まで ..... 一二九

3 三・一五から第六回世界大会まで ..... 一二九

六 コミンテルン第六回世界大会以後 ..... 一四三

1 コミンテルン第六回世界大会（二八年テーゼ）……………一四三

2 コミンテルン第六回大会から四・一六まで……………一四七

結語……………一七一

最終陳述……………一七四

編者注……………一八七

## 日本共産党三十周年に際して

日本共産党書記長 徳田 球一

現在、アメリカ帝国主義者の世界制覇の政策は、大きな障害にぶつかっている。その一つは、日本における革命運動の飛躍的發展である。

一九五二年のメーデーは、日本の革命運動の発展における一つの頂点を示している。このメーデーは、全国四百カ所にわたって、四百万人を動員した。敵は、アメリカ将校の指揮する武装警察軍をもって、全国にわたって、このデモンストレーションを襲撃した。が、それは、明らかに失敗した。東京では、アメリカ将校の指揮する一万の武装警察軍が、人民広場において、デモンストレーションを襲撃した。これに対して、十万の大衆がこれと激闘し、ついに双方とも数百人の死傷者を出した。

この日本人民の重大なる抵抗は、朝鮮におけるアメリカ軍の敗戦的傾向をいっそう強め、日本におけるアメリカの政治経済組織の破綻を促進している。そしてアメリカ帝国主義者とそのツイタテである日本反動勢力を動揺させている。

このことは、日本における革命運動が、極東におけるアメリカ帝国主義者の侵略政策に、重大なる障害物となり、これに対して、決定的役割を演ずることを示している。それゆえにこそ、このことは、国際的に大きな反響をよんでいる。

日本の革命運動が、こうした成長をしたのには、日本共産党の三十年にわたる奮闘が、あずかって力があつたのである。

わが党の三十周年にあたって、過去の活動をかえりみて、将来の発展の助けとしたい。

ロシアにおける大十月社会主義革命は、世界の革命運動に重大な影響をあたえ、その影響のもとに、各国において、共産党が生まれた。ここ数年来、各国において、共産党の三十周年があつたが、わが党もこれにつづいて、今年これを迎えるに至つた。

一九二二年七月十五日が、わが党の創立の日である。

一九〇〇年の初頭から、偉大なる同志セン・片山の指導のもとに、日本の労働組合運動は発展した。天皇制の軍国主義的専制政治は、これを一時窒息せしめていた。しかるに、大十月革命は、労働組合運動、農民運動、学生運動を窒息からよみがえらせた。そして、一九一八年夏には、米騒動——食糧暴動——をまき起すに至つた。

一九二二年の初頭、モスクワでおこなわれた極東民族大会は、これまで数個にわかれていた共産主義者グループを、同志セン・片山の指導のもとに、日本共産党に結集させた。党は、この綱領で、天皇制の廃止と、民主共和国の樹立をかかげた。

一九二七年、これまで単純であつた党の綱領を、一段と精密にして、党を大衆的に発展させた。それは、経済主義的解党派である山川主義と、小ブルジョアの抽象理論で、党を大衆から孤立させた福本主義をうち破つて、党を労働者階級の前衛たらしめたものである。そして、綱領は、天

皇制の打倒、寄生的土地所有の廃止と土地を農民に無償で与えること、七時間労働制の実施、労働者・農民政府の樹立であつた。この綱領を勇敢に実践して、党を大衆的基礎の上においた指導者が同志渡辺政之輔である。

帝国主義の最も弱い一環であり、天皇制によって保持されていた日本の強盗的帝国主義の内部矛盾は、大十月革命の影響による、極東、特に、中国における大民族解放運動によって、いっそう深まった。そして、第一次世界戦争中から、中国に対する干渉をいっそう深刻にして来た日本帝国主義は、ついに、一九三一年に満州を占領し、第二次世界戦争の火ブタを切つた。

こうして、日本帝国主義は、戦争のために、従来よりもいっそう弾圧を強めた。この残酷な弾圧は、ファシスト的であり、かつ、封建的遺習をともなつていた。

この弾圧はわが党に集中され、さらに、労働組合、農民組合、学生団体に発展し、ついには、自由主義的文化関係にまでびて、国民の一切の行動および思索にまで干渉した。そして、国民の生活を、全くの軍国的奴隷として拘束した。

この強烈な弾圧は、すでに、一九二八年からはじめられ、戦争が進むにしたがつて、急速に深刻の度を増した。

わが党は、この侵略戦争のための諸政策に対して、全力をあげて闘争した。わが党は、半封建的な天皇制の残忍なテロルにも屈せず、工場、鉱山、農村等の職場はもちろんのこと、軍隊の中にも、軍艦の中にも、勇敢に、反戦グループを組織して闘つた。

この烈しい闘いのうちに、これを指導した同志市川正一は、ついに殺されたのである。党創立から日本帝国主義が敗北するまで、二十三年の間、わが党は、非合法に活動し、しかも、

ひどい継続的な弾圧のもとにあった。そのために、苦闘をつづけたにも拘らず、党員は千名を越すことができなかつた。しかしながら、労働者、農民、学生、学生の進歩的活動を、労働者階級の指導のもとに発展せしめる相当の基礎をつくり上げた。このことは、人民の運動が非常な速さで成長し、わが党が、現在、数十万の党員を擁し、ばく大な国民の支持を獲得していることによつて立証せられる。

## 二

一九四五年八月十五日は、ポツダム宣言による無条件降伏を、天皇が宣言した日であつた。これによつて日本の強盗的帝国主義は没落し、神を僭称していた天皇は、人間に引下げられた。ファシズムのための治安維持法とその従属的法令が廃止されて、十八年間投獄されていた党の指導部を先頭に、わが党員が出獄したのは一九四五年十月十日であつた。

はじめて合法的存在の可能性を得たわが党は、ただちに活動を開始した。その綱領で、党は、天皇制の廃止、寄生的土地所有の没収と土地を農民に与えること、独占資本の人民管理、人民民主共和国の要求をかかげた。それ故に、反動的諸勢力からの反撃は強く、特にファシストの残党共は、共産主義者をおびやかすため、暗殺をも辞さなかつた。社会民主主義の諸勢力からは、資本家と結んで労働者を裏切る活動をもつて攻撃された。にもかかわらず、わが党は、労働者に非常に歓迎され、労働者の闘争は、ほとんどすべてわが党の指導のもとにあつた。そして一九四六年を通じて、嵐のようなストライキの発展が見られた。夏から秋にかけて、海員組合、国鉄労働組合、電気労働組合を先頭に、あらゆる労働組合が、賃金引上げ、八時間労働制、団体交渉権の

確立を要求して、成功的に前進した。そして一九四七年初頭には、戦争中の無組織から、四百万人が組合に組織された。

この闘争の中で、わが党は、単なるストライキのみでなく、労働者の生産管理を大規模に実践した。それは資本家が、かれらにとって見透しのつかない政治経済情勢のために、生産を放棄したからである。労働者は、この情勢に対して、生産を放棄するというだけでは対抗することができず、さらに前進して、生産を管理しなければ、生きて行くことができなかった。また人民大衆も、物資の欠乏に悩まされていたため、生産管理を歓迎した。

この生産管理戦術は、資本家と社会民主主義者との共同戦線によつて反撃を受けたが、これを圧倒して成功した。

われわれのこの経験は、革命的情勢の発展に際して、貴重なものとなるであろう。この戦術を実践したからこそ、労働者は非常な確信をもつて、ストライキを組織し、これによつて自らの政権をうちたてることを望んだのである。一九四七年二月一日を期して、あらゆる産業をふくむ二百六十万の労働者が、大ゼネストを遂行しようとするまでになつたのは、ここに起因するのである。

この大攻勢に対して、政府も資本家も、全く施す術もなかつた。だから、いったんマッカーサー司令部の武力によつて、ゼネストが中止されたとはいへ、その後の交渉によつて、賃金は二倍まで獲得し、八時間労働制と団体交渉権を獲得することができたのである。

アメリカ帝国主義は、すでに、一九四六年五月にアチソン声明によつて、反共的態度をあきらかにした。そして吉田反動政府を育成することに力をつくした。しかしながら、二・一ストライ

キ前までは、公然とストライキの禁止にまでは出なかったが、いよいよ共産主義者の指導力がよく、労働者も生産管理をもって前進することが明らかになったので、ついに、一九四七年一月三十一日、ゼネスト禁止命令を出した。その後、この反ポツダム宣言の趣旨を、あらゆる場面に拡大し、現在の植民地支配にまで発展させる第一歩をふみ出したのである。

わが党は二・一ストライキの禁止令にあって、労働者を先頭とする人民の団結を強固にするために、一步退却した。わが党は、労働者に対する指導力は強かったが、農民に対しては、まだ指導力が弱く、学生、インテリゲンチア等に対する指導力はいっそう弱かった。そして、黨員もまだ、三万を越したばかりであった。

わが党は、その後、党の組織を大衆のあらゆる活動の部面に拡大し、敵の醜悪な挑戦と摘発に抗して、広くかつ深く、大衆の間に党組織をうえつけ、辛抱よく革命勢力を培養することにとめた。

これまで軽視しがちであった協同組合をはじめとする人民の経済の諸団体、演劇その他の文化的諸団体、中小企業者の諸団体、さらに、国および市町村の政治機関、警察その他の弾圧機関にまで、党勢力を拡大する方針を堅持した。この方針は、党の勢力を労働者のみに集中せずに、農民、学生その他の知識分子、中小企業者等すべての圧迫されている部分に広くはいり、民主民族戦線を広範に形成するにあった。さらに青年、婦人の活動に至るまで、党活動を拡大することにとめた。

これまで、出版活動は主として、中央部に集中していたが、これをすべての党機関に拡大し、一九四九年末には五千種以上に及ぶ新聞、雑誌を発行していた。かつ、中央幹部学校を先頭に、

地方機関でも活動家を教育し、あらゆる党機関における黨員教育活動を盛んにした。このことによつて、黨員の質を高めることに努めた。そして、大衆の日常要求をとりあげて、常に大衆の利益を守ることによつて、大衆との結合を深め、いかなる弾圧にも屈せないように努力した。

その結果、党勢力はいちじるしく拡大した。  
新しい黨員の獲得は、社会党の左派および労農党から分離して加わってきた多数の人々を加えて、いちじるしく増大した。その結果、一九四九年末には、黨員数は二十万を越えた。

二・一ゼネストが禁止された後、敵は、労働組合、農民団体において、黨員をふくむ進歩的分子を首切ってきた。また、犯罪のデッチ上げその他の強硬手段をもつてその団体から排除する方法と、買収政策とによつて、分裂策動を強行し、党勢力を弱めることにとめた。これに対して、わが党は、一方においては、大衆団体の分裂を防ぐ努力をしたが、他方においては、反動的または中立的傾向のもとに指導されている団体であっても、あらゆる方法をつくして、党勢力をうえつけることにとめた。これによつて、大衆は、日和見主義的ダラク幹部をのりこえて、党の指導のもとに、大衆団体の統一運動を促進し、さらに、労働者と農民の同盟を固め、あらゆる場面において、共同戦線戦術を拡充した。だから、産業別労働組合会議等左翼的勢力の指標と認められた団体が、いちじるしく減員したにもかかわらず、統一戦線戦術は、大衆団体の間に、広く成功的に活用されて、党勢力は、かえつて拡大した。

一九四九年の一月におこなわれた衆議院の総選挙では、わが党は、吉田内閣のもとに、アメリカ占領軍のきびしい弾圧をうち破つて、三百万の投票と、三十五人の当選者を獲得した。この選挙における優勢は、地方にも拡大し、わが党は、これまでほとんど何ものも持たなかったのに、



町村長ならびに地方議会の議員を相当数獲得することができた。

これまで非常に微弱であった文化及び科学の分野における活動が、大きく発展した。

しかしながら、他方では、二つの日和見主義が発生してきた。一つは、一九四九年の春、第十回中央委員会総会で明確になったもので、アメリカの占領制度を軽視して、議会行動を中心とする平和的手段による革命を主張するものであった。他は、一九四九年九月からあらわれてきたもので、日本の支配は、完全に、アメリカ帝国主義者の手中にあり、吉田政府以下の国および地方の政治機関は、すべて、アメリカ帝国主義者の機械的道具にすぎないと、断定するものであった。それ故、かれらは、アメリカ占領軍とのみ闘うことが、現在の党の主要な任務であると主張して、吉田政府との闘いを無視した。これらの日和見主義者達は、すべてをこの宣伝に集中し、直ちに大衆をアメリカ軍を撤退せしめるために蹴起させなければならぬ、と要求した。

党内の右翼的偏向は、党内の論争によって克服された。その克服には、『恒久平和のために、人民民主主義のために』および『北京人民日報』の日本の情勢とわが党の活動に関する論評が大ききな助けになった。そして、第十八回中央委員会総会は、アメリカの占領制度を排除し、吉田政府によって代表せられる国内反動勢力を打ち倒す闘争を主とする、党の当面の任務を満場一致決定した。それにもかかわらず、この決定は、現在の日本の情勢と、これに対する革命的行動の基本的関係を明確にすることができなかった。党内には、依然として、左翼的日和見主義の動搖が止まず、ついに、トロツキストを先頭とする各種の動搖分子によって反対派が結成された。

この反対派の結成は、アメリカ帝国主義者と日本反動勢力との、党への攻勢によって助けられたものであることは、争いがたいところである。かれらは、党内の欠陥を利用して分裂を策した。

そのために、一時、党員は減退し、党の発展を阻害された。

われわれは、党の発展の上に、新しい段階を開くために、党内の矛盾と意見の相違をなくする新しい綱領を必要とした。

### 三

党の方針の不明確であった基本的な点は、党指導部が、敗戦後の日本が帝国主義国であるか、それとも植民地または従属国であるかを明確にしなかったことである。党の指導部は、日本の敗戦後の情勢を、依然として、軍国主義的帝国主義であった戦前の状態の変態的發展と考えたところにあった。もちろん、アメリカの占領政策をとりあげ、日本が従属的になったことを指摘し、これからの解放を重大な問題であると規定したことは事実であるが、依然として、明確に、植民地、従属国の革命と規定して、同志スターリンが明らかにしたその原則によらなかつたために、基本的に問題を解決することができなかった。

民族の解放を主張し、この状態においては、民族ブルジョアジーが解放闘争の積極的要素となり得ることを感知し、これに対する活動も相当進んでいたことは事実であるが、なお、その性格について、不明確な点のあったことは、争うことのできないところである。

新しい綱領の特徴は、日本の革命の性格を、従属国の革命とし、民族解放民主革命と規定して、従来の方針の不明確さを一掃したことにある。

新しい綱領は、しだいに、国民の綱領となりつつある。この旗のもとに、アメリカ帝国主義者と日本反動勢力に対して、抜きがたい抵抗組織が拡大しつつある。このことは、真にわが党の新

しい綱領が国民の利益を代表し、かれらにとって、生きがいのある闘争の道を示していることを証明している。

一九四九年の秋から、わが党は、従来の合法的活動と並んで、新しい情勢に適応するため、他の活動の諸形態をも適用し始めた。敗戦後、党は、合法的活動をいちじるしく拡大し、これを運用することによって、党を大衆的にし、大きな発展をとげたことは、争いがたいことである。しかしながら、敵の悪辣な挑戦と摘発に抗して、党を成長せしめるためには、どうしても、これに適するような新しい組織をもって、活動することが必要であった。

わが党は、この戦術の転換に際して特に、「闘いは人民の信頼のもとに」のスローガンを強調して、人民との結合を、あらゆる場合に忘れないように心がけた。そして、莫大な人民の精力によって、党組織が擁護されることに成功した。こうして、党の指導のもとに、大衆は、敵の攻撃に對立する抵抗組織を、急速に拡大することができたのである。

この戦術の転換が早く始められたからこそ、一九五〇年の初頭からアメリカ帝国主義者と日本の反動勢力がさらに反対派をも利用して、党破壊を企てたのに対して、これにうち勝って、一その発展ができたのである。

アメリカ占領軍司令部と日本の吉田反動政府は、占領制度を濫用して、党中央委員、アカハタ編集員、労働組合、および国会における活動的分子等を追放し、同時に党中央機関紙アカハタを初めとして、二千種に及ぶ進歩的新聞、雑誌を発行停止し、その印刷所を封鎖した。さらにかれらは、犯罪的嫌疑を名として数万の活動分子を殺傷し、または投獄した。それをのり越えて、ますます革命勢力が成長しつつあることが、わが党が敵の弾圧政策にうち勝ったことを立証してい

る。

新しい綱領はこうした行動の上に、さらに党の目的を明確にしたので、党活動は飛躍的に発展した。

サンフランシスコにおける、いわゆる「対日講和」および米日「安全保障」条約にひきつづいて、これを実践する「行政協定」が実施せられたことよって、この二つの条約が、アメリカが日本を永久に占領し、これをソヴェト同盟、中国、朝鮮、ヴェトナムおよび極東の諸国を侵略するための基地として、民族を奴隷化するものであることを明確にした。ソヴェト代表部に提出された国際協定に反する追いだしのための覚え書、および、吉田反動政府と蔣介石政権との、侵略戦争のための協力が、その侵略の実践を暴露している。

これに対して、労働者を先頭とする農民、学生その他の知識分子、および中小企業者が、新しい綱領のもとに挙げて反抗した。この国民の大抵抗は、大衆の先頭にたった労働組合の行動に最もよくあらわれている。一九五一年末から五二年のメーデーにかけて、労働組合は、数回にわたる、百五十万から四百万に至る大ストライキとデモンストレーションをおこない、敵のファシスト政策に大打撃を与えて、かれらを動揺させている。

日本の革命運動はこれまで、国際的連帯性について、比較的稀薄であった。しかるに新しい綱領が成立してから、その実践の上で、国際的連帯を強めた。朝鮮戦争との関係において、ソヴェト同盟ならびに新中国との関係において、アメリカの侵略政策に對立して闘うことと、党の成長と民族生活の諸関係について、各国の友党ならびに進歩的団体から、大きく援助されたことよって、国際的連帯をますます強めた。

さらに、一そうこのことについて、大きな効果をあたえたのは、偉大なる指導者同志イ・ヴェ・スターリンが一九五二年初頭、日本人に与えたメッセージである。このメッセージはただに国際的連帯性を強めただけでなく、日本人にとって、アメリカ帝国主義者と日本反動勢力の反ソ反共政策をうち破り、新しい綱領を遂行するために、はかり知れない大きな力となったのである。

## 四

アメリカ占領軍の指揮のもとにおこなわれた「農地改革」は、きわめて欺瞞的なものであった。右翼社会民主主義者と「左翼」冒険主義者は、これによって、耕地の分配はすでに終了し、ただ農業経営が現在の社会的条件では不利であることと、農業への投下資本が少なすぎるといふことだけが問題であると主張している。こうした論拠にたつて、かれらは、わが党の農業政策をあざ笑い、革命的な土地改革の要求は、意味のないものであると言っている。われわれは、その時に、かれらに対して決定的打撃を与えることができなかった。それは、われわれが、革命的な土地改革と各地方の条件に応じて起る各種の要求とを、併列的に主張して、この二つを正しく結合することができなかったからである。それ故に、われわれは、十分に農民、特に農民運動にとつて、根本的要素である貧農を獲得することができなかった。

新しい綱領は、革命的な土地改革を実現して、国民の生活から、封建的要素を一掃し、その基礎の上に、農業生産を発展させ、農民の生活を向上せしめなければならぬことを明らかにして、従来の欠陥をあますところなく指摘した。

アメリカ軍の指揮のもとにおこなわれた「農地改革」は、実際、中農と貧農にとつては何らの利益もあたえなかった。というのは、この「農地改革」は、無償で土地を与えるのではなく、農民は代価を払い、さらに、とてもたえ切れないばかりの大な財政的負担を背負わされたために、いったん得た耕地も、再び地主と富農の収奪するところとなり、かえつて、いっそう窮乏におちいつているからである。

「農地改革」は山林と原野を依然として地主の手に残した。このことに関して、右翼社会民主主義者と「左翼」冒険主義者は、政府を非難する必要がない。なぜなら、山林と原野は、将来必ず、政府が統一的に経営すべきものであるからだと主張している。

しかしながら、日本はわずかに全面積の一六%しか耕地になつていず、山林と原野の解放なしには、何ら農民を利益することができない、現に、畜産と燃料と肥料のために、地主に高額な山林、原野の使用料を支払わされている。これが、地主と富農の支配を維持する大きな支柱となっている。

現在、農民は、山林と原野の解放に対して、団体をもつて要求し、強固な抵抗組織の擁護のもとに、その解放闘争を維持している。

水利、農業施設等の問題に関して、「農地改革」は、何らふれていない。しかしながら、この問題を解決しなければ、農民は前進することができない。

こういふふうにして、この「農地改革」は、農村における封建性を一掃しないばかりでなく、依然として、反動勢力の支配を維持する基礎となっている。反民族的「自由」党が、議会で多数党である所以は、農村の抜きがたい封建性に基礎をおくからである。それ故に、革命的な土地改革

なしには、農民の状態を根本的に改善することはできないのみならず、農業生産のたえまない発展は不可能である。したがって労働者階級の生活をよくし、全国民の生活を根本的に変えることはできない。そして、依然として、天皇制のもとに、アメリカの奴隷として、失業に悩み、肉弾の供給者に止まらざるを得ないのである。アメリカ帝国主義者は、実に、このためにこそ、「農地改革」によって、欺瞞をおこなったのである。

農村においては、新しい綱領が出された後に、革命的土改の要求がはなはだしく増加し、特に、山林、原野、水利等の問題に関して、いちじるしく増加した。

新しい綱領は、この農業問題の革命的解決とともに、労働者の要求についても、労働の半封建的搾取の廃止、労働組合組織の自由、物質状態の大巾の改善の要求をとりあげて、農民の闘争との緊密な結合をはかっている。新しい綱領の実践は、これによって、労働者と農民との同盟を強固にした。そしてそれは、学生、知識分子との結合をうながし、さらに、アメリカの占領制度と吉田政府によって苦しめられている手工業者、小商人、中小企業者ならびに大商人をも、労働者階級のがわへひきつけた。これらすべての勢力は、労働者と農民の同盟を中心とする民族解放民主統一戦線に結合しつつある。この革命的勢力は、アメリカ占領軍と日本反動勢力に対する各種の抵抗組織によって強められている。

新しい綱領のもとに、この革命力の結集が大いに発展したからこそ、一九五一年末から現在にかけての大きな攻勢が成功したのである。

## 五

朝鮮への侵略戦争を開始して以来、アメリカ帝国主義者は日本に対してもますます圧制をたくましくした。この戦争のための資材を、アメリカ人は、大部分日本に求めた。その結果、日本は日常の生活にも事を欠き、戦争がつづくにしたがって、恐慌状態を深めている。最近においては、資本家たちが最も誇りとしていた綿紡績産業が四〇%の操短をしなければならなくなった。その影響は、それに関連している中小企業に破滅的影響を及ぼした。一千万円以上の大会社が百数十社も破産せざるを得なくなった。この恐慌は、化学産業から機械産業にも及び、現在では、軍需産業の中心である製鉄業にまで及んでいる。したがって、失業者の数は半失業者を含めて、千八百万を突破した。そのために、国民を恐ろしい地獄におとしめている。

モスクワ国際経済会議にあらわれているところを見れば、資本主義諸国は、アメリカを先頭に、いずれも戦争経済のために辛抱ができないほど破綻して、資本家陣営は分裂し、多くの資本家は、ソヴェト同盟、新中国、東ドイツ、ならびに人民民主主義諸国と平和を維持して通商することを望んでいる。日本においても、多くの資本家が同様なことを望んでいる。来る九月に、北京において、アジアおよび太平洋地域の平和会議を開催することになったが、これにたいする参加者はおびただしいものになっている。日本からはモスクワ経済会議に参加するために、資本家を代表して三人が行き、かれらは、北京の平和会議準備委員会にも参加している。

日本においては、特に朝鮮における敗北傾向と、これをおしかくすための細菌戦および捕虜虐殺の真相が暴露されたことによって、アメリカ帝国主義者は、いちじるしく軽蔑されて、帝国主義戦争反対、アメリカ占領軍の即時撤退、民族独立の闘争がいちじるしく盛んになっている。そして、国内における無法きわまる植民地支配は、大衆の抵抗戦によって障害にぶつかり、その弱

体を暴露して、アメリカ占領者をますます窮地におとしめられつつある。その上に、アメリカ帝国主義者の世界制覇政策は、各国において破綻している。かれらは、ファシズムの強行によってその破綻を防ごうとしてもがいている。アメリカ国内でも、ファシスト法を破って、大ストライキが継続的におこなわれている。アメリカを先頭とする資本主義諸国では、恐慌がますます深まっている。これらの事情によって、アメリカ帝国主義者が、わが民族を威力をもって圧倒することは、もはや、きわめて困難になって来た。

こういう窮地におとしめられたために、アメリカ独占資本家とその手先の政治屋どもは、ゴロツキ集団の常として、日本におけるそのファシスト支配をますます兇暴にしつつある。しかしながら、そのことは、日本の恐慌を深め、国民の信望を失わしめている。したがって、アメリカ帝国主義は、その精神的政治的支柱である吉田政府の維持さえも困難となりつつある。

それ故に、民族の独立と自由と平和のための闘争は、国民のあらゆる面に浸透し、アメリカ帝国主義者と日本反動勢力を驚かせる大攻勢となったのである。ここまできると、もはや、いかなるファシスト的弾圧も、容易にこの民族の攻勢を圧倒しつくすことはできないであろう。

現在では日本の革命運動は、世界平和陣営と結合している。その結合は日常生活と緊密な関係にある経済問題にまで深まりつつあるので、いよいよますます、この民族の攻勢を圧倒することが不可能になるであろう。

## 六

新しい綱領の実践後、党内の反対派グループは、もはや存在の余地を失った。きわめて小さい

冒険主義のグループに墮落した「国際共産主義者団」——トロツキスト——を除いては、反対派の大部分は、すべて誤りを認めて党に復帰し、または復帰を願っている。だから、現在では党は、統一された意志と、統一された指導のもとに、十分な統制を保って成長しつつある。

しかしながら、まだ、部分的には、欠陥をもっている。たとえば、特に、ときどき、ストライキ、デモンストレーションを、労働者、農民の実際的要求から離れて、指導者の好みによっておしつける傾向である。さらにまた、党の幹部達が、ストライキ、デモンストレーション等の実行のみを精力を集中して、国会や地方議会の選挙等の如き問題を軽視する傾向である。われわれは、厳密に辛抱がよく、階級的政治教育を実施し、公然活動と非公然活動との統一に習熟して、「闘いは国民の信頼のもとに」のスローガンを実践することによって、この欠陥を除き、恐ろしい勢いで進撃してゆく革命に、立ち遅れないようにする義務をもっている。

わが日本共産党の三十周年を顧みて、最も痛感することは、マルクスレーニン主義によって武装し、平和の旗手であり、勤労者の偉大なる指導者であり、教師であるイオシフ・ヴィッサリオノヴィチ・スターリンの指導原則を厳格に守ることが、必要欠くべからざるものであるということである。

さらに、マルクスレーニン主義を中国革命に運用して、新しい道を切り開いた同志毛澤東の思想が、われわれにとっても、欠くべからざる導きの道であることを痛感する。

日本共産党三十周年万歳！

帝国主義戦争反対！

日本民族の独立と自由と平和万歳！

民族解放民主革命万歳！

ソヴェト同盟と中国をはじめとする平和愛好諸国との平和と協力万歳！

『恒久平和のために、人民民主主義のために！』一九五二年七月四日号所載

## 序

党史は、革命後に、多くの資料と関係者の合議によってでなければ、正確なる編纂は可能ではない。

そしてまた、歴史は相当の年月を経て書かなければ、正確を期することは困難である。本書は例言にもある通り、同志市川が法廷において述べたものであり、獄中の困苦の中にまとめられたものである。そして法廷闘争の目的をもって書かれたことを考えておかねばならぬ。にもかかわらず、本書は貴重なものであることは争われない。同志市川が極めて謹厳な指導者であり、闘士であったことは言うまでもない。その彼が、わが党のもっとも困難な立場にある際、敵の攻撃に抗し熱血をしぼって書いたものであることを、忘れてはならない。この陳述をする前に、我々はその内容を獄中の困難の下に討議した。だから決して一方に偏したのではなく、相当練られたものである。

ソヴェト同盟共産党小史が世界プロレタリアートのもっとも貴重な宝であることは言うまでもない。そして我々の非常によい教科書であることも多くの言葉を費すまでもない。それと同列に置くことはもちろんでき得べくもないが、この書を資料として、わが党のすべての人々が新しい闘争のために教育されねばならない。この本に見られる通り、わが党は多くの誤謬をおかして来た。にもかかわらず終始一貫、党をボルシェヴィキ化するために闘って来たことは明かである。

そして、それは困難なる事態に際して、いかに理論と実践とを統一するかにあったことが明かである。我々がいかに多くの小ブルジョアの理論家によってなやまされて来たかを本書は明かにしている。そしてこれらの小ブルジョアの理論家が理論と実践との隔離を生ぜしめたこと、すなわち彼等の理論が貧困で役に立たないものであったことを明かにしている。

我々はこの本によって、党の過去の誤謬をよく検討し、現在もなおこれと同様な偏向が党生活のところどころに存在していることを発見し、これを痛烈に批判することによって、党を強固にしてゆかねばならない義務を有する。誤謬を見て失望するものはとるにたらない人間である。益益勇気をふるいおこして、これを克服してこそ革命は成就するのである。

現在、我々は民族の破滅に面している。これを救うには、わが党の指導力にまたねばならぬこともまた明かである。したがって我々は極めて謙虚に自己を訓練してゆかねばならぬ。その一資料としてわが党の名誉ある不朽の指導者同志市川正一のこの書を労働者、農民、勤労者諸君に送ることを喜ぶ。

一九四六年七月五日

徳田 球一

### はしがき

日本共産党は、本年七月をもって創立満十周年を迎える。わが党はこの際、全日本の労働者、勤労農民ならびに同情者諸君の前に血でつづられたわが党の闘争史を贈る。

日本共産党が組織されたのは一九二二年七月で、同年十一月コミンテルン第四回大会で正式にその支部として確認された。すなわちわが党は、一九一八年に始まった日本帝国主義のいわゆる第一次対ソヴェト同盟干渉戦争のまただ中に誕生したのだ。そして今回、またソヴェト同盟ならびに中国国民攻撃のための戦争準備（いな、すでに戦争は開かれている）が、天皇によって着々と進められつつある時に十周年を迎えたのだ。天皇はこの強盜的反革命戦争の国内的準備として、国家総動員計画、憲兵と警察との協力、特高警察網の充実等々を行っている。また共産主義者にたいする弾圧は、あたかも血に饑えた狼のごとく、党創立以来健闘をつづけた光輝のあるわが党の同志には、天皇によって死刑法（治安維持法）の極刑が下されんとしている。これらにたいして日本のプロレタリアートとその党は、劃期的な新テーゼを得て、果敢なる闘争に立ち上っている。かかる重大な時期に、しかも我々の手になる最初の党史を発表することは、極めて深い意義があると確信する。

この党史は、現に獄中にあつてブルジョア地主的天皇制の狂暴なテロルと勇敢に闘いつつある同志市川正一の公判廷における演説を基礎として、わが党創立十周年記念カンパニーニアのために

特に編纂したものである。同志市川正一は、いまは亡き同志渡辺政之輔らとともに、創立当時から日本共産党のために、最も精悍に闘ったわが党の輝ける指導的同志の一人である。この党史の内容については、同志市川正一もいつているように、決して党の歴史を具体的、組織的に詳細に述べているのではない。ひいて党史として決して完全なものというのではない。またここに収められているのは、創立から四・一六の検挙に至るまでに過ぎない。かかる不備不足の点は、獄中であつて極度に資料が制限されること、特に政治的、組織的に必要な様々の制限あること、言論の自由がまた甚だしく奪われている資本家地主の階級裁判における法廷の闘争演説であることから、全く当然である。だが、すべてのかかる制肘にもかかわらず、この闘争の具体的記録こそ、端的に「日本共産党とはいかなるものであるか」を最も明瞭に、わかりやすく説明していると同時に、血に饑えた天皇制の搾取と弾圧とテロルのいつわりえざる具体的反証を与えているものである。

共産党にたいしてますます高まりつつある労働者、農民全体の理解と信頼と支持とを極端に恐れるがゆえに、そのためにこそ、常に逆宣伝と事実の虚構とで、党の面貌を描き出すことに腐心している支配階級にとって、この党史は大きな鉄鎚である。と同時に、プロレタリアートとその党にとっては、真に一つの力である。

軍事的・警察的天皇制ならびに資本家、地主とその代理人たる右から左までの社会民主主義者どもと決定的に闘争し、党内の左右の偏向を無慈悲的に克服し、プロレタリアートと勤労農民の発展のための敵であるすべてのものと徹底的に闘争し、党をボルシェヴィキの線に沿って発展させてきた、共産主義的英雄たちの血をもつてつづられてきたこの党史のなかから、貴重な教訓と

豊富な経験とが、あますところなく摂取されることを期待して、これを発表する。

一九三二年七月十日

日本共産党中央委員会アヂ・プロ部



## 序論

われわれは日本共産党員であるがゆえに、このゆえにのみ、この法廷に立たされている。多くの同志は日本共産党員であるゆえをもって、また日本共産党のために活動したゆえをもって、ブルジョアから酷烈に追求され迫害され、逮捕され投獄せられ、そして長期の刑をうけ、あるいはブルジョアジーの白色テロのためにたおれた。私もまた日本共産党員であるがために、他の理由は一つもなく、ただそのゆえをもってのみ、この法廷に立たされている。

その日本共産党、わが日本共産党は、はたして何をなしたか。いまここに日本共産党の過去——われわれが逮捕されるまでの活動を具体的に述べて、このことをあきらかにしたいと思う。

私のいまなさんとするとところは、しかし、党史を具体的に組織的に述べることではない。党史なるものは、われわれにとって、党にとって、したがってまた日本のプロレタリアートにとって、きわめて重要なものである。なぜなら、一国の共産党の歴史はその国における階級闘争の最高の経験と教訓とを集中したものである。もっとも階級意識のある、もっとも進んだ、もっとも鍛錬された労働者階級の結成、その闘争、その各種大衆団体におけるまた党内部における活動とそのはたしてきた任務、あるいは闘争の発展のうちにあらわれた種々の分派および分派活動ならびに党内に生じた諸問題——これらを総括して党史をあむならば、それはプロレタリアート

の階級闘争の発展のうえに、革命運動の発展のうえに、きわめて貴重なものをあたえる。私は党史を軽んずるがためではなくて重んずるがゆえに、いまこのブルジョアジーのおこなう階級裁判のもとでは、重要な党史を述べる時機でもなく、また所でもないと信ずるゆえに、ここに党史を述べることはしない。いまわれわれの念願とするところは、この階級裁判にたいする闘争をもって全体の階級闘争に参加し、日本プロレタリアートの運動の歴史のページをこの法廷における行動によってつくらんとすることである。

この法廷は階級闘争の一場面以外のなものでもない。日本の国家権力はこの法廷を、徹頭徹尾、階級闘争の場面たらしめている。見よ、法廷には巡査、憲兵、看守がみちみちているではないか、われわれは鉄の手錠によってはこぼれ、法廷に立てば発言を封ぜられ、ことごとく公開禁止をもってせまられているではないか。

われわれを目して、法廷において大言壮語するといふものがある。はたしてしかるか、いな。われわれはいかなるばあいにも階級闘争をやめるはずはなく、つねに階級戦士としてブルジョアジーと闘争するものである。この階級的法廷に立ったときにも、また断頭台上の最後の瞬間においても、われわれ共産党員は階級闘争をやめるものでなく、つねにその先頭に立つものである。しかしながら、いま百人たらずの傍聴人をまえにして大言壮語もってみちたれたりとするものではない。われわれはこの法廷において敵から挑戦されている。酷烈な抑圧のもとに挑戦されている。この法廷において言論を抑圧するならば、われわれは一言もいふ必要はない。われわれがこの法廷に立って毅然たることそれ自体が、大衆にたいする大きな宣伝となり煽動となることを信

じている。われわれは、言論の抑圧を回避してその範囲で大言壮語しようなどという、けちくさい考えは毛頭もっていないのだ。ちかごろ聞くところによると、日本共産党をもっとも破廉恥な方法でうらぎった変節漢、解党派は、われわれが法廷でいたずらに大言壮語している、解党派はそんなことをせずに地下にもぐって闘争をするとかいつているとのことである。今日まで裁判長がわれわれ同志にたいしてとった言論圧迫の態度は暗々のうちに解党派の言と合致する。これははなはだ興味あることだ。法服の形をかりている日本ブルジョアジーの権力と解党派との合致をしめすものでなくてなんであろう。

壇上にある裁判長の背後にブルジョアジーの権力のあるごとく、われわれの背後には、一言も発することをゆるさず墓場の静けさをまもる聴衆を通じてすら、せまりつつある階級闘争の波が、広大な大衆の闘争が、われわれを支援していることを直接に感ずる。われわれのここに述べることとはブルジョアジーの挑戦にたいする絶対にかけることのできない、やむをえざる、かつ忍耐を要求される闘争であって、たんなる大言壮語をもって宣伝するというのがごときものではない。われわれの背後にある大衆は、ブルジョアジーがわれわれに臨みわれわれを断獄せんとすることをはたしてゆるすべきかいなかを、もっともよくさきんじて判断するであろう。

われわれは日本共産党の真実をおおわんとするものではない。プロレタリアはけっして真実をおそれない。共産主義者こそもっとも真実を愛するものである。真実をおそれ、または回避し、ゆがめるものは、大衆を抑圧し搾取し隷属せしめることによってのみ生活をたもつブルジョアジーと、そのブルジョアジーの尻尾についている社会民主主義者どもとである。彼らは日本共産党

についてあらゆる恥しらずの虚偽、欺瞞、捏造をたくましくしている。われわれはこの虚偽、欺瞞、捏造をぬきだして党の真実をしめさねばならぬ。もちろん、党の機密事項および党の諸組織、ならびに党の諸機関の内部においてのみあつかわれるべき党内問題については、一言も述べられるわけにはゆかぬ。それは、共産党の、プロレタリアートの利益のために、絶対に必要なことであるからだ。

ブルジョアジーは日本共産党を火つけか泥棒か人殺しの団体かでもあるようにふれまわり、陰謀、大逆、売国、国賊とあらゆる悪名をおいかぶせ、極悪非道の憎むべき恐るべきものであるとして、共産党員に極刑をもって臨んでいる。いな、それで満足するものではなく、もしできることとなら、日本共産党員と日本共産党を支持する革命的労働者・農民その他の同情者を、法律とか裁判とかいうまわりくどい手続きなしに、みなうちころしてしまいたいと思っている。実際において、ブルジョアジーは法律をもって「合法的」に共産主義者を迫害しているだけではない。彼らは「非合法的」にいっさいの手段をつかって共産主義者を迫害してきたし、また現に迫害している。

かくのごとくブルジョアジーから極度の憎悪と酷烈きわまりない迫害とをうけている日本共産党は、はたしていかなる「悪事」をなしたであろうか、またいかなる「恐るべきこと」をなしたのであろうか。そのなしたことは、そもそもだれのために恐るべく、だれのために憎むべきであったろうか。日本共産党ははたしてなにももの敵であり、またなにももの味方であるのか、このことこそ真に問題である。

三・一五以来日本共産党は、あらゆる弾圧にもかかわらず、つねにますます発展しているのはなぜだろうか。十人の黨員が逮捕されれば、百人、二百人の新しい黨員がつきつきとあらわれて、ますますブルジョアジーの恐るべき敵となつてゐる。共産党はなにゆえになにもをもつてもころしえぬ不死身のものなのだろうか。それは、共産党はプロレタリアートの党であるからである。プロレタリア階級が存在するかぎりには、またそれが成長するかぎりには、その前衛たる共産党は存続し成長し発展するものなのである。

プロレタリア階級は資本主義社会の産物である。現在の日本の社会は資本主義社会であり、資本主義の社会はブルジョアジーとプロレタリアート、この二階級の階級対立を根幹とする社会である。ブルジョアジーは社会的な生産手段を私有独占し、国家権力を掌握し、これによってプロレタリアートを搾取し隷属させてゐる。プロレタリアートは、社会のすべての富を生産するにかかわらず、自分では労働力のほかなんら売るべきものをもたない。主人にして搾取者たるブルジョアジー、被搾取者にして賃金奴隷たるプロレタリアート、このあいりれない階級の対立してゐる社会が今日現にある日本の社会である。かくのごとき階級社会の根本的な否定者、反対者、徹底的な革命的階級はすなわちプロレタリアートであつて、資本主義社会を根底から掘りくずす歴史的任務をもつてゐるのである。したがつてプロレタリアートは過去の階級でなくして未来の階級である。未来はプロレタリアートの党である。プロレタリアートの党たる共産党は、ブルジョアジーの、つさいの支配の転覆、プロレタリアートの独裁の樹立、社会主義の建設という歴史的偉業の指導者である。それゆゑに、共産党はプロレタリア階級の存在するかぎり不死身である。共産党がプロレタリアートの党たることはつぎのことを意味する。第一、人類の歴史において

最後の階級社会である資本主義社会そのものなかにふかく根をおろしてゐるために、共産党は勝手気ままにつくつたりこわしたりすることはできないものである。第二、共産党は労働階級の前衛であり、広範な労苦大衆のもつとも信頼すべき味方であるとともに、ブルジョア、地主らいつさいの搾取者の徹底的な敵であること、第三、共産党はブルジョアジーの規律、現在国家の法律に服従するものでなくこれに敵対するものであり、ただ国際的プロレタリアートの規律——これはけつして抽象的なものでなく、もつとも具体的にコミンテルンの規律に集中的に表現されてゐる——にのみ服従し拘束されるものであること、すなわち共産党がブルジョアジーにたいして非合法であるのは、まったくプロレタリア階級本来の性質であり、自国のブルジョアジーに反抗して万国の労働者が団結することは、いずれの国のプロレタリアートにとつても無条件の信条である。

日本共産党にたいする日本ブルジョア政府の迫害弾圧は、階級対階級の闘争すなわち政治的闘争である。日本共産党と日本ブルジョア政府とのあいだの闘争は、公然たる権力のための闘争、権力争奪の闘争であつて、他の犯罪的事件でもなく、またいわゆる社会問題というがごときものでもない。ブルジョアジーはこの真実を労働者・農民の大衆が知ることをおそれる。このために彼らは、日本共産党にたいして野蠻酷烈な弾圧をくわえるばかりでなく、ありとあらゆる悪辣な下劣な中傷讒誣をこころみ、日本共産党はプロレタリアの味方ではなくて敵であるかのように見せかけようとして、苦心惨憺してゐるのである。

このブルジョアジーの仕事をつたすけるのに頼もしい友人として、彼らは社会民主主義者をもつてゐる。彼ら社会民主主義者は、ブルジョアが直接手のおよばない労働者のあいだに、プロレタ

リアートの革命的組織でありその集中的な指導者である共産党にたいする不信をまきちらして、その勢力の破壊につとめ、そして裏切り社会民主主義政党によってプロレタリアートをブルジョアジーにむすびつけようとするのだ。

数年前までのように、日本共産党がその政綱を公然とかかぎて大衆のうちに活動することをしなかつた時代ならば別であるかもしれぬが、すでに共産党が公然と大衆のうちに活動している今日においては、ブルジョアジーと社会民主主義者とのいっさいの努力もむだである。彼らの共産党にたいする迫害憎悪が強いついことは、大衆の共産党にたいする信頼が強いついことをしめすものなのだ。

さて、日本共産党ははたしていかなる「悪事」をなしてきただろうか。これから悪事の数々を述べるのであるが、その主要なものにとどめる。しかし、日本共産党の「悪事」をあざやかにしめすためには、プロレタリアートの敵であるブルジョアジーがいったいどんな「善事」をしたかを述べる必要があると思う。日本共産党は相手なしの一人相撲をやつたのではない。敵手ブルジョアジーととつくんでたたかつたのであるから、敵がどんな手をつかつたかを述べることは、日本共産党がどんなことをやつたかをあきらかにすることになる。

以下、日本共産党の重要な発展の時期をわけて主要な点を述べる。まず、日本共産党はいかなる時代にうまれて闘争し成長してきたか、今日、われわれが逮捕されるまでの全時代の総括的な姿を述べようと思う。

## 一 日本共産党の成立

日本共産党は今日（一九三一年）までに九カ年の生活をへている。この間、日本共産党はコミンテルンの一支部として終始一貫して存している。ブルジョアジーは日本共産党が幾度か無連絡につくられたかのようにいうが、これは、徹頭徹尾、欺瞞である。日本共産党は、ブルジョアジーの強圧のために幾度か打撃をこうむり、また党内にながれいった小ブルジョアの日和見主義のために発展をさまざまげられ後退せしめられ、またあるときには党組織の解体にまでいったこともあつたが、しかし日本共産党は、コミンテルンとともに存続し、その一支部として生成発展の道をたどつてきている。

ブルジョアジーと社会民主主義者とは、日本共産党は特定の個人——社会主義者の巨頭連とか思いもかけずに出現した天才のようなものによつてひそかにつくられたもので、その巨頭とか天才とかが左右している徒党だとか、また日本共産党はえらばれた少数者のもので大衆にはかたく門戸をとぎした陰謀団体だとかいつている。これはあきらかに悪宣伝である。日本共産党はブルジョアジーにたいして闘争する日本の労働者階級のうちの革命的勢力がつくりあげ支持し発展させたものである。また実際において、日本共産党の成立から発展のあいだに、もっとも献身的な努力をささげたものは、有名な社会主義巨頭だとか「天才」だとかではなくて、無名の労働者戦士たちであつた。また日本共産党が、ブルジョア政府にたいして秘密結社であること、すなわち

非合法の党であることは、けっして特殊な陰謀的徒党であることを意味するのではない。広大な大衆を革命に動員しなければならぬ共産党はけっして陰謀的徒党たることをえないものなのだ。また、日本共産党は日本の国情にあわぬ、日本とは無縁のまったくの外来物である、とブルジョアジーはつねにいつており、泉二刑事局長のごときは「日本共産党の犯罪は思想的内乱罪であり天人ともにゆるさざる国賊である」といつている。社会民主主義者どもはその尻尾について、日本共産党は日本の国情に合致しない、日本の特殊性を無視している、とこのんでいつている。そして、彼ら社会民主主義者どもは、日本の国情に立脚したと称する裏切的無産政党、社会民主主義政党をつくり、ブルジョアジーの代理機関となりはてている。しかしながら、おそるべきことには日本共産党ほど日本の国情にふかく根をおろした政党はほかにないのだ。日本の現在の国情はブルジョアジーとプロレタリアートのあいだの階級闘争の激化したものにほかならず、その日本プロレタリアートの党こそは日本共産党なのである。日本共産党はけっして偶然な産物ではない。勝手につくったりこわしたりすることのできるものではない。日本共産党の存在と発展とを基礎づける一定の事情が厳として存在するのである。

## 1 国際情勢

国際情勢をみると、一九一四年から一八年にいたる残酷な世界大戦は、最初の国際的矛盾の大爆発であった。そのときからは、偉大なる指導者レーニンのいつたように、戦争と革命との時代であった。世界的規模におけるブルジョア独裁からプロレタリア独裁への転換時代である。一九一七年、ボリシェヴィキにひきいられたロシア・プロレタリアートの革命が勝利をえて、今日の

ソヴェト社会主義共和国同盟が樹立され、ここに世界におけるプロレタリアートの国家がはじめて現出した。

かくて、世界は、一方ますます破滅にむかう資本主義の世界と、他方なにももの力をもつてとどめることのできない社会主義建設の世界と、この二つの世界に分裂した。またソヴェト権力をその国内いたるところに樹立している中国革命をはじめとして、世界の植民地・半植民地においてますます発展している革命は、帝国主義の基礎をゆりうごかし掘りくずしている。さらにまた、資本主義的生産合理化があらあらしく強行されているが、それもついには資本主義永遠の安定をいわうものではなくて、ますます資本主義の矛盾を深化し拡大し、いまやなんびとの目にもかくしきれない世界大恐慌をきたしている。

中国においては各軍閥のあいだの内戦がたえまなくおこなわれて何十万という中国民衆が犠牲にされているが、この内戦は、じつはそれぞれの軍閥の背景にある日本その他の帝国主義国家のあいだの国際的戦争なのである。この戦争には日本の帝国主義者どもは積極的に参加しているのだ。また中国の革命にたいしては日本をはじめ帝国主義者どもは口実をえてしばしば出兵しているし、中国の沿岸や揚子江のような大河にはつねに、日本の駆逐艦、砲艦その他が遊弋している。そして、日本の兵卒——労働者・農民——がこのために多く犠牲にされている。

またこの時代には、第二インテリゲンチヤの裏切り英雄どもが、世界大戦とともに社会主義を弊履のようになげすめて、ブルジョア権力の防衛者となり、戦後にはプロレタリア革命の鎮圧者、植民地革命運動の抑圧者の手先となり、ブルジョアジーの政府——たとえばドイツその他ののごとく——の一員となってプロレタリア革命運動にたいする最大の公然たる防壁となった。

レニンは、世界大戦中に第二インターナショナルの崩壊を宣言し、第三インターナショナルを創立した。<sup>(五)</sup>コミンテルンは、プロレタリア革命のための、またプロレタリア独裁のための世界党として、世界の植民地・半植民地の民族、もつとも搾取され抑圧されている民族の力つよい楯として、世界革命の総司令部として、ポリシエヴィキの光輝ある伝統によってつねにいつさいの日和見主義を克服しながら年ごとに強大をくわえている。

こういう時代においては、プロレタリアの政党すなわち共産党のみが革命党であり、またコミンテルンの支部たるもののみが共産党なのである。

こういう国際的事情のうちにはわが日本共産党は成立し闘争し発展してきたのである。

## 2 国内情勢

さて、日本共産党が創立されて以来今日まで、すなわち帝国主義世界戦争が勃発してから今日までの、日本共産党の全生活を基礎づけている国際的条件を述べた。これから国内事情を中心として述べたいと思う。

日本の資本主義は世界大戦を境としてまったく面目をかえた。日本の資本主義は海外市場と資源とを強奪して飛躍的な発展をとげたが、それは同時に、内部矛盾の激しい進展をともしなした。この矛盾は戦後にするどく日本の全社会のうえに、連続的な恐慌、不況、不景気としてあらわれた。一九一八年（大正七年）の米騒動を最初の烽火として、一九二〇年（大正九年）の恐慌、二三年の大震災恐慌、さらに二七年（昭和二年）の金融恐慌、そして今日われわれがみるとおりの大恐慌のなかにひきずりこまれているのである。<sup>(六)</sup>

戦後の数年間は日本資本主義の生産力もなおいくぶんか発展の道をたどったが、内外の事情はその発展をはばみ、むしろ縮小させる方向にむけた。中国革命におびやかされて市場は狭小となり、農業は年ごとに破滅的危機におちいり、重要工業ことに鉄工業のごときは年とともに不況の度をくわえている。雇用労働者の数もこの間に絶対的に減少し、労働者の生活水準は資本主義によつてはたかめられず、年ごとに奈落の底におこまれていっている。こういう情勢に面して、日本ブルジョアジーは内外において、経済的に政治的に、また武力的に平和的に、合法的に非合法的にあらゆる方法をつくして危機を切りぬける策を講じたが、それは結局、労働者・農民および朝鮮、台湾、満州等の植民地の労苦大衆の犠牲によつておこなわれたのである。それでもなお危機をしのぐことができず、経済的・政治的危機はいよいよふかまり、今日のような大恐慌のまったたなかにおちこんでいる。これは必然のことであつて偶然の不幸といつたようなものではない。資本主義制度が日本に存在するかぎりまぬかれることのできない必然のものである。

かように矛盾はふかまり危機はせまってきた。この過程はまた同時に資本の集中独占をつよめる道であり、一にぎりの金融資本家に政治的・経済的権力が集中される過程であつた。いまや日本には、一方に労働者・農民や植民地大衆の生血を吸って身うごきできぬほどにふくれあがった超大ブルジョア（三井、三菱、住友、安田、川崎、大倉等）があり、他方に飢餓線上にあえぐ数千万の大衆がある。しかし、資本家は満足するにたるだけの利益がないという理由をもつて、巨大な社会的に有用な生産力、工場や機械を休止し閉鎖し荒廢にまかせている。また農村の状態をみると、もう今日の日本国家の指導者であり支配者であるブルジョアジーの手をもつては、いかんともなしがたい状態にある。大地主の土地を没収するよりほかに方法がないほどに切迫し

た状態、農業革命の危機がせまりにせまってきている。

三井、三菱などの大ブルジョアから金を出させることもできず、さりとてますます巨大な額にのぼってゆく軍事費には一指もふれることもできず、日本の国家財政はいままさに危機に瀕し破綻に面している。また、日本の資本主義・帝国主義の基礎をなしている台湾、朝鮮などの植民地も満州のような半植民地も、もはや昔のように「うまく」はゆかず、日本の資本主義はみずからをささえる力をうしない、ブルジョアジーの国民経済体系は瓦解の寸前にある。そこで、ブルジョアジーはますます狂乱的に破壊的な帝国主義戦争に逃れ道をもとめてやまないのである。

すでに数年前から日本の帝国主義者は中国にたいして強盗戦争を遂行しているが、さらに、太平洋をはさんでの第二の世界大戦争！これに日本帝国主義は大立物としての役目を演じなければならぬようになっているのだ。この帝国主義戦争、この世界的な破滅的な残酷な世界帝国主義戦争は、すでに日本の陸海軍その他の帝国主義者の現実の日程にのぼっている。かくて、一方では経済的恐慌、労働者・農民大衆のたえがたい窮乏、隷属、そして一方では破壊的な残酷な戦争！この両者は形こそ異なれ、ひたすらに利潤を追求するに余念のない盲目的に貪欲な資本主義の産出した、つながりあった双生児なのだ。

わが日本共産党はかかる情勢のもとに生まれ、生活し、闘争し、発展してきたのである。私は、いままで日本共産党の基礎を条件づけた世界情勢および日本国内の客観的な情勢を簡単に要約した。さらに、今日の日本の社会、国家を支配するブルジョアジーが具体的になにことをなしたかを述べるのが、日本共産党の全発展、全生活を理解するのに必要であると思う。

### 3 日本のブルジョアジー

日本ブルジョアジーはかかる時代のうちに巨大な資本を蓄積してきた。労働者大衆を搾取して得た資本をさらに利用していっそうひどく労働者を搾取し、資本をいよいよよゆうたかく積みたてた。世界戦争の前と後の簡単な数字によってこの点をみよう。

全国の会社払込資本および出資額の総計指数についてみると、世界戦争直後の一九一九年（大正八年）を一〇〇とすれば、戦前の一九一四年（大正三年）はわずかに三四、すなわち戦後は戦前の約三倍であり、さらに最近の一九二八年は二二〇強をしめして戦争直後の二倍強、戦前の六倍半になっている。この数字はもとより大略をしめすものであり、なお他の条件（物価等）をも考慮にいれなければならぬが、うたがいもなく資本の急速な蓄積をものがたっている。また、この巨大資本はますます少数の大ブルジョアの手に集中している。すなわち、払込資本五〇〇万円以上の大会社は戦争前には会社総数の〇・三七％で総払込資本の三八・五六％を、数では〇・四％のものが資本では四〇％をあつめていることをしめし、戦争前ですら資本集中度の高いことをものがたっているが、戦争直後には、会社総数の一・四％で総払込資本の五三・六％をしめ、さらに最近一九二八年には、会社数の一・七％強のものが総払込資本の六五％というものをしめている。資本の集中はまた労働者の集中でもある。一九二八年度において五〇〇人以上使用工場は工場数において全体の一％で労働者総数の三四・六％すなわち三分の一以上をあつめている。しかもこれは五人以下の労働者使用の鉾山工場をのぞいたものであるから、集中度がいかに高いか想像にあまりがある。また資本の集積のありさまも会社払込資本などではよくその真相をつたえ

ることができるものではなく、実際においてはわずかに数個の巨大ブルジョアたる三井、三菱、住友等が数多くの会社工場を直接に経営しまたは間接に支配しているのであって、三井系、三菱系の会社が全数の三〇%くらいを事実上左右しているのである。

資本はますます少数の大ブルジョアの手に集中され独占され、少数の金融大ブルジョアが全国民生活、経済生活、政治生活を支配するようになった。ブルジョアは特殊の事情によってはやくから地主勢力と反動的に結合し、今日、古い地主的な官僚的な半封建的な勢力との共同権力において確実に指導権を掌握している。政党内閣が戦時戦後の資本主義の急激な嵐のような発展のときに生まれたのもけっして偶然のことではない。日本ブルジョアはたんに衆議院や内閣だけでなく、半封建的なもつともおくれた残酷な抑圧形態である君主制、貴族院、枢密院などの支配形態をも、彼ら一にぎりの金融ブルジョアの利益のために、大衆を抑圧し弾圧する鋭い武器として使用している。

とくにブルジョアは階級敵なるプロレタリアート——彼らの支配を根底からくつがえす闘争をもつておびやかしているところの——にむかって激しい抑圧の武器をさしむける。さらにまたこの危機にさいしてもつとも残忍酷薄な産業合理化を強行している。この産業合理化はいかにも全体の利益のためというふうにみせかけるが、事實はまったく労働者の犠牲によってのみおこなわれるのである。彼らのおこなう産業合理化とは、労働の強化によって労働者を生きた機械のごとくにし、工場を労働者の棺桶とする、強烈な搾取にほかならぬのである。労働者は強烈な労働強化によって心身ともに非常に疲弊し、しかもその労働力をもりかえすために必要な賃金は絶対にあたえられないために、生きながら工場のなかで骨と皮とにされている。また、産業合理化

は非常に多くの労働者を工場から街頭においだし、莫大な失業者をつくった。この失業者は資本主義制度の存続するかぎりにはふたたび雇用されない構成的な失業者である。

ここに産業合理化にかんする資本家のことばをきこう。日本鋼管会社では、鋼管一トンあたりに要する職工数が一九二〇年には一〇人余であったが、二四年には生産の合理化がすすんだ結果として七人、二七年には五人、二八年の上半期には四人に減じた。この会社の重役笠原某はつぎのようにいつている。「日本鋼管会社の生産費切下げの原因の第一は気分の緊張であつて、これがいちばん能率増進に役だつものである。職員や職工の全部が会社の興廢を感じながら仕事に従事すれば、できないと思つていたことでもできる。第二は職工の熟練であり、第三は設備の改良であるが、設備の改良といつても豊富な資金をかけておこなうのではなく、いままで三人の職工をつかつていた箇所を二人半でまにあわせるというように、どことなく全般にわたつて設備をととのえるのである」と。すなわち、このことばは一にも二にも搾取の強化こそが資本家のやる生産合理化であることをかたつていつている。

つぎに農民にたいしてはどうか？ 日本の権力をにぎっているブルジョア政府は農村においては地主の利益擁護に汲々としていつている。小作争議において農民にくだす断固たる弾圧はここにくだなくだしくいうまでもないが、農村には莫大な帝国主義的租税の重圧を課し、また莫大な借金をもつてしぼりつけ、そのうえ、農民にとって絶対に欠くことのできない肥料までもブルジョアは独占価格によつて農民をしぼりあげていつている。しかも三井と三菱とだけでほとんど全肥料とくに硫酸を独占していつている。ブルジョアは地主の利益だけを全力をつくしてまもり、小作人や貧乏な百姓のごとき農民の大多数を抑圧し搾取し鉄鎖でしぼりつけていつているのである。



日本のブルジョア階級はすべての労働者・農民の運動にたいしてますます酷烈な弾圧をくわえている。ストライキや農民闘争にたいする警官隊の武装襲撃、必要に応じての軍隊の出動、暴力団の隠然公然の使用、労働者・農民の資本家・地主にたいする闘争を酷烈に抑圧するためのいろいろな法律法令（種々の労働争議調停法や農民調停法などは調停に名をかりた抑圧の法令である）、治安維持法——われわれはいまそれによって起訴されている——労働者全体の利益のために徹底的に革命的にたたかうものを絞首台上にのぼらせることを目的とした治安維持法、これらがいかに労働者・農民全体を抑圧弾圧するものであるうか。治安維持法の犠牲者はすでに二、三〇七名、治安維持法以外のいろいろの法令、たとえば暴力行為取締法違反、騒擾罪、傷害罪などで犠牲になったものは、昨年の後半以来部分的に判明したものだけでも三一一名にのぼっている。これらの犠牲は同時に、労働者・農民の闘争、ストライキや小作争議に非常に影響してその闘争力をそいでいる。もしこれらがなかったなら労働者・農民の闘争力はより強大化されていたに相違ないと、ブルジョア新聞ですらいつているところである。

つぎに、ブルジョア階級は革命中国にたいして兇暴きわまる軍事干渉をおこなっている。数次の中国出兵と中国の労働者、農民、兵卒の大殺戮、日常不断の軍事的侵略、また新旧の中国軍閥——中国労働大衆のゆるすことのできない残酷な軍閥と結託してもっとも憎むべき野合によってそのふところをこやしている。また日本の植民地、朝鮮、台湾の革命的反乱にたいしていかに酷烈残忍な弾圧をくわえたかは、ここにいうまでもないところである。

さらにこの時代において、日本のブルジョア階級はもっとも熱狂的に帝国主義戦争の準備に夢中になっており、軍備拡張競争の大立物となっていることは、周知のことである。豺狼のごとく

猛々しい帝国主義者は軍備の大拡張をおこなっている。軍縮会議こそしばしばひらかれるが、実際の軍縮などはどこにも影も形もない。会議はただ労働者・農民を平和の宣伝でだましておいて、いきなり戦場にひっぱりだし、彼らの貪欲の犠牲にするためだけのものだ。日本の軍事費も二一年のワシントン会議ののちは表面では減少しているようにみえるが、実際には累年増大している。たんに陸海軍予算の面だけみたのではわからないが、種々の形で戦争準備のために労働者・農民の膏血からなる国庫支出を増大していることはうたがいない事実である。ロンドン会議で日本は保留財源が五億円うかびでたとかいつているが、じつはうかんではいなくて、うち三億七千四百万円という莫大な金額は海軍補充計画に使用されることになっている。このことについてはブルジョア的な世論がちょっと不平をならべたてたことがあった。ブルジョア階級が平和と軍縮の宣伝に汗だくになっているとき、社会民主主義者たちはすぐその尻尾にくつついて平和主義をまきちらしている。しかし、こんなことでは帝国主義戦争にたいする日本の準備が刻々にすすんで、今日明日にも、どんな導火線でもすぐに爆発する形になっていることをすこしも否定することはできない。一方において平和を説いていながら、それよりもつよく忠君愛国主義、排外主義をさかんに鼓吹しているではないか。この愛国主義、排外主義の鼓吹は平和主義の宣伝と相呼応して、労働者・農民をブルジョア階級の利益のために戦場にひきだし大砲の餌食にするためをやっているのだ。帝国主義国が相対立しているこの世界においては帝国主義戦争は不可避である。たとえば、ドイツは賠償金および債務の支払延期をゆるされたが、その足もとからはやくも危機におちいり、大銀行は支払停止をし、そしてフランスの軍隊はドイツの国境に集結するようになった。これは世界戦争の現実の糸口である。帝国主義戦争はいたるところに大きな口をあけてい

る。

帝国主義戦争にたいする闘争はわが党のみが遂行してきた。日本共産党はその幼弱な時代においてすらも、日本の中国にたいする現実の戦争に反対してあらゆる手段をもってたたかってきた。済南事件の当時、日本共産党と中国共産党とは共同声明を発表し、出征軍隊にたいする共同宣言を履行し、またそののち第三師団の出兵にたいしては帝国主義戦争反対をさげぶとともに、労働者・農民は戦争をたたきつぶして自国のブルジョア国家権力を転覆する以外には自分たちの利益をほんとうにまもる方法はないことを宣伝した。しかしながら、なお力のおよばないものがあった。今日戦争の危機はますます深刻となっている。国際的な反帝国主義デーは八月一日である。全世界の労働者は共産党の旗のもとに、この帝国主義戦争——世界の労働者・農民や植民地民族を殺戮してただ少数資本家どもの利益をはかるための帝国主義戦争にたいして、大衆的デモによって抗議し反対しこれを粉碎しなければならぬ。戦争がはじまったならプロレタリアートはブルジョア政府をたおして戦争を内乱へ転化しなければならぬ。この共産党の主張を全国の労働者・農民の目のまえにしめすことが必要である。

#### 4 日本の社会民主主義者

最後に重要なことは、ブルジョアジーがあらゆる方面における酷烈な搾取圧制を今日では自身の手だけでやりとおすことができなくなったので、これをたすける頼もしい友人を必要とするようになったことだ。今日の時代では、労働者のなかにおけるブルジョアジーの代理人たる社会民主主義者、あらゆる形の社会民主主義者たちが、ブルジョアジーの労働者・農民にたいする抑圧

支配とその危機のきりぬけとをたすけている。これがなくては今日のブルジョアジーはその支配を維持することができないのだ。獅子身中の虫として決定的に労働者の利益をうらぎり、労働者大衆の利益をブルジョアジーに売りわたすことを任務とする社会民主主義者がなかったならば、ブルジョアジーはとうていその支配を維持しえないのだ。いかに社会民主主義者がブルジョアジーの支柱となっているかは、小はストライキの例から大は戦争にたいする態度において明瞭である。

この社会民主主義者のなかには、今日のように経済的・政治的危機が切迫したときになると、かつては労働者階級のもっとも強い組織である共産党にくわわっていないながら、階級闘争が尖鋭化するとともに共産党をうらぎって逃げだした社会民主主義者——もっとも右翼的なものもつな君主主義者であり「愛国」主義者であり排外主義者である社会ファシスト的解党派がある。こういう社会民主主義者は、危機がせまればせまるほど、階級闘争が激化すればするほど、ブルジョアジーの非常に頼もしい頼みがいのある援助者となるものである。社会民主主義者はすべて天皇主義者であり忠君愛国主義者であり排外主義者であり「平和」主義者である。また、彼らは一様にブルジョアジーの戦争遂行の大きな援助者であり、彼らなくしては今日の反動的な戦争はおこなわれない。第一次世界大戦において、第二インタナショナルの英雄たちは大言壮語をもって戦争反対をさげびながら、大戦勃発とともにいちはやくも戦争予算に賛成しうらぎりさってしまった。この裏切りがなかったならば、あれほどの大殺戮戦は遂行されなかったのだ。今日においても社会民主主義者の援助がなくては戦争遂行が困難なことを知っているのだ。ブルジョアジーはあらゆる方法で社会民主主義者を愛し、社会民主主義者もまたこの愛をうけいれている。最近大合同

したと称する全国労農大衆<sup>九</sup>なるものの綱領をみると、労働者・農民大衆の味方であるかのよう  
な名前こそつけているが、そのうちに帝国主義戦争反対の片言隻語すらもない。それどころか、  
そこには労働者・農民の世界的入国および住居の自由確立という項目がある。これは輝かしい労  
働者・農民の社会のために社会主義建設の発展をとげつつあるソヴェト同盟への入国自由の要求  
かと思うとさにあらずで、前後をよく読むとアメリカにおしにかけて入国する自由を要求している  
のだ。とりもなおさず、日本帝国主義者の対アメリカ戦争政策の一部をたくみに主張しているの  
だ。この全国労農大衆党も演説会では帝国主義戦争反対を景気よくさげぶかもしれない。が、実  
際の行動、闘争では、これをうらぎって、共産党および革命的労働組合、赤色組合の反帝国主義  
戦争闘争の組織を妨害しサボタージュし、官憲のかわりをつとめて労働者・農民大衆の参加をお  
さえるのに狂奔するのだ。どんな名前をつけようとも、社会民主主義者は労働者・農民大衆の憎  
悪すべき敵であり、ブルジョアジーのたいせつな味方である。彼らはまたソヴェト同盟の敵でも  
あるが、これはここでは述べない。彼ら社会民主主義者はさらにまた、中国革命にたいする日本  
帝国主義者の干渉を公然隠然と幫助しており、また中国革命をうらぎって中国の労働者・農民を  
幾百万も殺戮したものの盟友でもある。また彼らは、日本の帝国主義者が朝鮮、台湾などの  
植民地民族にたいする鉄鎖による圧迫の支持者であり、「植民地の解放、植民地の独立」をみずか  
らかかげることはおしげをふるうが、このためにたたかうもの<sup>一〇</sup>にたいしてはじつに勇敢に反対  
するものなのだ。

さらに、これら社会民主主義者は資本家的な経営、とくに「産業合理化」のもっとも忠実な協  
力者である。産業民主主義というようなお題目のもとに、いかに彼らが資本家に忠実な労働者圧

迫の代理機関となっているかは、労働総同盟、海員協同会などの行動をみればあきらかである。  
また彼らは、労働者・農民の革命的な運動にたいするブルジョア政府の弾圧、白色テロを陰に陽  
にきわめて熱心に支持している。革命的労働者を組合からおいだし、また工場では、挑戦的な資  
本家と闘争する労働者を工場主に密告し警察にひきわたし監獄においこむ役目も演じている。日  
本の社会民主主義者はもっとも国際的にりっぱに顔のきく社会民主主義者である。日本の今日で  
はこんなに国際的なものは他にはない。

## 5 日本資本主義の発達とプロレタリアート

日本共産党は一九二二年七月に創立された。わが党は、たんに日本の共産党としてだけではな  
くて、世界プロレタリアートの党たる第三インターナショナルすなわちコミンテルンの日本支部と  
して創立された。そして今日にいたるまでコミンテルンの支部として終始一貫して存続し発展し  
てきたのであるが、日本の資本主義、日本の政治経済と無関係であるかというに、もちろんそう  
ではなく、その根底には日本資本主義の発展がある。日本共産党は日本のプロレタリアートの政  
党であるから、日本のプロレタリアートをうんだ日本の資本主義の発達についてここに簡単に述  
べたい。

六三年前の明治維新は日本の歴史上における一つの明白な革命であり、また「国体の変革」で  
あって、これによって日本資本主義は嵐のごとき急激な発達をとげた。後藤象次郎、福岡孝悌な  
どが慶応三年かに朝廷に出した建白書のなかに、「御国体を変革し」あるいは「国体の変遷」、「国  
体の一新」のことはもちいしている。治安維持法に「国体の変革」の文字があり、日本の国体は

万世一系不朽不変であるといっているが、明治の功臣たちは明治維新を「国体の変革」であるといっている。この変革は日本における生産の所有関係がかわったこと、すなわち封建時代と資本主義時代とは根底の生産関係がかわってきたことにもとづくのである。それ以来日本資本主義の発達はじつに目ざましいものがあつたが、この急激な発展はいわゆる天佑によるものであるか、または日本のブルジョアジーがとくに利巧であつたためであろうか。日本の資本主義の発達は、他のいずれの国にもおとらないむごたらしい犠牲、資本家の盲目的な利潤追求のためにプロレタリアが残酷な犠牲となることによつてのみなしとげられたのである。

第一には、明治の初年においては土地を農民からどしどし収奪し、また、高い租税をとりたて——当時ひきつづいて農民一揆がおこつたことによつてもわかる——あるいは高利貸によつて農民を収奪搾取した。

第二には、労働者にたいして野蛮残酷な搾取をおこなつた。飢餓的な低い賃金、長い労働時間、幼児やかよわい婦人など抵抗力のない労働者の酷使、また地獄のような監獄部屋や紡績工場の寄宿者などの残酷な制度、これらによつて日本の資本主義は発達したのである。明治二十年から三十年ごろの神戸のマッチ工場では軸つけ作業のために五つ六つの幼い子供を使用し、いかに物価が安かつたそのころとはいへ、終日こきつかつて日給は一銭か二銭であつた。また、当時の紡績女工の日給は八銭二三厘、男工でも一七銭という低いものであつた。すこしすすんで明治四十年ごろになつても、紡績男工は四〇銭、女工は二五銭という低賃金である。労働時間は普通に一二時間と称しているが、実際はその二倍に近く、ばあいによつては二、三日も昼夜兼行ではたらかせることがしばしばであつた。こういう残忍酷薄な搾取によつて日本工業の花形であり輸出貿易の

大宗である紡績業は発達してきたのである。

第三には、かかる苛酷な労働条件を労働者にしいるためには、吸血的な法律や兇暴無比な警察が日本資本主義の発達にとつて絶対に必要であつた。搾取が兇暴酷烈をきわめるとともに抑圧もまた兇暴酷烈であつた。このことは今日の日本内地と朝鮮とをくらべればわかる。朝鮮の民衆を略奪し抑圧することは日本内地の労働者にたいするのよりもはるかに酷烈である。植民地朝鮮では日本内地でみることのできない兇暴な法律と警察とがある。朝鮮にはいまでも管刑というものが法律的に存在していると聞いている。また日本のブルジョアジーは国軍と称して労働者・農民大衆を戦争の犠牲においやつて植民地を略取し、その植民地民衆を徹底的に収奪し、これに徹底的な圧迫をくわえる。このことは朝鮮、台湾および名目はなんともあれ実際では日本の植民地になつている満州における明白な事実である。じつにこういう手段によつてのみ日本資本主義は欧米の資本主義と拮抗するまでに急速な成長をとげたのである。

日本のブルジョアジーはかかる成長をとげるとともに封建的な地主勢力と反動的な結合をなした。すなわち、兇暴な官僚的な政府はこの結合をあらわしている。一九二七年のコミンテルンの日本にかんするテーゼは、「一八六八年（明治元年）の革命は日本にブルジョアの発展の道をひらいた。だが、政治権力は封建的諸要素の手中、そして軍閥、宮廷閥の手中にとどまつた。そのばあい、日本国家の封建的特質はたんに伝統的残存物、旧時代の遺物であつたばかりではない。それはまた資本主義の原始的蓄積のために便利な道具となり、日本資本主義はその後の発展の全行程をも通じてたくみにこれを利用した」といい、また「旧日本国家のブルジョア国家への変質は二つの方向にそつておこなわれた。すなわち、一方では産業・商業・金融ブルジョアジーの比重

と政治的意義とが不断に増大し、他方において経済的諸原因および労働者・農民運動にたいする恐怖、そしてまた帝国主義政策の要求にかられて、封建的諸層と新興ブルジョアジーとの融合がきわめて急速に進行した」といっているが、まさにそのとおりである。

日本資本主義は世界大戦を一線として、飛躍的な発展をとげた。これはまえにも述べたが、海外市場の強奪、大正五年大隈内閣（加藤外務大臣）時代の中国にたいする強盗的な二十一カ条約の強制、国内労働者の極度の酷使による急激な生産増大と搾取の強化、——これらによって発展し、大戦を利用して一挙に大飛躍したのである。三井、三菱を筆頭とした大ブルジョアは、日本の労働者・農民、朝鮮、台湾、中国の労苦大衆の生血をあくことなく吸いとりて肥えふとったのだ。そしていまや日本ブルジョアジーは旧地主勢力を凌駕して日本帝国の主人になりすましている。一九二七年テーゼにおいても「近代日本は資本家と大土地私有者とのブロック——しかもそのヘゲモニーは前者すなわち資本家にある——によって支配されている」、また「ただしく現代の日本国家こそそのあらゆる封建的特質と残存物とにかかわらず、日本資本主義のもっとも集中的な表現であり……」といっているが、これまた、まさにそのとおりである。このことは日本をすこしでも進歩的にしたのではなく、かえっていっそう強烈な反動の鉄鎖で全日本をまきつけたのである。

以上述べたように、日本における資本主義の発展は目ざましく進展したが、これは同時にブルジョアジー対プロレタリアートの階級闘争をも非常に発展させた。すでに明治年間においても、若き日本のプロレタリアはいわゆる藩閥政府、専制政府に反対する自由主義的な大衆闘争に参加している。当時はかかる大衆闘争の公然また隠然の指導者はブルジョア政党であったが、実際の

兵卒としてはたらいたものは労働者である。日露戦争の大犠牲にたいして日本大衆の不平がたかまったとき、ブルジョアジーはポーツマス条約反対というスローガンで労働者の不平をはずしてしまった。そこにかの焼打事件のごとき大衆蜂起的なのがおこったが、ブルジョア政党者流はさんざんにプロレタリアをつかっておきながら、ただちに藩閥政府、官僚政府と妥協苟合してプロレタリアを路傍になげすめた。こういう例は他にも数多くあり一々あげるにいとまがないほどであるが、その最後のものは普通選挙運動であって、ブルジョアジーのプロレタリアートにたいする裏切行為のもっとも醜いものの一つであった。普通選挙を中心としたデモクラシー運動の大衆動員のさい、馬にのって先頭に立った尾崎行雄らはちよつとのあいだけ行列の先頭に立ったが、たちまちに労働者を警察や牢獄にひきわたして藩閥政府といかげんな妥協をした。

かかるあいだにも、明治から大正にかけて日本プロレタリアートは政治闘争にむかう一つの過渡的な経路をつんできた。むろん日本のプロレタリアートは世界のすべてのプロレタリアートと同様に、ときにだまされながらも、つねにブルジョアジーにたいしてたたかっている。プロレタリアがすこしでも資本家に反抗して自分の利益を主張すれば、資本家はただちに半封建的な国家機関の力を借りてこれを強圧し、新しくおこった労働者の運動、労働組合運動や社会主義運動をいっさい非合法だと宣告し抑圧した。

明治三十三年（一九〇〇年）にできた治安警察法によってその翌年には最初の社会民主党が禁止された。ついで明治四十三年（一九一〇年）の幸徳事件を機会として社会主義者にたいする迫害がひきつづきおこなわれた。かかる状態のもとに日本のプロレタリアートは闘争をつづけた。日露戦争当時には日本のプロレタリアートはまだほとんど国際主義をもっていなかったといつて

もよいほどに幼いものではあったが、帝政ロシアの第一革命の前夜、一九〇四年にアムステルダムにひらかれた万国社会党大会で、当時の日本の社会党の闘士片山潜——今日コミンテルンの輝かしい指導的地位にあるセン・カタヤマ——が、日本ブルジョアジーの敵国である帝政ロシアの社会民主労働党のプレハノフ——いまは裏切者の棟領とされているが——と堅き握手をしたのである。日本プロレタリアートの幼い時代に先覚者の一人が日本ブルジョアジーの敵国の社会主義者と握手したという事実は、日本プロレタリアートの光榮ある記憶である。

さらに大正七年（一九一八年）の米騒動に例をとってみよう。この米騒動は小ブルジョア指導者が奸商征伐というスローガンをもっておこなったが、その本質は日本資本主義の危機、世界大戦中に極度に発展した資本主義の矛盾の最初の爆発にほかならないのである。この米騒動がいかに野蛮的な方法で残酷に鎮圧されたかについてはここにかたならぬが、ここに注意すべきは、その当時まだ自己の組織された指導者をもたなかったプロレタリアがみずから先頭に立っていたるところにたたかった、ということである。米騒動の先頭に立って英雄的にたたかったのは労働者が中心であった。この米騒動があのような惨憺たる敗北をなめなければならなかったのはなぜであろうか。それは一に大衆蜂起の中心たるプロレタリア階級に組織された強い指導部、すなわちプロレタリアートの政党、共産党がなかったからである。大衆のかかる蜂起が共産党なくしてはいかにもみじめな敗北をうけるものであるかを、もっともよくしめすものであった。

また日本プロレタリアートにとって一つのもっとも記憶すべき事件は、一九一九年（大正八年）の三月における朝鮮の蜂起、かの万歳事件の名をもって知られている独立のための蜂起である。日本帝国主義のたえがたい鉄の圧迫のもとにおさえつけられていた朝鮮民族は、やむにやまれず

日本帝国主義の恐るべき軍隊のまえに蜂起した。そしていかに残酷な鎮圧をくわえられたか、ここにあらためていう必要はない。当時、日本プロレタリアートはこの朝鮮民族の蜂起にたいして積極的な援助をあたえることができなかった。これは日本プロレタリアートの朝鮮民族にたいする一つの恥辱である。しかしながら、今日においては日本プロレタリアートも成長して、朝鮮、台湾の植民地民衆、中国労働農民大衆のもっともよき信頼すべき忠実なる革命的盟友となりつつある。

## 6 党創立直前の時代

つぎに日本共産党創立直前の段階にはいる。まず社会主義同盟の時代について簡単に述べたい。まえに述べたような、労働者の数的増大と大工場の集中という客観的な条件と、その政治的・経済的闘争の経験および国際的経験によって得た主観的な条件の発達とによって、日本プロレタリアートが階級闘争のための一つの指導機関として、彼ら自身の政党を要求するにいたったのは当然である。

一九二二年（大正十一年）に出された過激社会主義取締法案は、日本労働者の階級的闘争への進出、なにかんなくロシア革命の影響をうけたボリシェヴィキのスローガンによる革命的政治闘争への傾向にたいして、日本ブルジョアジーが恐怖してそれを強圧するために出した最初の法令である。当時の日本プロレタリアートは、そしてすでに結成しつつあった共産主義者は、この法案に反対する大衆闘争の先頭に立って活動した。そして、一九二三年二月十一日の大示威運動によって、この過激社会運動取締法案なるものを粉碎したのである。同時に、これとやらんで三悪法

案と称せられた労働組合法案、小作争議調停法案をも、当時うまれたばかりのまだ幼く弱かった共産党に指導された大衆的示威運動によって粉碎させた。

この時期に労働組合の方向においては、組合運動が急進化して、アナとボルということばでいわれるほどに、労働者運動の陣営内に共産主義運動が發展し、政治的闘争もいちじるしくすすみつつあった。このとき一九二〇年十二月に社会主義同盟が組織された。これは無政府主義、共産主義その他の革命的な諸団体の合成体であつて、根本においてはプロレタリアートの政党としての力をもつものでもなく、またそういう性質のものでなかつた。が、すでに階級闘争の経験へた社会主義的労働者、自覚した階級意識をもつてきた社会主義的な労働者は、この社会主義同盟の中に自分たちプロレタリア階級のための闘争組織を見いだそうとして、その成立を歓呼してむかえ、数多くのものがこれに参加した。今日、日本共産党に活動しており、また指導者としてとらわれてこの席にいる労働者同志のなかには、この当時社会主義同盟に参加した同志たちが多くいるのである。

かかる先進的な労働者の熱烈な歓呼をうけてできた社会主義同盟であるがゆえに、当時の改良派組合主義者である棚橋小虎、麻生久——今日全国労働農大衆党の委員長とかいつているが——は、労働者の政治的要求に恐れをなしてこれに反対し、「労働組合へかえれ」という合言葉を労働者にあたえ、もつて政治的闘争への進出からひきもとそうとやっきになつた。また当然のことながら、当時のブルジョア政府も数ヶ月でこれを弾圧し解散せしめたのである。とにかく日本の労働者は世界大戦後に社会主義同盟をもつたのである（そのまえの明治時代の社会民主党および社会党はしばらくべつとして）。社会主義同盟は一つの試金石であつた。これによって日本の先進的

な労働者、階級意識のある社会主義的労働者は、党のない状態すなわち無党社会主義——たんに思想団体またはその連合体としてだけ存在するそういう無党社会主義がいかに弱いものであるかを痛切に体験して、思想団体やその連合体の社会主義同盟のようなものは、結局において無益であるばかりではなく、かえつて運動の發展にとってじゃまにさえなることを感ずるようになった。そして、一九二〇年の経済恐慌期およびその後の反動期において、資本家が労働者にたいしてとつた強圧的態度に抗争して日常経済闘争に勝利を得るためにも、いままでのようなことでは不十分であることを感知した。また分散的な親方的な改良的な労働組合運動を集中化し大衆化しさらに革命化するためにも、これまでの方法ではなにごとをもなしえないことを知るにいたつた。また、とくに無政府主義およびサンディカリズムあるいはアナルコサンディカリズムは日本プロレタリアートの階級的な政治的な發展を阻害するものであり、これを一掃するためにも一つの新しい力づよい指導的な中心を絶対に必要とすることを知るにいたつた。これは、日本の労働者が日本共産党を要求し、その成立のために根本的な動力となるにいたつた理由である。もちろんこれを促進し激成し發展させたものは、じつに国際的なプロレタリア運動の發展、ことに一九一七年ボリシェヴィキにひきいられたロシア・プロレタリア革命の影響であつて、それはじつにはかりしることのできないほど広大なものであつた。ロシア革命については、日本のブルジョアジーは世界のブルジョアジーと協力して若いソヴェト・ロシアを包囲して反革命的攻撃をおこなひ、また新聞や雑誌や学校や、その他あらゆるところで、あらゆる手段でロシアの革命党すなわちボリシェヴィキにたいして悪宣伝のかぎりをつくした。しかしながら、日本のプロレタリアは、このロシア革命こそ自分たちとつながるものであり、ロシア革命によって樹立された労働者農民

の国、プロレタリア独裁の国こそ労働者の国家である、という階級的な同情と好感とをしめした。これが日本ブルジョア政府のソヴェト・ロシアにたいする反革命的な干渉となり、一方シベリヤ出兵にたいする日本プロレタリアートの非常な憎悪と闘争の根源となったものである。勝利を得たロシア・プロレタリアートは日本プロレタリアートの兄弟であり、彼らにおしえられかつ鼓舞されるのだということ、すすんでは尊敬すべき階級的兄弟であることを、日本の労働者はその労働者の本能をもって知り、また世界の共産主義者の運動によっておしえられたのである。

このときにわれわれのぜひと記憶しなければならぬ一つのことがあった。それは、日本の労働者がロシア革命にたいしてたんに海をへだてて同情し共鳴したばかりではなく、先進的な自覚ある労働者、進んだ革命家たちが海をこえてシベリアにわたり、身をもってロシア革命の成就をたすけ、侵略しきたった日本ブルジョアジーの軍隊にたいして、ロシア革命を破壊するな、われわれの兄弟の国、労働者の天下ソヴェト・ロシアにたいして、ソヴェト・ロシアの労働者・農民にたいして銃をむけるな、という宣伝を勇敢におこなったことである。非常な困難をおかして、われわれの同志、尊敬すべき先覚労働者は、シベリアにおいて、またすすんではヨーロッパ・ロシアにまでゆき、身をもって革命をたすけ、日本帝国主義の侵略にたいしてたたかいたのである。同志佐藤のごときは、シベリアにおいてロシア革命擁護の非常に困難な英雄的闘争に身をささげてついにその地にちりはてた。ロシア革命は実際に日本の進んだ労働者自身のものである。すなわち、ボリシェヴィキ——当時は過激派と呼ばれ鬼のごとく狼のごとくいわれていたが、資本家にとっては恐るべき過激派であろうが、労働者にとっては真の味方であり指導者である——もつともすぐれた世界的な革命指導者レーニンによってひきいられた鉄のごとき革命党ボリシェヴィ

キこそ、労働者の真の前衛であり労苦大衆のもつとも信頼すべき味方であるということの理解を、日本の労働者は身をもってしめたのである。

日本共産党成立の機運はかくあらゆる点から成熟してきた。ちょうどこのときに、第三インターナショナルの指導によって、日本におけるコミンテルン支部としての日本共産党が創立された。これは国際的な働きかけによって世界党の一部としてできたものであるが、けっしてたんに外国からおしつけられた司令部ではなくて、じつに日本プロレタリアートとその闘争の発展とに確実に根をもっているのである。

## 7 党成立の具体的事情

以上は党の成立の基礎を述べたのであるが、これから日本共産党成立の直接的な具体的事情をあまりに詳しくは、第一に強調すべきことは、コミンテルンの働きかけによってコミンテルンの直接の指導支援のもとに、日本の労働者階級が日本共産党を組織したことである。一九一九年三月コミンテルンが創設された。コミンテルンは第二インターナショナルと異なつて最初から東洋に甚大な注意をはらった。多くの植民地や半植民地のある東洋、帝国主義からの解放をもとめる民族をもつた東洋、革命運動の最大の舞台となる運命をもつ東洋、ここにコミンテルンは甚大な注意をはらった。そして、東洋の一隅にある日本は、植民地革命運動の舞台たる東洋における反動・反革命の柱であり、中国、朝鮮、台湾を抑圧し、ソヴェト・ロシアにたいして東方からの進撃をたくらんでいる。かかる情勢のもとにある東洋にたいしてコミンテルンが非常な注意をはらったのは当然のことである。



東洋に注意をはらったコミンテルンは、一九二一年、その主唱のもとに極東民族大会を召集した。二一年の末にイルタックで準備会議をひらき、二二年の一月から二月にモスクワにおいて極東民族大会をひらいた。この大会はあらたな世界分割、あらたな世界大戦の陰謀にたいする革命的抗議とともに、極東における共産主義運動の結成、民族革命運動の支持を重要な目的とした。<sup>二七</sup>

この大会に参加したものは、ソヴェト・ロシアの勝利を得たプロレタリアート、中国の民族革命運動の代表者、日本帝国主義の束縛から脱せんとする朝鮮の民族革命運動の代表者、蒙古の独立革命運動の代表者、そのほか多くの国々における民族運動の代表者および日本のプロレタリア運動の代表者等であった。その人々は、共産主義者、社会主義的な革命団体の代表者、あるいは民族革命団体の代表者としておのおのの差はあるが、いずれも帝国主義にたいする決然たる敵手の革命的代表であった。この大会において、日本の労働者は中国朝鮮における共産党の結成運動とならんで日本共産党の結成をいそがねばならぬことが決定された。

日本の代表者たちはこの民族大会における成果をもたらし、日本共産党の結成運動に貢献するために活動した。コミンテルンはかように極東に注意を払い、極東民族大会開催の主唱者となって大いに活動したが、そのほかにもあらゆる方法で日本の革命的労働者を指導した。アナキストにたいしても、震災でころされた大杉栄にたいしてすらも、革命的性質をもっているものには積極的にはたらしかけ、いかにアナキズムやサンディカリズムがあやまっているか、それはいかにプロレタリアートの解放にたいする革命的な空言にすぎないか、それはまた権力の問題にふれない、結局のところ勝利を約束しえない敗北的なものであるかを説得することにつとめた。

かくのごとく、あらゆる手段によってコミンテルンの指導者たちは、日本におけるプロレタリアートの階級的成長、その階級闘争の勝利のために絶対に必要なプロレタリアートの政治闘争の組織、プロレタリアートの革命運動の指導者、司令部である日本共産党を組織させることに全力をそそいだ。

しかしながら、日本の先覚労働者たちは、まえに述べたようにコミンテルンの断固たる力づよい働きかけをたんに待っていたのではなく、積極的に自分の力で党成立の方向へ努力していた。一例をあげると、共産党結成のために他国の共産党の日本人支部との連絡接触につとめていたし、またまえに述べた、ソヴェト・ロシアにたいする日本帝国主義の干渉とたたかった同志佐藤のごとき先進者たちは、日本共産党をきざきあげるいしずえ、最初の柱の一つであった。かようにコミンテルンの指導とむすびついて日本プロレタリアートの先進分子は党の最初の建設のために活動してきたのである。

以上述べたように、日本共産党はコミンテルンが外からまた上から強制的におしつけてつくられたものではなく、またもちろん機械的にコミンテルンに服従するものでもない。以下このことを党成立の具体的な条件について説明する。すなわち、党成立における党とコミンテルンとの関係を述べる。

## 8 党創立におけるコミンテルンと日本共産党

コミンテルンの指導者と日本の当時の共産主義的な指導者との会議によって日本共産党は一九二二年七月に組織され、同年十一月のコミンテルン第四回世界大会に代表が出席して党の成立を

報告し、はじめて正式にコミンテルン日本支部日本共産党としてまとめられた。日本共産党は第四回大会以前に日本で創立されたものであるが、当時すでにコミンテルンは創立宣言を有しており、また一九二〇年の第二回世界大会においてきまつた規約をもち、また種々のテーゼすなわち党の指導原理を審議可決していたので、規約第一条の「この規約を承認し、コミンテルンの支部として、日本におけるプロレタリア革命運動の指導者として積極的に活動する」によって党を成立せしめ、そうして第四回世界大会の承認を得たのである。コミンテルンの第二回大会において可決されたコミンテルン規約ならびに二十一カ条の加盟条件、そのほかプロレタリア独裁にかんする指導原理を日本共産党がコミンテルンの支部として当然承認し、これを日本共産党の根本原理として採用したわけである。このコミンテルン規約には前文においてその目的をつぎのごとくいつている。これは同時に日本共産党の目的でもある。いまごく重要な箇所だけを述べる。

「コミンテルンはあらゆる手段をもって、武器をもってしても、国際ブルジョアジーの倒壊と国家の完全なる廃棄の過渡段階としての国際的ソヴェト共和国の建設とのためにたたかうことを目的とする。」

さらにつづけてこの目的のための手段を説いて、「コミンテルンはプロレタリア独裁をもって人類を資本主義の暴虐より解放する可能性のある唯一の手段であると考へる。またコミンテルンはソヴェト政府こそプロレタリア独裁の歴史的にあたえられた形態であると考へる」と断言している。

このコミンテルンの根本綱領、目的ともいふべきその眼目は、もちろん今日のコミンテルンにおいてもすこしもかわりはない。これは第六回世界大会においてできたコミンテルンの綱領を一

見すればあきらかである。コミンテルンはその成立のはじめから一貫した明白な目的をもっており、それを公けに大衆のまえにしめし世界的プロレタリア独裁のためにたたかってきたのである。この同じ目的、根本綱領を日本共産党がその成立の最初からもっていたことは当然である。

日本共産党とコミンテルンとの組織的な関係についてはコミンテルン規約にこゝつぎのごとく規定している。

「コミンテルンは資本主義の廃絶と共産主義の建設とのために闘争する労働者団体が厳格に集中的な組織をもたねばならぬことを知っている。またコミンテルンは真実に全世界の統一的共産党でなければならぬ。あらゆる国々で活動している諸共産党はたんにコミンテルンの個々の支部にほかならぬ。」

この集中的な統一的な全世界党としての国際共産党の不可分な一構成要素として日本共産党は組織され、コミンテルンに加盟した。これがコミンテルンと日本共産党との組織的関係の根幹である。なお詳細な点はこの第二回世界大会において決定された規約の個々の箇条があり、そこに各国支部とコミンテルン本部との関係が規定されているが、ここには述べない。

コミンテルン二十一カ条の加盟条件はとくにレーニンが直接起草した厳格なものであり、プロレタリアートにとって歴史的なものである。いま個々の条文については述べないが、ただ一言強調しておきたい箇条がある。それは「ヨーロッパおよびアメリカの今日の」情勢のもとでは共産主義者はブルジョアの合法性に信頼することはできない。だから共産主義者は決定的なときに革命にたいする義務をはたすために、どこでも「合法的組織とならんで非合法的」平行的な組織機構をつくる義務がある」というところである。

当時は世界大戦後の世界的な革命的危機の波動の高潮した時代であり、全ヨーロッパ、アメリカの一般情勢は、革命の指導者として大衆を革命に動員する任務を、直接当面の日程として共産党に課した時代であった。そこでここにとくに、敵の権力との徹底的な衝突闘争のために絶対に必要な非合法的組織の重要性を強調しているのであるが、しかもこれは決して一時的なものではなく、第六回世界大会における政治情勢にかんするテーゼにおいてもこの点が強調されている。第六回世界大会のときもやはり、あらたな革命的波動のたかまりつつあった時代であったためにはあるが、コミンテルンは全世界におけるブルジョアジーの法律の束縛をうけてその範囲内だけで仕事をするというごまかしは絶対にしない。徹底的に支配階級とたたかいブルジョアジーのいっさいの権力を根底から破壊するために闘争する共産党は、ぜひともブルジョアジーとたたかう強固な非合法の地下建築、非合法的組織をもたねばならぬ。これはいつでもかわりない原則である。

日本共産党の創立された時代には、日本の一般政治的情勢はヨーロッパ先進資本主義諸国におけるほどに共産党の合法的存在をゆるさなかった。つまり、プロレタリアートの力が総体的に弱くブルジョアジーの権力が反動的に強かったのである。このことはブルジョアジーが政治的自由をしいに拡大してついには日本共産党をも合法的存在にするが、それまで一時的に非合法的存在であるという意味ではない。日本共産党はもちろん敵との闘争によって共産党にたいする抑圧の法律をすこしずつでも、その段階において無効にするように成長しなければならぬし、また事実成長しつつあるが、国家権力の争奪戦、階級戦争においてブルジョアジーと直接に相対する共産党は最後まで、すなわちブルジョアジーの権力をくつがえしプロレタリア独裁を樹立するまで

は、いかなる意味においても非合法的組織をもたねばならぬ。それは日本共産党が創立当初にす

で、あきらかにしているところである。

なお、創立の事情にあらわれたコミンテルンと日本共産党との関係について一言つけくわえておきたい。まえにも、コミンテルンが日本の労働者階級にたいしてその前衛である共産党の組織を促進させるためにあらゆる手段を講じてはたらきかけたが、また同時に、日本の革命的労働者がいかにコミンテルンの指導をもとめて日本プロレタリアの階級党を結成するために熱心に活動したか、かくしてコミンテルンの指導的働きかけと日本の労働者の熱心な活動とがむすびついて共産党を組織するにいたったか、ということは述べた。が、日本共産党がまったくコミンテルンの機械的な一つの人形にすぎないとか、またコミンテルンが金とテーゼをもって日本共産党を左右しているとか破廉恥きわまる悪宣伝を敵はまことらしくふりまいている。日本共産党の創立当時におけるコミンテルンと党との関係はごく簡単である。要するに、コミンテルン第二回大会において採用されたコミンテルンの規約ならびに二十一カ条の加入条件、これを日本の共産主義者が承認し、この承認のうえに党をきずきあげて正式にコミンテルン第四回大会で承認を得たのだ。すなわち、日本のプロレタリアートが国際プロレタリアートの集中的に集結したコミンテルンを自己のものとして、自己の戦闘組織として承認し、その一部になったのである。このことは、コミンテルンと日本の党とがなんらか別個のものであって、それが一方の働きかけをうけて機械的にしたがったとか、まただらしなく加盟したとかいうものではけっしてないことをあきらかにし、日本共産党はプロレタリアートの世界党であるコミンテルンの不可分の一要素であることをあきらかにするものだ。ブルジョアジーにはこういう組織上における国際主義がとうてい理解で

きないのだが、社会民主主義者たちはまたこのブルジョアジーにくつついて、やはり日本共産党にたいしてそういういろいろのデマゴギーをとばしている。

さて、日本共産党が創立された意義をごく簡単につきに要約するが、日本共産党の創立は日本のプロレタリア運動史上に画期的な意義をもっているものである。

第一には、プロレタリアートの世界党の一支体としての日本共産党の創立によって、日本のプロレタリアートは国際的プロレタリアートにかたくむすびついた。

第二には、なんらの職業的なまた宗派的な集団ではなくして、かえって職業的な宗派的な集団を克服して、プロレタリア階級全体のための闘争、プロレタリア階級全体の利益、を代表する政党として、はじめてわが日本共産党ができた。

第三には、いっさいの改良主義的・議会主義的な幻想に反対し、プロレタリア独裁のための闘争にプロレタリアートを意識的にむけるようになった。

最後に、まえにもちょっといったが、日本のブルジョアジーの法律に束縛されない非合法的な党として、ブルジョアジーが解散することのできない党として、はじめて日本のプロレタリアートはこういうものをもったことである。これらの点からみて、従来のいかなる社会主義的な労働者団体とも截然と区別されるものである。

## 二 党の創立からいわゆる解党決議まで

これから日本共産党の重要な発展段階をわけ、主要な時期について述べるのであるが、詳細に月日を追って述べるわけにはゆかぬので、いきおい簡単になる。なお、党の政策ならびに活動のなかで、労働組合運動における政策とその指導的活動、農民運動における政策と活動、さらに共産青年運動にたいする党の指導支援、これらは非常に重要であるから、党の歴史をあつかううえには相当に詳細に述べねばならぬのであるが、これは他の同志が述べるのでここにはふれない。

日本共産党の創立からすくなくとも四・一六事件までの歴史、党生活史でもっとも重要な画期的な分界線は、一九二七年のコミンテルンにおける日本問題についての決議、いわゆる二七年テーズの発表である。この前と後とは、日本共産党の思想的政治的影響力において、またその組織的な発展の速度において、またその大衆にたいする公然の結びつき、ないしは党が大衆にかくれていたか、あるいは大衆のまえに公然と政綱をかかえて活動していたか、またコミンテルンとの結合が強かったか弱かったか、ということについて非常に明瞭な区画があらわれている。

この二七年の再組織前の時代についても、やはりいくらか小さな段階にわけてみる事ができる。

### 1 いわゆる第一次日本共産党の創立とその闘争

第一には、第一次日本共産党と称せられていた時代、すなわち日本共産党が創立された一九二二年七月から翌年の六月検挙といわれる第一次共産党の検挙、九月の大震災の反動、これをへて日本共産党が一時的に日和見主義的指導のために組織を解体したとき、いわゆる解党のときまで、これを最初の一段階として述べたいと思う。

第一次共産党と称せられていた時代の情勢をかいつまんでいうと、当時は国際的には戦後の革命的な危機がまだすっかりしりぞいたとはいえず、ヨーロッパの中心には革命の低気圧がふかくうずまいていた。その秋には失敗したかのドイツ革命の危機があった。国内は大正九年（一九二〇年）の恐慌以来ひきつづいて沈滞状態のなかにあつて、資本は労働にたいして攻撃的攻勢的に出てきており、労働者の運動は大正八年（一九一九年）を一つの頂点とし、また農民のほうもだいたいこれを一つの小さな頂点としており、ストライキにおいても、農民の争議においても、とくにいくらか減退しまた停滞をしめしていた。しかし階級闘争は資本の攻勢にたいする労働者と農民との必死の抗争によって確実に深刻化しつつあつた。労働者は旧来の手工業的な職業別的な分散した闘争の組織から、産業別的に集中的に統一的に組織されたものを要求する方向へすすみつつあつた。これは思想的方面においては、アナキズムにたいする「ボル」すなわち共産主義の圧倒的な勝利によって表現されており、組織的な方面においては、労働組合運動における、自由連合主義にたいする集権的合意主義の勝利にあらわれている。また、ときに階級意識のある労働者のあいだにおける階級的政党すなわち共産党にたいする暗黙の大きな要求の成長にあらわれている。同時に数年来のブルジョア自由主義反動といわれるもの、すなわち当時の憲政会、政友会、革新倶楽部等のブルジョア政党が指導するブルジョア・デモクラシー運動の波が労働者のあ

いだにも影響をおよぼし、改良主義的な首領たちをとらえて議会主義のほうへさそいこみつつあつた。

この情勢のもとにうまれた日本共産党が当面した第一の重要な任務は、労働者のあいだにおける小ブルジョア的な思想——古いサンディカリズムの思想ならびにあらたにおこりつつあつた議会主義的な思想、これらの小ブルジョア思想にたいして闘争しこれを克服することであつた。すなわち、労働者を階級的な政治闘争におしすすめることである。第二は、当時、党それ自身のかにおいても労働組合運動のなかにおいても、前時代の支離滅裂な宗派的な分派組織の遺産があつたので、この遺産を清算して、労働者を一個の集中的な組織された固い規律のある階級的な軍隊に編制しあげ鍛えあげることである。これが党の当面した第二の重要任務であつたと思う。

これらの任務のもとにたたかっていた当時の党は、コミンテルンの直接の指導、力づよい説得、助言など、あらゆる援助によって、第一には「大衆へ」というスローガンをもって闘いにのぞんだ。この「大衆へ」のスローガンはすでに一九二一年第三回コミンテルン世界大会で採用された国際的なスローガンであつて、当時の日本共産党がこれを採用しなければならぬことは国際的にみてさうであつたばかりでなく、とくにわずかにぎりの少数者のグループにすぎない、大衆から孤立していた、当時の党にとっては絶対必要なもっとも重要なスローガンであつたのである。

つぎには「政治闘争へ」のスローガン、これが当時の党の重要な第二のスローガンであつた。この「大衆へ」と「政治闘争へ」との二つの重要なスローガンをもち、いわゆる第一次共産党は創立の初めからコミンテルンの指導のもとに大衆化への任務をもつていた。しかし、当時の党における幼稚な小ブルジョア的な殻をぬけきれない思想、前時代の小ブルジョア的な手工業的な

分派組織の遺物が、この共産党の大衆化、階級的な政治闘争への積極的な進出をいちじるしくおさえたことはあらそえない。「大衆へ」と「政治闘争へ」という、この二大スローガンをひろく大衆に宣伝するために、日本共産党は党議をもって、当時もつとも重要な指導者の一人であった山川均氏に一つの宣伝文を起草発表させたのであるが、それが一九二二年の夏に当時の党の機関誌『前衛』にあらわれた有名な「方向転換論」である。この「方向転換論」は根本においては日本共産党の党決議をへてつくられた宣伝文であつて、その眼目は「大衆へ」、「政治闘争へ」という革命的なコミンテルンの直接指導のもとにできたただしいスローガンを実現することにあつたが、しかし今日すでにあきらかなように、「方向転換論」としてあらわれたあの宣伝文においてはいちじるしく本来の精神がまげられている。これは当時の指導者山川均氏がとくに意識的にまげたでもないが、山川均氏によって代表されていた当時の小ブルジョア的な、なかんずくサンディカリズムの濃厚な残滓に支配されたものにほかならぬ。それにもかかわらず、この「方向転換論」による宣伝その他の文書による宣伝、種々の集会および労働組合内の実際闘争における党員の組織的な仕事等々によって日本のプロレタリア階級は急速に政治闘争の方向へ、共産主義の旗のもとにおける政治闘争の方向へ進出していった。当時の日本共産党はかくのごとき重要な中心的な任務をもっていたのであるが、それをもつとも具体的に集中的にあらわすものは党の綱領である。

当時における日本共産党の目的および根本綱領はいうまでもなく、コミンテルン第二回世界大会で採用された規約その他の諸テーゼにはかならぬが、さらに日本共産党はコミンテルンの日本支部として、日本の特殊な情勢に応じた一国の党としての綱領をもつべきであると考え、この綱領を作製するために活動した。コミンテルンもまた第二回大会以後、各国の共産党支部にむかつてその党の綱領を作製するようにもとめつつあつたのである。

日本共産党の綱領は当時は完成しなかつた。当時、コミンテルンの指導的な同志の直接参加によつてできた日本共産党綱領草案があり、その審議決定をコミンテルンは日本共産党に指令した。そこで、党はこの日本共産党綱領草案の審議のために一九二三年五月に臨時大会をひらき、無産政党組織の問題とともに、この綱領の審議にあつたのであるが、綱領草案は審議未了のまま大会後にもちこされ、さらに党内の種々の機関によつて審議決定されることになつていたが、まもなく六月検挙にあい、ついで九月の震災、その後の反動時代における混乱、つづいて解党——かくてついに草案たるにとどまつてゐる。ゆえに、これはどこまでも党の綱領草案であつて、決してそれ以上に出でないものである。しかしこれには、当時の党の重要な任務がはっきりとあらわれている。かような重大な問題が当時の日本共産党内にとりあつかわれたことは記憶すべきことであると思ふから、ごく簡単にこれについて述べてみたいと思ふ。

まずこの綱領草案においては、当時の日本の経済的・政治的一般情勢を分析し、日本における国家権力の構成の問題にふれている。さらに、当時の日本の政治における半封建的な表現物たる天皇制にたいして、日本のプロレタリアートは先頭に立つたたかわねばならぬこと、その指導権をプロレタリアートがにぎらねばならぬことを強調している。したがつてその行動綱領のなかには、君主制の廃止をはじめとし、貴族院、枢密院の廃止はもちろんのこと、大土地所有の没収というスローガンをもちかけた。さらにまた、当時ブルジョア政党の指導した普通選挙要求の運動が大衆的な運動となり、小ブルジョアのみでなく労働者大衆をも必然的にまきこむ形であつた

から、この綱領草案は、普通選挙運動<sup>(三)</sup>にたいして党は積極的のりこみ、そのなかにおいてブルジョアのないうさいの議会主義的幻想とたたかい、これを革命的な議会主義にまでもってゆかねばならぬ、という意味を記している。農民問題についてはここにくわしく述べないが、大私有土地没収のスローガンを明白にかかげていることによってはこの全般を推すことができるであろう。そのほかにも重要な点はあるが、おもなものを出してもこれだけの重要なものをふくむ綱領草案が当時の日本共産党において討議され審議されたことは意義あることである。当時の日本共産党の指導部における旧い小ブルジョアの指導者は、この君主制にたいする闘争の問題、普通選挙運動への積極的な参加およびそのブルジョア・デモクラシーの制限欺瞞にたいする闘争、この大衆闘争のなかに直接いりこんでのブルジョア・デモクラシーのための実践的な闘争、これらの重要な任務を回避したのである。そのことがその後の党の発展にとって非常な妨害をしたことはいうまでもない。

以上でほぼ当時の党の政治的任務のたいを述べた。

(注) 綱領草案における行動綱領<sup>(三)</sup>はつぎのごときものである。

- 一、政治的分野における要求
  - 1、天皇制の廃止
  - 2、貴族院の廃止
  - 3、一八歳以上のすべての男女にたいする普通選挙権
  - 4、労働者団結の完全なる自由(労働組合、労働者政党、クラブその他の労働階級諸組織)
  - 5、労働者の出版の自由
  - 6、労働者の屋内および屋外集会の自由
  - 7、示威運動の自由
  - 8、同盟罷業の権利
  - 9、現在の軍隊、警察、憲兵、秘密警察の廃止
  - 10、労働者の武装

## 二、経済的分野における要求

- 1、労働者の八時間労働制
- 2、失業保険その他の労働社会保険
- 3、市場による労賃額の制定
- 4、工場委員会による生産の管理
- 5、雇主および国家による労働組合の公認

## 三、農業分野における要求

- 1、天皇、大地主、寺院の土地の無償没収とその国有
- 2、貧農を支持するための国庫土地資金の設定、とくに従来小作人として自分の道具で耕作したいうさいの土地を農民へ私有財産としてではなくあたえること
- 3、累進所得税
- 4、奢侈特別税

## 四、国際関係の分野における要求

- 1、いっさいの干渉の廃止
- 2、朝鮮、中国、台湾および樺太よりの軍隊の撤退
- 3、ソヴェト・ロシアの承認

当時の党の組織状態について原則的なことを述べたいと思う。当時の日本共産党はコミンテルンの支部として組織されたものであるが、いまだ一挙に前時代の宗派的・分派的なグループ組織の遺産を清算することができず、非常に多くそれがこされていくつかの小グループがそのまゝ存続していた。このために、当時の党は工場を基礎として組織されていなかったばかりでなく、一般に労働者・農民の勢力がきわめて微弱であった。また当時の党の基礎組織はやはり細胞と名づけられてはいたが、これは経営細胞ではなくて、居住区域および大衆団体その他の党外大衆運動における仕事の線にそってぼつぼつと組織された小さなグループであり、根本においては社会

民主主義的組織を継承したものにすぎなかった。すなわち、ボリシェヴィキ的な工場を基礎にした組織のうえには立っていなかった。——光輝あるロシア・プロレタリアートの経験の集積であるところの工場細胞、経営細胞の組織とは全然無関係であって、これが当時の党組織の最大弱点をなしていた。こういう組織は必然的に党内に種々の宗派的な傾向を存続させまたこれを再生産させたのであって、この組織の徹底的なボリシェヴィキ化なしには党の政治的生長も発展も非常に制限抑圧されるのである。

なお当時、党は機関誌として『前衛』<sup>(二四)</sup>をもっていた。この『前衛』は党の宣伝機関誌ではあるが、けっして中央機関紙と称せられるべきものではなかった。日本共産党の中央機関紙、すなわち日本共産党中央委員会の機関紙として党員および党外の革命的労働者・農民大衆に党にたいする信頼をあたえるために絶対に欠くことのできない中央機関紙ができたのは、やはり一九二七年のコミンテルン決議にもとづく再組織以後のことであった。それ以前には種々の機関紙をもっていたが、それはけっしていまいったような重要な役割をもつ中央機関紙ではなくて、それと区別されるべきものであることを附言しておく。機関誌『前衛』のほか、当時の党は労働組合運動方面の宣伝機関紙として最初に『労働新聞』のちに『労働組合』という小雑誌的な機関紙をもっていた。この『労働組合』は四号か五号かまで出したが震災のときに廃刊した。農民運動の方面では『農民運動』という機関紙をもち、農民のあいだにおける宣伝煽動の一つの機関として使用していた。

当時における日本共産党の重要な活動闘争を述べると、第一に国際的方面においてはソヴェト・ロシアへの日本帝国主義の武力干渉にたいする抗議運動、すなわち対露非干渉運動がある。

世界のブルジョアジーがロシア革命をいかにおそれたか、いかに必死になってこれをおしつぶすために協力して攻撃をくわえたかはまえにも述べたが、彼らブルジョアジーは一九一七年の最初のいわゆる二月革命、帝政ロシアの転覆した第一次革命にたいしては平気であったばかりでなく、ある帝国主義者のごときはこの帝政ロシアの倒壊、ツァーリ政治の転覆をたすけたとさえいわれている。日本の帝国主義者どもも当時のブルジョア世論や新聞などをみれば明白なごとく、第一次革命、帝政ロシアの転覆、ブルジョア政府なかつく小ブルジョアの参加したケレンスキー臨時革命政府成立まではさほど攻めたてず、むしろこれに非常な興味をもっていたと断言することができるところが、ひとたび十一月革命が、ボリシェヴィキにひきいられたプロレタリア革命がおこってそれが成功するやいなや、全世界のブルジョアジーは震駭<sup>しんがい</sup>して必死になって攻撃をはじめ、日本の帝国主義者はいちはやくシベリアに出兵した。翌年の一九一八年夏の寺内内閣の出兵宣言によって、日本はチエコスロヴァキアの東漸——東へすすんでシベリアを侵略する、その東漸をたすけるために、沿海州すなわち極東シベリアの秩序——日本帝国主義者にとつてつごうのよい秩序——を維持するために断固として出兵する<sup>(二五)</sup>。さらに事情が有利になるならば増兵すると宣言した。それ以後、一九二二年までの五カ年間に、日本帝国主義者はシベリアの野に七万三千の兵をとどめ、戦死者、傷病死者は三千五百を算し、つかいはたした軍費は一〇億円という莫大な額にのぼった。これらはすべて日本ブルジョアジーのシベリア侵略のために、ロシア革命にたいする反革命戦争のために、労働者・農民がはらわされた犠牲である。ソヴェト労働者の英雄的防衛、はじめもった自己の祖国を防衛する自己犠牲的な英雄的防衛によって日本軍隊のシベリア侵略はついに敗戦におわったのである。「忠勇義烈」をもつてほこり、戦争といえばか



ならず勝つと盲目的に考えていたし、またいまでも考えている日本帝国軍隊も、このシベリア出兵においては完全に敗けたのである。当時尼港事件としてつたえられて大さわぎをしたニコライフエスク事件は、極東においては十分に組織された赤衛軍をもたなかったロシアの労働者が、日本帝国主義の狂暴な侵略にたいしてやむをえず身をもつてふせぐために、パルチザンを組織して日本軍隊に抗争して立ったのだ。パルチザンが尼港事件をひきおこして罪のない日本人を多数ころしたといつてさかんに煽動したが、これは明白に、日本帝国主義者が無辜の人民を使喚して、尼港でロシア・プロレタリアートのパルチザンに衝突させるように挑戦したものだ。シベリア出兵は敗戦におわつた。うまくゆけばシベリアでずいぶんうまい汁が吸えると思つていたブルジョアジーは、この敗戦をみて軍閥攻撃をさかんにはじめたのであるが、これはたんに日本ブルジョアジーが自分の失敗を自分でつぶやいていたにすぎないのだ。

日本共産党はもちろんこの反革命的なシベリア侵略に反対した。また日本帝国主義者が大連会議や長春会議によつて、ソヴェトの労働者から賠償金を強奪しようとしたのに反対して闘争した。さらに二二年夏には、日本共産党員のあらゆる場面における活動によつて対露非干渉同志会が成立した。これは数十の無産者の思想団体と労働組合とを網羅して、日本帝国主義者のシベリア侵略にたいする日本プロレタリアートの闘争を遂行する組織としたものである。日本共産党はこの対露非干渉の大衆運動における中心スローガンとして「労働ロシアからの即時完全な撤兵」、「対露通商開始」、「労働ロシアの承認」をかかげた。

つぎに、当時のロシアの大飢饉救済運動とむすびつけて日本の労働者のあいだにソヴェト・ロシアにたいする同情支持の運動を組織した。二三年のメーデーにおいてはわが党の主唱した「労働

農ロシアの承認」というスローガンが採用された。二一年から二三年にかけてのロシアの大飢饉はたんに天候不順のためのみではなく、反革命があれくるつたために豊饒なロシアの国土、広い豊かな土地をもつロシアの国土が荒廢して、そのために飢饉が酸鼻の極に達したのである。世界のプロレタリアがこのロシアの飢饉にたいして心底から同情をあつめたことはいうまでもない。日本共産党も日本の労働者の先頭に立つて、二二年の夏から種々の手段によつて「ロシアの飢饉をすくえ」とうつたえた。「飢えたるロシアをすくえ」というスローガンは、いたるところの工場において、労働組合のなかにおいて、農民のあいだにおいて、またひろく小ブルジョアのなかにおいてさえ採用された。また党は機関誌『前衛』そのほか役だてうるあらゆる機関を動員し、またブルジョア的自由主義的な新聞雑誌までうごかして、広い範圍にわたつてロシア飢饉救済のための寄附金を募集した。そうしてこれをまとめてソヴェト・ロシアの労働者・農民におくつたのである。

なお、国際的運動の方面においては、二三年一月フランスがドイツのルール地方を軍事占領したこと<sup>ニセ</sup>にたいする抗議の示威運動をあげることができた。またこの時代を通じて、「日鮮の労働者団結せよ」というスローガンをかかげて、朝鮮の労働者との団結結合のためにいろいろの闘争をした。

つぎに、労働者・農民の日常闘争の指導、その革命化、その組織の強化の面において、当時の党はかなりの活動をした。各地のストライキおよび農民闘争への組織者の派遣、宣伝煽動、とくに労働組合統一のための闘争に積極的にはたらいたのであった。なかならず労働組合運動の統一のための闘争においては、無政府主義者の自由連合論に反対した集権的合論の旗じるしのもと

に活動し、二三年の秋、大阪において全国総連合の創立大会を開催するにいたった。この大会は無政府主義者側と共産主義者側との衝突によってついに決裂し、そのために解散されたようにいわれている。この大会においていわゆるアナとボルとが衝突したことは事実であるが、ブルジョア政府が大会を弾圧し解散を命じたのは、結局においてアナキズムの主張が少数でやぶれ、圧倒的多数である共産主義の主張のもとに労働組合の総連合がむすばれる氣勢が濃厚であったためである。この大会は解散されたが、その後もなお、共産党の労働組合運動統一の闘争は今日までもつづいている。さらに労働者運動の方面においては、とくに失業者運動に力をそそいだことをあげることができる。

当時、日本のブルジョアジーは日本の労働者の進出とその闘争の革命化の傾向を防止するために、過激社会運動取締法案、労働組合法案、小作争議調停法案等をつくったが、党は当時のいかなる労働者・農民にもあきらかなこれらの悪法案にたいする闘争の先頭に立ち、二二年から二三年にかけて、この三大悪法案反対の大衆闘争を組織した。全国思想団体、労働組合、農民組合五十余をもつて悪法反対無産者同盟を組織し、また全国労働組合悪法反対同盟を組織するよう活動した。そうして二三年二月十日の悪法反対の大示威運動となり、ついにこれらの悪法案を不成立におわらしめたことは前述のとおりである。

なお、党は水平社運動、当時勃興してきた特殊部落民解放のための闘争を援助し、党員中の若干の同志はもっとも献身的にもっとも革命的にこの水平社運動の指導にあたった。そしてこの運動をプロレタリア解放の運動にむすびつけるためにたたかった。

さらに当時においても、共産青年同盟(ニハ)の組織のために党が直接援助したことはいうまでもない。

これらの時代を通じて、党はつねに労働者の政治闘争のための闘争をもっとも熱心におこなった。サンディカリズム、アナキズムの思想の残滓にたいする闘争は当時における重要な闘争の一つであった。

日本共産党は、そのように当時のあらゆるプロレタリアートの階級闘争の先頭に立ってたたかってきた。その間にまえに述べたごとく綱領審議のための臨時大会をひらいたほかに、その以前、二月であったと思うが、創立大会後における最初の大会をひらき、党の規約ならびに対露非干渉労働ロシア承認のための闘争の中心スローガンを決定し、なお、前時代からもちこしてきた分派的組織を克服するために役だった指導部員の改選等をおこなった。

こうして党は徐々に闘争の中において発展しつつあったのである。

## 2 六月検挙とこれにたいする闘争

このとき、ブルジョアジーはかの六月検挙によって党の主な活動部分をさらってしまった。一九二三年六月における共産党検挙はブルジョアジーがプロレタリアートの階級的結成の進出を弾圧した最初の大検挙であった。ブルジョアジーは第二の幸徳事件だとか、大逆事件だとか、その他いろいろと悪煽動のかぎりをつくした。これはけっしてブルジョアジーが日本共産党の目的や性質について無知であったためではなく、三・一五事件におけると同様にやはり意識的に、ブルジョアジーが自分をまもるために天皇制を武器としてもちいたのにすぎないのである。

この検挙によって、党は従来の指導部その他の活動的な党員の一部を獄中にさらわれたのであるが、この検挙にたいしてはあらかじめ検挙後における指導部を構成しておき、検挙後における

闘争の方針をさだめていたのである。この検挙によって、当時の党の一般黨員はもちろん、日本の労働者はけっして幸徳事件とか大逆事件とかいうデマにひるんで屈服してしまうことはなかった。かえって労働者大衆はこの検挙事件によって日本共産党の存在を知り、党にたいする漠然たる支持要求をつよめてきたのである。当時の党は大衆のあいだにはいかなるものであるかが具体的に知られていなかったが、この検挙によって共産党なるものはプロレタリアにとって憎むべきものではなくて、なんらか自分たちの味方ではあるまいかという考えが広大な大衆のあいだにもたれはじめた。しかし、この検挙は日本の労働運動の指導を共産党からそむかせるのに全然役だたなかったわけでもなく、この後、九月の大震災における大反動とともに、小ブルジョアの指導者、改良主義者をますます右傾せしめ腰をぬかさしめ、一般労働運動においては社会民主主義の発生、またわが党内においてはかの解党主義の発生をたすけたのである。

### 3 震災テロル（朝鮮人虐殺、亀戸事件）

一九二三年九月一日の震災は——かの第一次共産党の被告としてわれわれが市カ谷にはいつているときに見まったのであるが——一時的に一地方的に無政府状態を現出した。

ブルジョアジーはこれを内乱鎮圧のための演習にもちいた。戒厳令のもとに、軍隊の手によって、また自警団という反動的武装組織の手によって、なによりも第一に、日本の帝国主義者がつねに、自分の足もとにおさえつけてはいるがいつかは跳ねかえって自分をたおすだろうとおそれていた朝鮮人にたいして大虐殺をおこなった。たよりのない抵抗のできない何万という朝鮮人が日本のブルジョアの悪煽動によって（いまではだれにもあきらかであるところの）まったく虚偽

の悪煽動によって虐殺されたのである。

またこの震災において、日本のブルジョアジーは龜戸事件という名をもって日本の労働者の胸にわすれることのできない大きな恨みを植えつけた。それは、革命的労働者、わが党のもとにあつて共産青年同盟の指導者であつた同志河合義虎をはじめ革命的労働者九人を残虐に殺害したことである。党はこの英雄的な犠牲者をながく日本のプロレタリア運動に記憶せしめるために、二七年の再組織のときに日本共産党の党籍にのせた。

日本のブルジョアジーはこれらの労働者の虐殺、朝鮮民族の虐殺だけではあきたらず、震災のどさくさに勅令をもって治安維持のためにする罰則なるものをもつけ、これをやがて今日の治安維持法にひきなおしてしまった。

かくのごとく日本のブルジョア政府は震災において、ブルジョアジーの利益のためには震災手形補償法というブルジョアジー保護の略奪的な補償法案をもつけ、一方においてはプロレタリアート、被圧迫民族にたいしてはこういう手段をとつたのである。

### 4 解党決議

震災における反動、それにひきつづく資本家の攻勢のもとにおいて、小ブルジョア的な指導者たち、労働運動における小ブルジョアのあいだには、リベツ化といわれ自由主義化と称せられる運動が擡頭してきた。これは要するに、ブルジョアジーの強力なる攻撃、白色恐怖的な反動のまゝえに動揺する小ブルジョアの腰ぬけ的な、ブルジョアジーにたいする屈服にほかならぬのである。当時、党の指導部においてもこのリベツ化の傾向に影響されて、小ブルジョア分子がその階級的

性質を自己暴露した。今日、日本の裏切り社会民主主義の旧い大先達の一人である有名な赤松克麿も、当時日本共産党の指導部内にあつてもっとも勇敢に党をふりすてて、リベツ化どころではなくまいったく完全にりっぱに社会民主主義にむかつて突進していったのである。

彼が「科学的日本主義」なるものを提唱したことをかえりみればこのことはあきらかであるが、同時にこの勇敢なる赤松氏とならんで山川均氏以下の臆病な変節者が出てきた。これは、正面から共産党を否定することはなしえないが、この反動のまえに典型的な小ブルジョアの動揺をしめし、自然成長論的な傾向をとった。もうすこし日本の労働者が目ざめて自然に共産党を結成するようになるまで待たなければならぬ、という典型的な日和見主義の思想を代表して、山川均氏以下の小ブルジョア分子はやはり実質的には党をうらざり党を放棄したのである。こういう小ブルジョアの思想の動揺が党内にあることが、いかに党にとって、したがってまたプロレタリア運動全体にとって致命的であるかは、これらの小ブルジョアの指導者たちがたんにみずから党をすてるだけでなしに、党を解体せしめ、党の解体を強調して党のためにたたかおうとしている革命的労働者を無党状態におとし入れたことが、いかにその後の日本プロレタリア運動の発展を阻害し妨害し毒したかによつてもわかるのである。むろん、この解党はけつしてなんらの摩擦なしにすらすらおこなわれたものではない。さすがの赤松克麿氏のごとき勇敢なる裏切者ですらも、党内の革命的労働者をごまかすために、また党外の労働者にたいしてもなんとか表面をごまかすために、日本共産党の解散はたんに一時、党内における不純分子、封建主義的な分子を掃除するための方便にすぎない、といつてごまかす必要があつたのである。そうしなければ、とうてい黨員大衆に解党を消極的にでもうけいれさせることができない状態にあつたのだ。実際また、当時の

党における労働者黨員たちは解党の決議にたいして反対し抗議したのであるが、結局それらの厚顔無恥な小ブルジョアの裏切者たちによつて党は解体され、ブルジョアジーに売りわたされてしまったのである。むろん日本の労働者の革命的要素はこれにたいしてどこまでも盲目ではなく、ただちにこの解党にたいしてふたたびよりいっそう堅固な共産党を再建するための闘争を開始した。とくにコミンテルンは強硬に最初からこの解党にたいして絶対に反対し、この解党決議に承認をあたえず、即時党の再建をせよと命令してきた。コミンテルンの日本共産党の解党にたいする闘争は、解党決議がおこなわれた二四年（大正十三年）の春、ただちにこれにたいする反対の指令となつてあらわれた。コミンテルン執行委員会から日本共産党の解体をみとめないことを当時の日本共産党の指導部にたいしていつてきたのである。コミンテルンが日本共産党の解党をもちろんみとめるはずはないのであるが、すべて一国の党の重要なことはコミンテルンの執行委員会の承認を得なければならず、コミンテルンの執行委員会が反対すれば無効になるのである。その大会で決定したことは、コミンテルンの執行委員会がこれに反対して異議をとないかぎりはおもろんそのまま承認されるが、しかしあやまつているという判定をくだされるなら、それはとりけさるべきであるし、またとりけされてきた。

そもそもこの解党決議は、当時の党の正式大会で決定されたものでないことはもちろん、また、やむをえざるばあいの大会にかわるべき会議による決定という性質のものでもない。この解党は裏切者たちがきわめて陰險な策動によつて、あちらこちらから自分につごうのいい人をえらびだして、あつめて、こそこそときめ、しかも結局ひろく賛成を得たように思いこませてやってのけたのである。こういう意味において、この解党なるものは、党としては、大会あるいは大会にか

わるべき会議が責任を負っていないものであって、まったく少数の裏切者たちの悪辣な陰謀的手段によってなされたものなのだ。

そこでちょっと説明の必要がある。この解党はけっしてすらすらおこなわれたものでないことはまえにもいったが、いろいろの摩擦や反対があつて、裏切者はきれいさっぱりと解体してしまひたかつたのはやまやまではあるが、そうもゆかぬので、なんとかごまかすためにいろいろな方法を講じた。その結果、革命的黨員たちに席をあたえて機関をのこすために、一つの組織をおいた。裏切者が革命的な要求にたいしてなしたこのような表面的な妥協があつた。それがのちには、結局において小ブルジョア分子の裏切りをうちやぶつて党の再組織の機関として実際にうごくようになった委員会である。

### 三 コミンテルンの解党否認から再建まで

#### 1 委員会時代

この解党後にのこされた委員会は、解党そのものがすらすらとおこなわれずに波瀾があつたように、けっして単純な統一的なものではなく、そのなかにはやはり、ごく素朴的ではあるが闘争的な革命的な一分派とまったく敗北主義的な武装解除的な解党主義の本流を代表したものが、最初のうちにはまだいっしょになつていた。

かかる委員会がコミンテルンの強力な働きかけによつて、即時党再建にすすめ、ということになつた。党再建のための具体的な実際の闘争にはいるにおよんで、一方の提唱派といわれた、たんに宣伝提唱でしばらく満足しなげらぬという自然成長論者と、他方の労働者の革命的な要求を素朴に代表した当時行動派と呼ばれていたものと、この両分派はいっしょに住まつてゐることができなくなり、前者はついにこの委員会から脱退してしまつた。その後の委員会はコミンテルンの直接の指導のもとに、いわば行動派の手中に完全に歸して、党再建のための実際の仕事にあらゆる方面からしたがうようになった。この委員会を實際の党再組織のための委員会たる任務につかしたもつとも強い力は、いうまでもなくコミンテルンの指導であつた。すなわち、一九二五年（大正十四年）一月にいたつて、コミンテルンの指導者は日本共産党の再組織にかんする

決議をしたのである。

## 2 一九二五年一月決議

上海会議で決定されたこの二五年の一月決議によって、従来の日本共産党の指導部は徹底的に批判されたが、前述のいわゆる第一次日本共産党の綱領草案とともに党としては発表しなかった。コミンテルンから発行された綱領問題資料と題する文献があるが、それにはたしか終りのほうに日本共産党綱領草案がのせられていると思う。これは今日では翻訳されていると思うが、当時は発表されなかった。しかし、この重要な文献、決議のごとき重要な指導方針が公表されなかったことは、今日までのプロレタリア運動に非常な損失をあたえている。

この一月決議はいつている。——「今日、日本の全共産主義者の集中せる組織（すなわち共産党）がないことは、日本の革命運動にとって大いなる危険である。しかるに現在、日本の同志たちは、運動が相応に自然成長をとげたのちに共産党を結成するという日和見主義に墮している」と、そして——「この日和見主義を打破することなくしては日本の革命は絶対に前進しえない」と、かく一大鉄錘をくだしているのである。

ついでこの決議は、党の従来の指導者の非常な幼稚さと大きな過失と、なかんずくコミンテルンの指導にたいして実践的ないっさいの行動をもつてする注意が欠けていたこと、表面でこれを承認しながら実行ではサボタージュしたこと、こういうことについていたく凶星をつけて激しい叱責をくわえているのである。すなわち、日本共産党の従来の指導者は、観念的・抽象的理論はもてあそぶが、正しい共産主義の知識を欠いており、俗悪なマルクス主義の理論、非マルクス

レーニン主義——実際のマルクスレーニン主義とは縁のない俗悪なマルクス主義しかもちえなかった。第二に、革命的戦術によって大衆を指導し党を大衆的基礎のうえにきづくことを知らなかった。また闘争のなかからきたえられた強い規律がない。またたんに個人的関係をたどって黨員を結合し、したがって共産主義者ではない封建主義者たちさえも混入していた。さらにいままでコミンテルンの指令をけつして十分には実行しなかった。それからまた、民主主義的な要求、大衆の民主主義のための要求闘争と普通選挙運動の必要、労働者・農民の日常闘争への必然的な積極的参加の必要、合法的出版の必要、これら種々のことが必要であることをコミンテルンが忠告したことを無視してしまった。——こういって、雷のごとき革命的憤怒をもって叱責しているのである。これはなんら弁解の余地のない、一点の余地もないことであって、当時の党の欠陥を完全に説明しているのである。

一月決議の最後に、党の孤立という問題についてつぎのようにいつている。すなわち、労働者大衆のわが党にたいする不信用、もっと正確にいえば大衆からのわが党の孤立の原因は、党の活動が概して消極的であったこと、党指導部のあやまった指導、すなわち労働運動および政治生活におけるいっさいの重大問題にたいする党指導部の消極政策にあるとみとめられる——と。これで見ても、労働者のいっさいの重要な経済的・政治的問題において、独自の積極的に闘争し指導しないかぎり、共産党はかならず後退する、前進しえないのみでなく大衆の前進にたいして逆に後退して、いやおうなしに孤立せざるをえない、ことを強調している。

## 3 ビューロー時代

この重要な意義のある一月テーゼによって、党再組織委員会は実質的に党再建のための活動を開始した。その以前から、さきに述べたようなわずかな数名にすぎない小さな委員会があったが、そのなかにはいわゆる行動派と提唱派とがあつてけつして統一のある行動はとれず、宣伝も小ブルジョア主義、日和見主義のみにかたむいていたが、しかし、この弱い委員会ですら、当時の革命的労働者をまったく無視していたのではなく、常に中心的な革命的指導をもとめていた革命的労働者を、直接にあるいは間接に、また積極的と消極的との差はあつたが、周囲にひきつけて統制をとつていた。しかし、この一月テーゼによって再組織委員会は実質上、革命的な労働者派行動派の手に帰し、いまは亡き同志渡辺政之輔がその中堅指導者の一人となつて、党再建のために悪戦苦闘する時代にはいつたのである。この時代から委員会には日本共産党再建を直接任務とする一つのビュローとして活動し、実際に名前もビュローと称した。そしてこのビュローは、その下に革命労働者の集団を方々につくり、それを連結して闘争を指導するにいたつた。

この時代は国際的には安定期、資本主義の一时的な安定期にはいつていたが、同時に矛盾はますます深くなつていつた時代である。しかし、日本においてはまえに述べたように、震災直後の反動時代、資本家たちが震災の打撃からまぬがれるために資本家的復興事業をおこし、その犠牲をすべて労働者の肩のうえに課した時代であり、階級闘争は激化し深刻化してゆくばかりであつた。かかる状態のもとにブルジョア側では、今日の民政党の前身である三菱系の憲政会が盟主となつて、憲政擁護を名としたいわゆる護憲三派内閣を成立させた。特権階級打破の旗じるしのもとに労働者を煽動してきたブルジョア護憲三派は、階級闘争の進展に直面して、一方では普通選挙法案を出したり、国際労働会議代表者の選出権を労働組合にあたえるようなことをして、

プロレタリアートを欺瞞して自己の側に獲得しようとし、一方では特権階級打破をさげんだ同じブルジョア側がプロレタリアートにたいして今日の治安維持法案を制定発表した。この普通選挙法案と治安維持法案とはブルジョア側のかくのごとき条件のもとではプロレタリアートを抑圧する道具、武器としてはなすことのできないものであつた。さきに過激社会運動取締法案としてほうむられさつたものを、狡猾に卑劣に、今度は国体の変革、私有財産制度の否認という下劣な法文をもつてプロレタリアを一〇年の懲役に処する法律を制定した。プロレタリア陣営においては、こういうブルジョア側の攻撃のもとに、一方においてはブルジョア側の積極的な援護支持をうけて社会民主主義が成長し、他方ではこれと逆比例して革命化し左翼化して共産党の陣営を下からかためつた。かかる時代において、党再組織委員会はコミンテルンの指導のもとに、共産党の再建のための主観的条件をどしどし獲得することができた。革命的労働者をこのビュローのもとにだんだんと獲得し増大することができた。

この時代に労働組合運動において、改良派と革命派との分裂がはじめて大衆的な規模でおこなわれた。まず二四年の春から翌春にかけておこなわれたいわゆる総同盟の内紛事件、つづいて二五年五月における総同盟の分裂、日本労働組合評議会の創立がこれである。いわゆる総同盟の内紛事件にたいしては、当時、山川均氏たちはこれを労働組合の内政問題にすぎないという見解をとつていたのであるが、革命的労働者側は、これをもつともあきらかな改良主義と革命主義との対立であり、その分裂であるとして主張してきたのである。ちょうどこのときに、二五年五月に日本労働組合運動にかんしてコミンテルンが一つの決議をした。それには日本の党再組織委員会の代表も参加した。くわしいことはここに述べないが、この決議には労働

組合の総連合、すなわち統一のための闘争、産業別組合統一のための闘争を説き、そのほか総同盟内部の反対派すなわちまだ分裂しなかった革新同盟は総同盟から分離してはならぬ、あくまでも総同盟内にとどまって拡大強化しなければならぬことを決定し、また左翼労働組合の全国的機関紙の発行が緊急な任務であると規定していたのである。このうちの全国的機関紙は『労働者新聞』の創刊としてあらわれたが、総同盟内にふみとどまって革命的反対派は右翼分裂主義とあくまで抗争しなければならぬ、内部にあって拡大強化しなければならぬという条項は、それが国内にもたらされるまえに、分裂が強行されたためにおこなわれなかった。

#### 4 共産主義グループの創設

かように直接党内においてもまた外部においても、コミンテルンの直接の指導支援をうけて委員会の仕事は進展してゆき、ついに共産党の結成のための過渡的段階として「共産主義グループ」を結成するまでになった。これは二五年八月であった。そして九月には左翼労働者の圧倒的な支持をうけて『無産者新聞』<sup>(三四)</sup>が創刊された。

一月のテーゼは上海におけるコミンテルンの指導者の会議でつくられたが、それを代表が国内にもたらし、ビューロー拡大会議をひらいて審議し、これを実行にうつすことについて協議をおこない、コミンテルンの一月テーゼを完全に承認しこれを実行にうつすための具体的方法を決定した。

このビューロー会議で採択された政治テーゼと組織テーゼとがある。いまそのもつとも肝要な点だけを述べて、この当時における党のもつとも重要な任務の説明をこれで代表することにした

いと思う。

このテーゼはまず日本の情勢を分析している。すなわち、現在の日本の深刻なながびいた不景気は急速に回復さるべき徴候をどこにも見いだせない。経済的・財政的狀態はますます不健全なものとなり、その結果、労働者階級および小作人大衆の生活の窮乏とその急進化とはますます度をつよめている。その情勢はいわゆる無産政党的組織運動の急速な展開のなかによくあらわれている。これにたいして支配階級のすべての分派、憲政会、政友会、貴族院、枢密院はあらゆる方法をもって無産政党的大衆から切りはなして、無意味な政治団体たらしめようと一生懸命になっている。他方、共産党をうらぎった赤松一派の改良主義者たちは無産政党的共産主義者を排除した社会民主主義党とする陰謀をたくましくしつつある。

これにたいする日本共産主義グループの任務は、まず赤松一派の社会改良主義、つぎにそのころ安部磯雄などによってつくられた日本フェビアン協会、それから政治研究会の旧幹部、これら小ブルジョア急進主義を具体的闘争のなかにおいて克服して無産政党的運動の圏外に放逐することを第一とする。

第二の任務は、大衆自身の興味と活動とによつてのみ大衆的な階級的無産政党的形成されうることを認識して、あらゆる宣伝的・組織的方法をもつて大衆を動員すること、これである。

第三には、日本共産主義グループの直接の指導下にある労働者教育協会、水平社青年同盟、無産青年同盟ならびに左翼労働組合を結合して、無産政党内に共産主義的分派をつくること、これが第三の任務である。

当時の無産政党的組織運動のなかには、いま明白に社会民主主義党となっているものをすべてをふく



んでいた。が、それは当時においては、なおそのなかに共産主義者が活動しうる革命的な闘争舞台としてもちいられるものであり、この無産政党運動において社会民主主義、改良主義と酷烈に闘争しつつ共産主義の勢力をつよめ、この無産政党運動を共産党の側にかちとることが、このグループの任務としてテーゼが規定している眼目であって、けっして共産党のほかになんらかの政党が必要であることをすこしも意味するものではない。また同時に、労働者・農民の特殊な政治的戦線という形で山川均氏が合理化していた日和見主義的組織論(三五)とも無関係なものである。

最後に、無産政党内に共産主義的分派をつくることを規定している。これは当時の無産政党運動は今日のような数年前から労働者抑圧のブルジョア代理機関になりかけてきた無産政党とは区別さるべきもので、なお革命的意義をもっていたからである。さらにこのテーゼにおいて、無産政党なるものはけっして共産党にかわるべきものではないことを明白にしめしている。

すなわち、「われわれは無産政党がわれわれの理想的政党であるという幻想のもとに活動してはならない。真のプロレタリア政党は共産党あるのみ」といつている。

かように共産主義グループの創立会議において採択された政治テーゼは、きわめて重要な意義をもっている。この会議は政治的方面だけでなく、組織的方面でも非常に重要な役割をもっていた。ここで採択された組織テーゼについて簡単に述べる。

党は工場細胞を基礎とする民主的中央集権主義の原則に立つ、労働者・農民の大衆団体のなかにフラクションを構成する、こういうポリシエヴィキ的組織原則はこの組織のテーゼにおいて明白に採用されている。すでに前年(一九二四年)コミンテルン第五回世界大会において、党のポリシエヴィキ化というスローガンが採用された。党の政策がいかに正しくとも、プロレタリア大

衆とのあいだの正しい結合関係、工場細胞を基礎としたポリシエヴィキ的組織がなければ無意義となる。このことは、日本共産主義グループの確立会議においてもやはり採択され、この原則にもとづいて党の再建にすすむことに決定したのである。

この会議におけるおもなる決定事項はこの組織テーゼ、政治テーゼに完全に表現されている。この時代における党活動の概要は二つのテーゼを述べたときにつけくわえたので、細部のことは述べないことにする。

## 5 コミンテルン執行委員会第六回総会における 日本共産党再建のための決議

この間に、党を結成すべき条件が客観的にも成熟してきた。翌年一九二六年二月から三月にかけてひらかれたコミンテルン執行委員総会、プロフィンテルンの幹部会、国際共産青年同盟の幹部会には、日本共産主義グループの代表者が出席し、日本共産党再建のための直接の具体的な決議がつくられた。同年六月日本の代表がこの決議を国内にもたらしたので、拡大ビューロー会議を開催し、この決議について詳細に徹底的な討論をおこない、その実行方法を協議決定した。

この二六年六月の拡大ビューロー会議以後、党は急速に労働者の革命的要素を吸収して党の再建大会を開催する運びになった。

この拡大ビューロー会議で決定されたことはつぎのようなものである。すなわち、即座に党員を一〇〇名ぐらいに増大すること、それはすぐにもできる。大会をできるだけすみやかにひらくこと、当時われわれは入獄していたが、この入獄者がだいたい出てくるときを見はからってやる。

この大会までに黨員をおよそ三〇〇名ぐらゐに増大すること、これは見こみが十分ある。これらの実行のために努力すること。コミンテルンの決議とプロフィンテルンの幹部会の決議とをできるなら合法的に宣伝文として発表し、できなければこれを非合法的に出版すること、などである。コミンテルンの幹部会でできた決議の実行は、二六年の後半に着々と実践にうつされ、十二月に党再建大会を開催するようになった。

#### 四 再建大会から再組織まで

##### 1 再建大会

日本共産党は一九二六年十二月再建大会をひらくまでに発展したが、その背景として二六年中における労働者運動の急速な高潮、農民運動における土地問題の急迫切迫化、それにたいする日本のブルジョア国家権力のもっとも断固たる鎮圧手段があり、労働者・農民は日常の利益をまもるための闘争においてすでに、国家権力と直面せざるをえない状態がいよいよ増大した情勢がある。二六年にはストライキの件数も飛躍的に増大し、また共同印刷の争議や浜松楽器会社の争議や別子銅山の争議におけるごとく、六〇日あるいは一〇〇日以上にわたるような長期な、そしていづれも資本家とのつびきならぬ頑強な闘争に血の出るまでであらう形となった。農村のほうも形勢はほぼ同様であって、争議件数も二六年はいちじるしく増加しているし、新潟県木崎における大争議にみるように、農民の地主にたいする闘争はもはや真に自己の生存のためにあくまでも土地にかじりついて徹底的に闘争せざるをえないところまできた。この農村における農民と地主との土地の争奪問題において、日本のブルジョアジーは地主の徹底的な味方であって、政府は農民にたいして非常な弾圧をくわえ、何百という農民が投獄される状態であった。労働者はそのストライキにおいて頑固な非合法的な組織をもち、強固な非合法的な指導とむす

がつくことが絶対に必要であるようになった。そして、みずからすすんで半合法的な組織をもって敵と徹底的に闘争せざるをえない経験によって、労働者大衆はアジトとか移動本部とかいわれた非合法的な組織をもつようになり、さらに共同印刷の争議において端緒をあらわし、ついで一〇五日にわたる長期の流血的な徹底的な闘争をたたかった浜松楽器会社の争議において労働者大衆が下からの闘争組織としてつくった細胞があらわれた。そして、この争議のための細胞の組織によって、官憲、会社の暴力団など、いっさいの敵の勢力とあらそうようになった。このことは、労働者階級の闘争が激化し深刻化した結果、日本共産主義グループの指導にむすびついたかなり多数の労働者が共産主義的労働者党をもとめていたこと、闘争の経験をへたいわば階級闘争の将校ともいべき共産主義的労働者が日本共産党の結成を待ちかまえて門前に立ち扉のひらくのを待っていること、そしてあらゆる道をもって党に接近し党にたよろうとつとめつつあったことをしめすものである。<sup>(四〇)</sup> それについていまでもわすれられないことがある。『無産者新聞』の投書欄に一つの投書があった。それはその当時、ブルジョアジーの政府といっしょになつた右翼社会民主主義者たちが評議會を「共産系」だと攻撃したのたいして、「共産系といつてさかんに悪くいわれているが、共産系というものはいったいどんなものかよくわからない。共産系というものはどんな目的をもっているもので、たとえばいまどんなことをしている連中なのか」との質問であつた。これは共産党をいろいろの形で暗黙のうちに、もしくは公然ともとめていた労働者の声を反映しているものと思う。これにたいして当時の『無産者新聞』の編集部は「共産系といつていゝのは改良主義者の一つのデマゴギーである」とこたえていた。<sup>(四一)</sup> これはなにも『無産者新聞』の解答者が特別にまがぬけていたのではない。当時の党が、かくまでもつよくあらゆる手段で共

産党にはいりたいたい共産党がほしいことをあきらまかたっている、これらの労働者の要求に必ずることができないほどに、まだ小さかつたことを反映しているにすぎない。しかし、このことは、この「共産党うんぬん」にたいする労働者の真の要求、「共産党」にたいする攻撃について労働者が感じていたことをしめすものであるとともに、小ブルジョア分子はマルクスやレーニンの本を読んで共産主義を口にしても、真に共産党の組織、実際の階級闘争のための組織を絶対に必要とすることを身をもって知り、身をもってしめすことはできないことをあらわすものである。また、「共産系」にたいする政府と改良派社会民主主義者とのあらゆるデマゴギーと組織的な排撃運動ともかかわらず、労働者はますます共産党こそが自分たちのほんとうの味方だということを知つてきたことがあきらかにされると思う。そういう条件は日本共産党の再建を非常に有利にみちびいた。もちろん、五・三〇事件をもつて烽火をあげた中国革命の発展、国民軍の先頭に立つて実際に犠牲的にたたかつた中国の労働者・農民の英雄的な闘争、これらが日本の労働者に偉大な影響をあたえたことは重要なことである。

一九二六年十二月に党再建大会がひらかれたが、このとき、いまはなきわが党の英雄的同志渡辺政之輔が重要な指導的地位に立つてもつとも熱心に活動した。この党大会は、日本の労働者階級が一つの政党として、旧い第一次時代の党からその後のいわゆるグループ時代にかけて存在していたいっさいの旧い分派的・宗派的組織を克服して、あらたに再建される意味において、また労働者階級の圧力によってそこまで到達したことにおいて、非常に重要な意味を日本のプロレタリア運動史上にもっている。コミンテルン執行委員会もこの大会の成立にたいして祝電をよせて日本共産党再建を祝して激励した。

しかしながら、この大会の採用した根本方針には大なる誤謬があった。このことは今日ではす  
 であきらかである。福本主義といわれている一個のあやまれる小ブルジョア的な指導によって  
 この大会は左右されて、福本主義の政治方針を採用したのである。この福本主義なるものはこの  
 年にはじめて日本の小ブルジョア階級のあいだにあらわれたのではなく、その数年前からすでに  
 あらわれてだんだんと浸潤しつつあったものである。福本主義は今日では、二七年のコミンテル  
 ソの日本問題決議にもとづいて日本の党の諸同志、なかんずく同志佐野学その他の指導的な同志  
 たちが理論的に批判をしている。また全党員および党の影響下にあった革命的労働者、左翼労働  
 者は実際の行動をもって、闘争をもって、これを批判し克服してきたのであった。今日ではこれ  
 を理論的にも政治的にもくわしくいうにはおよばない。

この福本主義が擡頭したことについては、二五年ないし二六年において階級対立が尖鋭化し、  
 それとともに共産主義的左翼党と社会民主主義的右翼党との対立闘争の激化してきたこと、およ  
 び階級闘争の発展のなかにおいて旧来の左翼の指導精神であり旧来の共産党の指導精神であった  
 山川主義の指導が徹底的な破綻をばくろし、日本の労働者はこの破綻して死骸となった山川主義  
 的指導にかわってブルジョアと社会民主主義者との攻撃にたいして有力にたたかいうる新し  
 い指導を痛切に要求しており、それなしにはもはや運動をすすめることができなところき  
 いた、という情勢をみなければならぬ。また、福本主義の擡頭は国際的情勢にも関係がある。国  
 際的に資本主義の一次的・相対的安定期、資本主義の一次的・表面的な復興期——むろんそのも  
 とでも矛盾はますます激化しつつあり、労働者にたいする抑圧はいよいよくわわっていたが——  
 において、労働者運動とくに共産主義的な運動のなかに存在する、小ブルジョア層からたえずお

327835

ちこんできて小ブルジョア思想を代表する動搖的な日和見主義分子が、この資本の一次的・表面  
 的な安定状態に眩惑されて鉄のごときコミンテルンの闘争規律に不信用の念をいだき、いろいろ  
 な形で反コミンテルンの思想をまきちらすようになった——こういう一連の国際的右翼偏向があ  
 った。なおこの右翼偏向は極左偏向と隣り同士であり親類同士としてむすびついていたのである。  
 ドイツにおけるルート・フィッシャー、コルシュ、ルカッチらのいろいろの形で、またソヴェト  
 同盟においてもボリシェヴィキの社会主義的建設の闘争に反対しはじめたトロツキーをはじめと  
 する一連の人々、こうしたすべての国際的な反コミンテルンの一つの傾向があったが、これが日  
 本においては福本主義の形をとってあらわれてきたのである。この日本における小ブルジョアの  
 な急進主義は、当時、革命的労働者の要素とともに党に流入しつつあった小ブルジョアのインテ  
 リゲンチアの要素をとらえて、たちまち党および左翼大衆団体を風靡するにいたったのである。  
 福本主義、その理論闘争、分離結合論——それらがどんなにあやまっていたものであるか、どん  
 なに現実の日本のプロレタリア運動を阻害したことか、またうしろへひきさげたものであるかは、  
 あきらかである。当時でも労働者はこの福本主義の諸文献や諸言論にあらわれたものに多少の不  
 満をいだいたものであり、分離結合論や理論闘争主義にたいしては、多かれすくなかれ不審をい  
 だいたものが多かった。しかもなお、福本主義に左翼労働者の圧倒的多数がひきこまれたのは、  
 福本主義が山川主義の指導の破綻のあとにかわって登場してきて、山川主義において労働者をも  
 っとも失望した共産党を組織するという要求がこれで見だされるかと思つたからである。すなわ  
 ち——くわしいことを批判するのではないが——福本主義が強調している主体あるいは主体的条  
 件というものこそ、自分たちの要求している共産党であると労働者はとつたのであった。また、

そうとれるように、福本主義は主体または主体的条件なるものをもってきたのである。しかし、今日ではあきらかになったように、福本主義における主体なるものはマルクス主義の意識だけの集結であり、組織をまったく抽象したところの観念的な主体であった。その主体はマルクス主義意識のあるところにはどこにも存在する、どこにも共産党らしいものができるというにすぎないのであって、実際の共産党、労働者階級の闘争の現実の組織とは無関係のものであった。しかも、この主体的条件または主体という理論闘争、分離結合論等の表面はなやかな論議は、いままでも労働者がかつてとめえなかつた共産党にたいして、パンのかわりに石をあたたえたともいうべく、労働者はパンとまちがえてこれをうけとつたのである。これはやはり日本の労働者階級の大きな不幸の一つであった。旧指導の山川主義は党内においても福本主義の浸潤によって左から右へおしだされて、その後福本主義がはいつてきたのであるが、この福本主義は山川主義をおしだただけであつて、けつしてこれを克服してしまふことはできなかったし、またそうしたことのできる性質のものではない。この福本主義が労働者階級の闘争の発展によつてきずきあげられた党大会において指導的方針としてとりあげられたことは、日本の労働者階級にとって大きな不幸の一つであつた。

党再建大会はしかし、同志渡辺政之輔をはじめとして若干の優秀な労働者同志が参加してひらかれ、党の当面の諸政策を決定し、新中央委員会を選任した。そして長いあいだうしなわれていた党をいまこそ回復して闘争にのぞむのだという意気をもつて、まえに述べたような、闘争経験をつんで党の門前まできていた、階級闘争の将校ともいふべき人々がこの党にはいつてきた。このときにコミンテルンは、この党再建大会そのものにたいして祝意をよせると同時に、この大会

が採用した福本主義の方針に、まっさきにつよく反対を表明した。コミンテルンの指導はこの大会の採用した方針を日本のプロレタリア階級を毒するものであるとして否認し、モスクワのコミンテルン中央執行委員会プレジジウムにおいて正しく解決をつけなければならぬことを主張したのである。

党大会の採用した方針ならびにその他の諸政策はコミンテルンのつよく反対するところとなつた。同時にコミンテルンは、当時なお党内に浸潤していた山川主義の指導——すでに福本主義のために実際には大衆闘争の場面から除外されていたがやはりまだのこつていた——が、福本主義にもおとらずコミンテルンの主義に背馳するものであることを指摘した。そして、この双方を克服することなしには日本のプロレタリア階級は勝利することはできないという見地から、当時において分派ではなかつたが福本主義派ともいふべきものの代表とまだのこつていた山川主義派の代表、これらをいづれもモスクワに呼んで、徹底的な討議をおこなつて決定をあたえなければならぬことになった。当時の幹部派ともいふべき福本主義派のなかには、その後福本主義克服のために先頭に立ってたたかつた名誉ある指導者、同志渡辺政之輔もいたのである。同志渡辺政之輔は当時の非常に困難ないろいろの条件のもとにおいて、十数名の党員の参集する党大会をひらくために、実際に身をもつてあつたのであるが、その決定にたいするコミンテルンの召集を非常に重要視し、ぜひともできるだけ多くのものがモスクワにおもむき、コミンテルンの指導のもとに徹底的に討議してあやまれるところをただし、正しいものを得なければならぬことを主張して、いわゆる福本主義派の代表はモスクワにゆくことになった。その当時はなお党内問題であつたからいふべきではなかつたけれども、今日においてはもはや公表されてすこしもさしつかえな

いことと思うが、当時の反対派である少数派すなわち山川均氏その他をもつて代表する人たちは、このモスクワの召集にたいして、同志渡辺政之輔その他の同志たちが反対派もモスクワにいつて討議し決定をしなければならぬと熱心に説得につとめ、モスクワにゆくためのいろいろの手段について骨を折ったが、山川主義派その他の労働派の指導者たちはこれをサボタージュしたのである。党は中央執行委員等のるす中における指導機関をもうけて、モスクワで決定されるまでとはにかく大会で採用した方針のもとに實際運動をすすめてゆくことになった。

当時、党にはいまいったように、一方には福本主義、一方には山川主義、この組織的分派ではないけれども二潮流があったので、それをいま説明のつごう上で幹部派とか反対派とかいうように呼んだが、もちろん幹部派というのは分派ではなくして、これが当時の党そのものであったのである。この点をとくに言明しておく。

なおまた、附言すべきことがある。共産党をうらぎったある人々は、コミンテルンの指導者が——このものどもはコミンテルンの日本支部長といっているようだがそんなものはない——共産党の大会を否認する、一国の党大会を否認するなどはけしからぬ、といっているが、これはあきらかに国際的組織規律というものを全然知らないからだ。コミンテルンの指導者がたんに指導者であるということだけで党大会の決定を否認することはできないが、コミンテルンの執行委員会が一国の党大会の決議があやまっているときに、これを破棄せしめることができるのは当然である。階級闘争の組織において、国際的な中心がその一支部の決議のあやまっているばあいにはこれを否認し、新しい正しいものにかえることができるのは当然のことであり、またそうあるべきものである。

## 2 一九二七年における闘争

一九二七年、この年は日本共産党が福本主義の指導方針のもとに、そのレールの上に車をのせて進行しながらも、その後の階級闘争の発展は福本主義のレールをはずし、別の正しいレールの上にのせなければとてい階級闘争の機関車をすすめることができないことを現実に証明した年である。

すでに労働争議、農民闘争の激化においてみたとおりに、日本の資本主義は危機をふかめつつあったが、ついに一九二七年（昭和二年）四月になって、いわゆる昭和金融恐慌<sup>四四</sup>が勃発した。この恐慌の労働者・農民にたいする影響はじつに甚大なものがあつた。金融恐慌の労働者にたいする影響、すなわち大量的解雇、賃金値下げ、工場閉鎖等が、労働組合に組織されていない広大な労働者をも資本に反対して奮起せしめた。またこの金融恐慌の影響はもとより農村にもおよび、農村における階級闘争はこれがためにすばらしく激化した。農家の重要収入の一つである繭価の非常な下落によってとくに養蚕農民の窮乏がひどく、従来の小作争議に立ちあがった小作人だけではなく、広い範囲にわたる貧農大衆が全国いたるところに立ってあらそうにいたつた。

再建大会以後の党活動、主として一九二七年の活動がこの労働者・貧農の闘争に指向されたこととはもちろんである。日本共産党は、政府が少数財閥保護のために五億円にのぼる補償法を実施するやこれにたいして反対し、恐慌の犠牲者たる労働者の大衆闘争を組織するために工場代表者会議の運動を宣伝、煽動、組織し、また前年来からおこなっていた帝国議会解散のための闘争、普通選挙遂行のための請願運動——かの広大な大衆を動員しえた請願運動をさらに続行し、五億

の金を大衆から強奪せんとするブルジョア議会にたいする闘争を指導した。これらの闘争には左翼の労働者だけではなく、中央、右翼の大衆も参加して、じつに三月以上にわたって強力にたたかい、日本共産党はこの全闘争を通じて大衆を革命化し、共産主義的労働者をつくりだすことに努力したのである。すべての重要な運動は「工場へ」を合言葉としておこなわれ、労働者のいっさいの闘争は工場において組織されなければならぬことが、金融恐慌の影響にたいするせっぱつまった闘争のうちに痛切にまなばれた。「工場へ」という合言葉はこのときにあらゆる方向にむけられた。たとえば無産者新聞読者組織の活動においても、工場における読者会の組織という合言葉をもってすすめられた。日本共産党がこの年に一九二七年テーゼをうけたことが、工場細胞を基礎として党を再組織する方向にすすんだ根拠である。これらの運動は、当時の社会民衆党、日本労農党などの社会民主主義者の小ブルジョア的な闘争指導とするとく対立して、工場代表者会議運動にたいして彼らは積極的な消極的なあらゆる妨害をおこない、自己の傘下の大衆がそれに参加することあらゆる狂態のかぎりをつくした抑圧をくわえたが、これにたいして党は容赦なくその小ブルジョアの根性を摘発してたたかった。

かくのごとくこの二七年は金融恐慌にたいする闘争によって労働者階級の闘争が非常にすすんだが、これにもっとも重大な影響をあたえたものは中国革命のすばらしい発展であり、日本帝国主義の対中国干渉にたいする中国プロレタリアートの闘争である。この中国革命の指導権は革命をうらぎりすた中国ブルジョアジーから中国共産党を指導者とする中国労働者階級の手につりつつあったのであるが、この時代における中国労働者の比類なき英雄的な自己犠牲的な闘争、外国の帝国主義軍隊の砲火をあびつつ激しい殺戮迫害のなかにおいて発展させた英雄的な闘争が、

日本プロレタリアートにどれほど大きい感動をあたえたか、大きな影響をあたえたか、大いなる教訓をあたえたか、それはその後ますます明白になっていくところである。

その当時においても、たとえば中国の戦闘的な労働者が糾察隊あるいは便衣隊を組織して帝国主義者と抗争したことが日本労働者のあいだにただちに「輸入」されたようにみえた。が、これはけっしてたんなる流行ではない。中国の英雄的な労働者の闘争にたいする日本プロレタリアートの感激が、日本帝国主義者の中国にたいする武力干渉、ことに中国の軍閥等と結託して中国のプロレタリア農民を殺戮することにたいする階級的憤怒にむすびついた、偉大な革命的影響である。これが日本共産党をやしなう一つの大きな力であったことはあらそえないと思う。いままで日本の労働者は、中国人といえれば自分たち日本人よりはるかにおとつたものであるように宣伝され、またそう思いこんでいたのであるが、二六年から二七年にかけての中国プロレタリアートの栄誉ある革命闘争に面しては、まったく階級的な愛、革命的な同志愛を感じ、中国労働者の英雄的闘争によって自分たちが激励されたのである。それが日本の共産主義運動の発展に大きな力となったことを強調しなければならぬ。党のこの年の活動については簡単にするが、かくのごとく一方では金融恐慌の影響にたいする労働者階級の闘争、他方では中国革命の発展、中国プロレタリア闘争の影響、これらによって日本のプロレタリアートは非常に発展していったのである。

日本共産党はその当時、福本主義という反国際主義的な、反コミンテルン的な、反プロレタリア的な、小ブルジョア的な指導方針を採用してそのもとに活動していたが、ここにいたっては、その福本主義の指導とこの実際の階級闘争の発展とのあいだにあらわれてきた矛盾をみとめざるをえなくなり、日本共産党の当時の指導部は、十分に意識しなかつたけれども福本主義を部分的

に実際の闘争のなかで修正をくわえたのである。その年の夏から秋にかけて、共産党は党自身の綱領をもたなければならぬ、党は非合法中央機関紙をもって大衆のあいだに公然と党の政策を宣伝し公然と闘争活動をしなければならぬ、また、すべての運動はなによりも工場を基礎にしなければならぬ、党自身はやはり工場細胞を基礎にして再組織されなければならぬ、というような重要な問題に逢着してその解決をせまられたのである。しかし、これはなんといいっても福本主義を清算しないかぎりには、そしてコミンテルンの正しい指導と直接にむすびつかないかぎりには、絶対に不可能なことであった。また実際においても、そういう問題に逢着した当時の指導部は、中央委員会ならびに拡大中央委員会をひらいて、これらを議題にのぼせて討議した。しかしまだこれを実践にうつすことはできなかったのである。工場細胞の問題については、コミンテルンの第二回組織会議の工場新聞にかんするテーゼとともに細胞組織にかんするテーゼ等が日本にも文献としてはいった。当時の党指導部はそれに接していっそうその重要さを痛感したのである。

党は工場細胞を基礎として再組織するために過渡的な方法として、従来の地方的な地域的な仕事関係のフラクション的細胞組織にたいして、重要な工場の細胞を組織する任務をうけもたせる、すなわち従来の細胞にあらたな工場細胞の組織委員会の任務をもたせ、その周囲の受けもち工場の労働者をひきいれて工場細胞をつくりだすための一個の外廓ともいべきものを組織し、重要工場に接触してそこに細胞をつくりだす、こういう方針をとったのである。当時の細胞のうちのもっとも活動的なものは、この仕事に熱心に活動し、工場新聞なども指導部から指令を待つまでもなく発行した。またそういう活動的な細胞では、工場新聞にかんするコミンテルンのテーゼ等を翻訳して、黨員に配布することもしたくらいであった。

しかしながら結局において、当時の党を工場細胞の上に再組織することは、そういう従来の細胞が工場細胞委員会をつくってもってゆく方法では容易にできなかった。これはやはり、二七年テーゼをもってモスクワからの代表が帰国して、決然たる根本的な党の再組織をなし、従来の細胞を解いてあらたな工場細胞または工場細胞準備会組織に再建することによってはじめてできたのである。ここであきらかなことは、福本主義のあやまった指導を清算することができなかったけれども、実際の闘争の発展は党をかかえる重要な緊急の問題に逢着せしめたいということであり、またたいせつなことは、やはり当時コミンテルンから指摘されたように、あらゆる形の小ブルジョア的な指導を断固として克服しないかぎりには、いかによい思いつきが出たところで、いかに緊急な重要問題に面とぶつかったところで、それを実践にうつすことも解決することもできないということである。この二七年の党活動はそのことを証明するために再組織したといっても過言ではないくらいである。以上で二七年における党活動についてごく総括的に述べた。

二七年七月モスクワにいった日本の党の代表者同志はコミンテルンの指導のもとに、日本の党の問題を討議した。コミンテルンの指導者は全世界のプロレタリア運動を指導するために寧ろ日にくじつに忙しい、それこそ寸暇もないほどにたえず活動しているが、しかし日本の問題のために非常に大きな日時をさいた。山川均氏の気のぬけたくだらない文献や福本主義にかんする著書なども念入りに翻訳し、それらをよく読みよく検討し、また日本の実際の労働者運動の状態の検討のうえにもあらゆる方法をつくし、日本の党の問題にたいしてじつにあますところなく批判をくわえたのである。もちろん日本の代表者諸君は、同志渡辺政之輔をはじめとして労働者的なもっとも活動的な積極的な同志諸君はこの討議にじつに熱心に参加した。そして十分な討議をへた



結果できあがったものが、二七年七月におけるコミンテルンの日本にかんするテーゼである。

このモスクワにいった日本の代表者のあいだにも、やはり労働者の要素と小ブルジョアのインテリゲンチアの要素とがあつて、この問題の討議のあいだにわかれて、労働者グループというものが出てきた。これは党にあつた指導があるときに生ずるものであり、そのこと自体は都合であるが、このときの分派はいわば健全な分派であつた。そういう意味のものが同志渡辺政之輔を代表的な指導者として存在した。そうしてこれが二七年テーゼを日本の運動に実際にうつすにあつては非常な活動をしたのである。日本共産党は、二七年七月の決議によつてはじめて思想的にも政治的にもポリシエヴィキの線にはいり、そうして民主的中央集権主義の具体化のために、組織的にもっとも重要な工場細胞の基礎のうえに党を正しくすえ、日本の共産党にコミンテルンの線に沿うた抜くべからざる正しい礎石をすえたのである。

### 3 コミンテルン執行委員会の日本にかんするテーゼ

そこで、この二七年のコミンテルンの日本問題テーゼはいかなるものであるかをごく圧縮して述べなければならぬ。これはすでに翻訳されて二八年三月に雑誌『マルクス主義』<sup>四六</sup>に出ているが、この翻訳は非常に杜撰なもので、当時の党においてもただちに改訂することを決議したが、ついに今日までその改訂をはたさずにいる。

この重要な日本の党の画期的な文献、このテーゼの正しい翻訳ができ、それが日本の労働者大衆にあたえられることは非常に重要なことである。これはすでに数年前の決議ではあるが、今日においても非常に重要な意義をもっているから、その正しいものをあたえることは依然として必要であると考えられる。

要であると考えられる。

一九二七年七月、モスクワのコミンテルン執行委員会において日本の代表者とコミンテルンの代表者とが討議し決定した日本にかんするテーゼ、いわゆる二七年テーゼは、日本のプロレタリア運動にとつて、したがって日本共産党の発展にとつて、重要な画期的な意義を有するものであることはすでに述べた。このテーゼがコミンテルンにおいていかに周到なあますところのない討究の結果によつてできたものであるか、また突然と二七年にできたものではなく、その以前にすでにコミンテルンは日本の党の問題にかんじていくつかの重要なテーゼを作成していたかは、これまで説明した。とくに一九二六年すなわち前年の二月のコミンテルン執行委員会幹事会における日本問題の決議、これが直接に二七年テーゼの先駆をなしている。二七年テーゼが二七年の会議においてはじめてできたという性質のものでないことは、このテーゼの意義を述べてゆくあいだにあきらかになるであろう。

この二七年テーゼが今日の日本のプロレタリア運動にいかに実際に大きな前進的な役割を演じたかは、今日においてはなんびともうたがうものはない。ただこのテーゼをふりかえつてその不十分な点をひろいあげ、あの二七年当時においてはこの点はかくかくにすべきであつたというような、回顧的な高等批評的な非難をするものがあるが、これはだんじてコンミニストのとりべき態度ではないと思う。今日このテーゼをふりかえつてみていろいろの非難をすることは人のおのの好き勝手であるが、当時においてはこれが日本のプロレタリア運動にとつて最高の力の表現であり最高の指導方針であつたこと、そしてそれが実際の運動をすこしも妨害しなかつたどころか偉大なる前進的の役割を演じたことを強調しておく必要がある。このテーゼがなにゆえにか

く偉大な役割を演じたかを説明するにあたっては、いくぶんこのテーゼの眼目について述べる必要がある。

テーゼは日本の客観情勢を分析している。そして注意すべき点は、「日本帝国主義はなおその発展の上向線にある、とはいえ、その地位の矛盾、そのいっそうの前進をばむ諸困難の堆積は脅威的性質をおびはじめている、そのことはなによりもまず資本主義恐慌の特別の尖鋭化にあらわれている」と規定している一節である。<sup>(四七)</sup>これはいうまでもなく、日本の党に擡頭してきた福本主義理論の一つの現われである日本資本主義の急激な没落という独断論、また他方において、イギリスをはじめヨーロッパ諸国のいわゆる資本主義の安定状態を日本にそのままあてはめて、日本資本主義が安定しているというごとき無意味な議論をはいていた他の右翼的一派、この双方にたいして断然反対した見解であり、当時までの日本資本主義の情勢を正確にいいあらわしているものである。この上向線をたどっているということは、労農派左翼社会主義者一派がそれをとなえて有頂天になり、日本の資本主義がなお隆々たる発展の途にあるようにこじつけたものとはまったく縁のないものである。このテーゼは明白に日本の資本主義が上向線をたどっているといっているが、それには非常な制限がある。とくにアメリカの資本主義にくらべて非常に制限されたものであり、またもっとも重要なことは、そうした上向線をたどっている日本の資本主義のその内部における矛盾は非常に激烈に増大しつつあって、一つの脅威的な形態をさえとりはじめた資本主義恐慌の尖鋭なる形をとっていることである。テーゼは金融恐慌の直後にできたもので、とくにこの点を正確にとらえて日本資本主義の矛盾の激烈な発展に注意をうながしている。つぎにテーゼは日本の国家権力の構成をとりあつかっている。今日の日本の資本主義が世界大

戦中においてすばらしい発展をとげた結果、日本の国家権力は資本家と地主との反動的ブルジョアの手において、従来はそのヘゲモニーが地主的勢力のもとにあったが、いまや完全にブルジョアジーの手中にうつり、そのヘゲモニーのもとに反動的ブルジョア政権が運用されるにいたったことをつよくしめしている。これは二三年の党大会で審議された共産党綱領草案における見解より一歩すすんでいる。この綱領草案では、日本国家の半封建的な性質を地主勢力のヘゲモニーという点に帰して日本の現政府は地主政府であると規定したのである。しかし二四年から二五年の護憲三派内閣の成立について憲政会単独内閣が成立した。この発展をコミンテルンは正當に評価して、二六年二月テーゼにおいてはすでに明白にすぎたようにいっていた。「世界戦争のあいだに日本の資本主義は急激な発展をとげ、従来地主のヘゲモニーのもとにあった資本家・地主のブルジョア政権は、いまや完全にブルジョアジーがそのヘゲモニーをにぎるにいたった」と。二七年テーゼは二六年テーゼのこの点にかんする規定を継承し、さらにこれを明白にしたのである。<sup>(四八)</sup>テーゼはさらに日本における来るべき革命の展望について重要なことを規定している。これはすでに公表されているものであるから簡単にする。

このテーゼによれば、日本のブルジョア民主主義革命は強行的速度をもって社会主義革命に転化するであろう。なんとすれば、近代日本国家は種々の封建的特質と残存物ともかかわらず正しく日本資本主義のもっとも集中的なる表現であり、そのいくたのもっとも中枢的な神経を把握しており、それゆえに、それにあつた打撃はまた全体としての日本資本主義体制にたいするもつとも力づよい打撃となるであろうからである。すなわち、これによってみると、日本におけるブルジョア民主主義革命は社会主義革命への過程における一段階にすぎない。たとえブルジョア

民主主義革命を指導するとしても、プロレタリアートはけっしてその階級的展望を見うしないはしない。反対に、正しく社会主義革命への転化の展望こそが、プロレタリアートにとって闘争のあらゆる段階において決定的である。この意味で日本におけるブルジョア民主主義革命の展望は、すでにやく一九二二年の綱領草案の当時から発展してきているのである。二二年の綱領草案において明かに、日本におけるブルジョア民主主義革命の完成はブルジョア支配の転覆およびプロレタリア独裁の実現を目標とするプロレタリア革命の直接の序幕となりうるであろう、といっている。また同草案は、日本共産党はブルジョア民主主義の敵手ではあるけれども、それにもかかわらず過渡的なスローガンとして天皇の政府の転覆および天皇制の廃止をかかげ、かつ普通選挙権獲得の闘争を指導しなければならぬ。じつにこれを実行することは、日本の革命運動の現在の発展段階において、共産党の旗のもとに最大限度の勢力を集中し、その勢力の指導権をにぎり、かくして日本のプロレタリアートのソヴェト権力のための未来の闘争の道を開拓するために必要である、といっている。さらにまた二六年のテーゼはこの点にかんして、日本ではブルジョア民主主義革命がプロレタリアートのヘゲモニーのもとに労働者と農民とによって遂行されなければならぬ、すなわちブルジョア民主主義革命はプロレタリア社会主義革命に急速に転化する基礎をもっているのであるから、共産党は労働者・農民などのあらゆる進歩的民主的要求の先頭に立つてもっとも積極的に犠牲的に活動しなければならぬ、といっているのである。

二七年テーゼは二二年以来の発展を規定しているのであるが、なおこのテーゼにおいては、とくに現代の日本においては、革命の客観的条件が非常に成熟しているにもかかわらず、一方においてレーニンが革命の主観的条件と名づけたものが非常に未熟である。テーゼは、この主観的条

件の成熟のための闘争、すなわち共産党の拡大強化、その指導的役割の高度化、大衆のあいだにおける政治的指導権の獲得の重要性を非常に強調している。

また、この二七年テーゼにおいても重要なことの一つは、共産党の役割を強調することに関連して、旧来の日本共産党におけるあやまった小ブルジョア的指導、いわゆる山川主義、——このテーゼにおいては同志星によって発表されている思想、——他方これにたいして新しいあやまった小ブルジョア的思想、いわゆる福本主義、——このテーゼでは同志黒木の代表する思想といわれている、——これら党の発展を妨害する二つの重要な偏向過誤にたいして徹底的な批判をくわえていることである。これについてはさきに述べたので、ここではくわしく述べぬが、コミンテルンはこの山川主義と福本主義とがあくまでも日本プロレタリア運動の妨害物たる敵であると強調し、これらとの闘争をかしやくなく遂行すべきことを主張している。しかしこのテーゼをみてもわかるように、山川、福本がテーゼにおいて同志星、同志黒木としていいあらわされているが、——これは今日では明白なことであるからあえて公言するが——この同志星なり同志黒木なりを山川主義、福本主義の克服とともに党からほうむることはしなかった。コミンテルンおよび共産党はそういうことはけっしてしなかったのである。

しかしながら、同志星（山川）が党からほうむられて今日では公然たる党の敵となっているのは、ほんらい山川主義を徹底的に克服しているコミンテルンのテーゼにしたがわず、かえって党に反逆しコミンテルンに反逆して行動をしたがためであって、このために彼は党およびコミンテルンから放逐されたので、けっして山川主義の克服と同一ではないのである。

## 五 二七年テーゼにもとづく党の再組織から 第六回世界大会まで

### 1 再組織

日本共産党はこの重要な画期的意義を有するコミンテルンのテーゼをうけてこれを実践にうつすことになった。コミンテルンはこのテーゼとともに日本共産党の新しい中央委員を任命し、このテーゼの精神にもとづいて党を根本的に再組織すべき任務を担当せしめた。コミンテルンが日本の党の中央委員をあらたに任命した。すなわち、党再建大会の決議をコミンテルン執行委員会が討議して、日本の党にあらたな方針を遂行する固い義務を課し、このテーゼをあたえると同時にあらたな中央委員を任命したのである。

このことはブルジョアや社会民主主義者にはなかなか理解のできない、官僚的なもののように思われるであろうが、これはコミンテルンが世界的の集中的な厳格な統一組織であることの一つの証拠にすぎないのであって、さらにこのあらたなる日本の中央委員はけっして永久にそのままになるのではなく、日本共産党はただちにこのテーゼを実行にうつして活動すると同時に、できるだけすみやかに党大会をひらき、その大会でこのテーゼを確認し、あらたに中央委員を選出すべきものである。

日本共産党はこのテーゼを即時実践にうつすことにした。モスクワにおもむいた日本の党の代表者は一九二七年十一月にかえり、十二月二日に拡大中央委員会を開催した。拡大中央委員会においては二七年テーゼについて熱烈な討論がおこなわれ、すべての同志は圧倒的支持をもって、このテーゼにもとづき党内でも最先頭に立って指導的に活動することをちかった。さらに新しい中央委員しかもその常任委員が、従来の党のすべての細胞にこのテーゼにかんする報告にゆき、全党員が十分討議し各党员が確信をもってこのテーゼを実践にうつすように努力した。党员の圧倒的多数をしめている、ブルジョアジーにたいする闘争の経験によってまなんだ労働者闘士たちは、じつに熱烈な賛同をこのテーゼにむけ、身をもってその実践にあたることになり、このテーゼをもってよろこびいさんで工場にとんでいって活動した。党はこのテーゼにもとづいてただちに党全体の根本的再組織、改造をおこなった。従来の細胞を工場細胞または工場細胞準備会に組織替えして、党は工場のなかから労働者大衆の革命的エネルギーを吸収し、真に労働者の大衆党となる道をごくにふみはじめたのである。

また、この根本的再組織、すなわち工場における活動、工場細胞の確立発展のための闘争、これらによつてはじめて全党員が積極的に党活動に参加することになった。またこの再組織の結果、従来は非合法的存在をよぎなくされたため大衆に自己の姿をかくしていた党が公然と政綱をかかげて大衆のなかにあらわれるようになった。中央委員会はただちに政治テーゼ、組織テーゼ、労働組合運動にかんするテーゼ、当面の諸政策にかんするテーゼ等を作成し討議して、全中央委員会の決定をへてこれを公表した。また党の中央委員会の機関紙として『赤旗』を創刊し、これを党员のみならず党の周囲にいる革命的労働者のあいだにひろく頒布するようになった。かように

してはじめて、党は大衆と直接結合しうるようになったのである。これは日本共産党にとってこのテーゼの最初の重要な意義の実現であつて、このテーゼによって思想的にも政治的にも、また組織的にも、日本の共産党は正しいレーニン主義の基礎の上に、コミンテルンの線の上に立つて、もはや抜くべからざる労働者大衆党としての礎石をすえることができたのである。こういうふうにしてこのテーゼは実現の緒についたのであるが、その実現をきわめて有利にした条件がある。それは国際的・国内的の客観的な条件、また国内における労働者の過去数年にわたる苦難な闘争の経験であり、これらが党に直接にくりわたり、または党を支持する力となつて、大衆党としての共産党の出発を容易ならしめたのであつた。

労働者の闘争においては、二六年以来ストライキは深刻化をたどつてきたが、二七年の金融恐慌からにわかにかつ激烈となつてきた資本家的産業合理化にたいする大衆の生死の闘争、頑強なる闘争がおこつた。また農民の方面においては、同じく二五年から二六年にかけて小作争議が飛躍的に増加し、とくに直接的な土地争奪の争議が飛躍的に増加し、農村の戦いは二六年以来しばしば暴動化の傾向をとり、二七年にはその傾向は一般化し、広大な未組織農民までが大挙して闘争に参加した。しかもブルジョアジーはかくのごとき内外の危機に面してますます反動的な政策をとり、労働者・農民は日常の闘争において国家権力と直面するようになってきた。また一方において、社会民主主義者の裏切りの事実がことごとくにばくろされ、かつますます増大し、彼らは公然と国家やブルジョア機関と取引するようになってきた。とくに共産党が公然と出現して大衆のあいだに活躍するようになる、社会民主主義者の化けの皮はいやでもおうでもはげげゆかねばならなかつた。かかる情勢のもとにおいて、党の発展、大衆化のための闘争は有利におこ

なわれた。党員は少数の小ブルジョア・インテリゲンチアの分子をのぞくほかは、すべて熱烈に党再組織の闘争に参加し貢献した。テーゼを実践にうつすにいたつた経過はいままで述べたとおりである。

ここで二六年十二月の党大会における再建と二七年の再組織とについて説明しておく。二三年三月、共産党がコミンテルンの承認も得ずまたもちろん党会議の決議も得ずに、小ブルジョア幹部のために組織の解体を強要されたのちに、いわゆるグループ時代というものがあつた。これを正式に党として、いわゆる第一次共産党時代の地位にコミンテルンの関係も回復して、正式な党としてグループから脱却して再建した。これが再建であつた。今度の再組織というのは、従来の、とくに再建大会において採用された決議にもとづいて活動してきた党、これをより以上発展せしめるためには二七年テーゼが絶対に必要であつたので、党をこの二七年テーゼにもとづいて根本的に、政治方針をもまた組織上の形態においても改組すること、これが再組織における重点である。政治上、組織上においてもコミンテルンの線に沿つて、あやまつた指導を清算して根本的につくりかえるという意味で、再組織といつたのである。

## 2 再組織から三・一五検挙まで

これから、再組織後の日本共産党の主要な闘争について述べる。日本共産党がコミンテルンのテーゼにもとづく再組織に着手してただちに当面した重大な闘争場面は、総選挙、普通選挙の最初の実施による国会総選挙戦であつた。この総選挙において日本共産党は現実に大衆党として発

展する第一歩をふみだし、実践によって労働者大衆の党であることを大衆のあいだにしめすことができた。共産党はこの選挙戦にたいしては、第一に党の実際の再組織をすすめるために、なによりも第一に工場を基礎として党をきざきあげるために、そうして党の勢力を拡大するために、最大限にこの選挙戦を利用する目的をもって参加したのである。

そしてまた実際に、この選挙戦のあいだに党中央委員会は新党員の獲得をさかんに激励した。この選挙戦にさいして日本共産党がとった根本方針は、たしかコミンテルン第二回世界大会のテーゼと思うが、議会主義にかんするテーゼに根本的にはのっとった。そうして共産党の議会参加の原則をあきらかにし、ブルジョア議会の階級の本質をばくろし、この選挙闘争において階級闘争の発展、プロレタリアートの階級的組織の成長をうながすこと、ブルジョアジーにたいする権力の闘争におしすすめてゆく方針を厳としてとった。プロレタリアートはけっしてブルジョアジーの国家機関をそのまま継承して自分の機関とすることをえないうというマルクスの説、プロレタリアートはまったく新しい自分の権力機関とすることをなからぬソヴェト、そのみによって権力を奪取し行使し、そうして社会主義建設につくことができること、これらのことをなんらかくすところなく大胆に大衆のあいだに宣伝した。そして、共産党は選挙戦には参加するが、改良主義的な立法をつみかさねてそれでプロレタリア階級が解放されるかのごとき、または支配の地位にのぼりうるかのごとき幻想をいだくことにはたいして断固として反対すること、ブルジョアジーの議会を内部から破壊してプロレタリアートの新しいソヴェト権力をつくりあげるために、階級闘争の一つの補助的手段としてこの議会を利用し、選挙戦に参加するものであることを、宣伝したのである。<sup>(四九)</sup>

社会民主主義者たちはこの選挙闘争において、議会主義の幻想を大衆のなかにふりまくことにつとめ、議会は国民の意思の表現であるという社会民主主義の思想に立って、プロレタリアをだますことに骨を折ったのである。が、共産党は、——一般国民というような統一なものもは現在の日本社会においてはけっしてない、あるものはただブルジョアジーとプロレタリアートの階級対立のみである、議会による改良を通じてプロレタリアートが支配者となりうるというようなことは、ブルジョアジーと社会民主主義者との欺瞞である、プロレタリアートはただ大衆闘争によって、しかもその大衆闘争の最高の形態である内乱によって革命によって政権を把握しうるのである、——ことを大胆にあきらかにしたのである。議会内の闘争は議会外の大衆闘争に従属してのみ役だつものであって、共産党はこれを階級闘争の重点とはみない、階級闘争の重点は議会外の大衆闘争にある、議会内の闘争は広大な階級闘争の一個の補助支点にすぎないことを宣伝した。こういう根本方針にもとづいて共産党は選挙戦にのぞみ、具体的な選挙闘争においては、以上のような根本方針をもって、共産党独自の候補者を立ててたかかわなければならぬという方針をとったのであった。ただ当時の力関係においては、日本共産党が公然と候補者を立てるわけにはゆかなかつたので、当時の労農党その他の大衆政党といわれていた無産政党とくに左翼の労農党を通じて、その候補者として党員を立候補せしめた。選挙戦においてまた議会において、徹底的にブルジョアジーとたたかきいけるものは鉄のごとき規律による統一ある組織のもとに活動する共産党だけであって、いかに革命的な傾向をもつ闘士でも共産党の一員でないかぎりにはブルジョアジーとの徹底的な闘争をたたかきいぬことはできない。ゆえに、わが党は強烈な非合法の状態のもとにおいて、独自の候補者をどうしても立候補せしめてたかかわなければならぬことになった

のである。

いうまでもなく共産党の候補者は党中央委員会の統制に絶対に服従する。このときには選挙統制委員会という特別な委員会がもうけられたが、これを通じて党の指導部の統制に絶対に服従し、各候補者は全国オルガナイザーの直接の指揮のもとに活動する義務を課せられ、かつ共産党の候補者たるものはいかなる政見発表演説会においても党の原則を一步でもふみはずしてはならぬ、すくなくともこれこれの内容を演説のなかに織りこんで演壇に立たなければならぬ、という厳格な演説内容の要旨さえも中央委員会はさずけて、これに絶対にしたがうべきことを命令したのである。

このような厳格な党の統制のもとにおいて、党の議員候補者は全国各地においてあらゆる大衆闘争の先頭に立ち、演説会、大衆的な集会、とくに工場内部における闘争、集会または示威運動などにもっとも勇敢に活動しつつ全大衆の信頼をあつめてたつた。共産党はこの選挙戦においてなによりもその活動を工場に集中する政策をとつたことはもちろんであるが、一方また農業革命の切迫しつつある農民大衆を獲得するためには、とくに農民の要求たる大土地所有没収というスローガンをかかげてたつた。そして、この選挙戦における共産党の中心スローガンとしては、二七年テーゼに決定された一三のスローガンおよびそれにむすびつけてたつたかうべき中心スローガンたる「労働者・農民の政府」、「プロレタリアートの独裁」をとり、とくにこの選挙戦においてつねに中心スローガンとして前面にかかげたのは「労働者・農民の政府」であった。中心スローガンとしてその他に二、三を採用したが、結局は「労働者・農民の政府」にこの選挙闘争の全スローガンを集中したのであった。

なお、この選挙闘争においてわが日本共産党と大衆党といわれた「無産政党」がどういふ関係になつていたかについてすこし述べる。当時の選挙戦においては選挙協定なるものが問題となり、社会民主主義者やブルジョア新聞はこれに最大の注意と興味とをかけ、そして、どれほどの当選者を出しうるかが彼らの唯一の最大興味であった。日本共産党はそういう点にのみ注意をむけることをしなかつた。しかし当時においては、日本共産党は自身大衆党として出発したばかりの時代であつて、多くの大衆はまだ日本共産党なるものを知らず、多くは各無産政党とくに革命的な労働者・農民の大衆は左翼無産政党であつた労農党を支持し、これが唯一の革命的な政党であるように考えていた。こうした事情にかんがみて、党はこれらの無産政党と機械的に対立せず、それとの交互作用に立つて活動する方針をとり、とくにブルジョア政党との対立においてはこれを支持し、これら無産政党の闘争を結合して共同闘争を發展させ、もつて無産政党合同の一つの懸け橋とする方針をとつた。党はこれらの無産政党を支持するとはいへ、これらはけつしてプロレタリアートの革命政党ではないのであるから、彼らの誤りや彼らの社会民主主義的指導にたいしては、これをかしくなく批判して大衆にばくろする批判の自由をあくまでも保留する政策をとつた。

しかしながら、たとえば大阪から社会民衆党の候補者として立つた鈴木文治、また東北で立候補した赤松克麿、かくのごとき明々白々たる社会民主主義者にたいしては、批判を躊躇してはならぬ、大衆が彼らの指導をはなれるようにはからねばならぬという方針をとりながらも、鈴木文治はまだ大衆のある部分からは支持をうけているのだから、田中陸軍大将よりもまだましだ、だからわれわれも鈴木文治を支持しなければならぬ、墮落幹部が当選したところでべつに不利益で

もなく、彼らみずからブルジョア議会においてその本質をばくろして大衆にはじかれるのだから、選挙では支持してもよい、というようなきわめて寛大な態度をとったのであった。——もちろんその後の実際が証明しているとおりに、鈴木文治が当選して帝国議会の議員の椅子を占めてからの裏切りぶり、ブルジョアジーの御用商人ぶりはろこつにあらわれて、当時日本共産党が予言したとおりに、大衆の信頼を明白にうしなうようになったのである。——しかし、当時においても日本共産党がかくのごとき社会民主主義者にたいして寛大な態度をとったことは絶対に誤りであることをコミンテルンから批判され、社会民主主義者にたいする闘争がプロレタリアの運動の発展にとって、共産党の成長にとって、絶対に必要なものである、という二七年テーゼの正しいことを、われわれはやはりここで確認したのである。

なお、この選挙闘争の結果は周知のとおり、無産政党と称せられるいくつかの政党にたいして約五〇万の投票があったが、この約五〇万の投票のうち二〇万ちかくは当時の左翼無産党であり、日本共産党の指導と統制のもとにもっとも活潑にもっとも革命的にこの選挙闘争をたたかった労働党にあつたものである。すなわち、日本共産党がこの選挙戦において中心スローガンとしてかかげてたかかった「労働者・農民の政府」にむかって二〇万の投票が投ぜられたのである。このことはたんに投票の数だけではなく、日本における階級闘争の尖鋭化をしめすバロメーターである。日本共産党の発展の前途の有望であることを証明する一つの記念碑であつた。<sup>(五〇)</sup>

そのほか、いわゆる三・一五の検挙にいたるあいだに、日本共産党は労働組合運動の方向においては、福本主義の影響のために労働組合運動が過小評価された傾向のあつたことを克服して、党と労働組合との関係の重要なことを強調し、左翼的組合である労働組合評議会の強化に全力を

あげることに、労働組合の統一運動とくに大衆の下からの統一戦線を通じて労働組合の統一運動をすすめてゆくこと、こういう方針をとって着々と実現にうつした。また、野田醤油会社の大労働争議、前年の後半期からつづいていた長い野田の争議を応援するためにも闘争した。労働総同盟幹部は共産党および左翼労働組合の応援を拒絶したが、党と評議会とはこれにたいする大衆的な応援を組織することに努力し、各労働組合の野田争議にたいする共同闘争、共同応援を得るためにたたかかった。さらにまた、労働者の自衛のための闘争、——当時建国会その他の暴力団が労働争議や労働者団体の事務所をおそってあらゆる暴行をたくましくしていたのにたいして、日本共産党は工場を中心として労働者の自衛隊を組織して訓練をおこない、支配階級のあらゆる暴力手段に抗争することをまなび、武装蜂起のために準備しなければならぬことを宣伝し、また実行にうつしたのである。

二月下旬、総選挙をおわって、党中央委員会は第二回全国組織会議をひらき、この間の諸闘争の経験を集中した。第一回全国組織会議は最初の再組織のときに開催されたのであって、これは第二回の組織会議である。

第一回の組織会議では、党の再組織のために全国にオルガナイザーを派遣するにあたって、党の組織部がオルガナイザーをあつめて、二七年テーゼを各地方において実践にうつすための重要な討議をなし、その結果にもとづいて活動することを決定して、各オルガナイザーが地方へ派遣されたのである。これが第一回の会議で再組織の出発点となつたのである。二月下旬におこなわれた第二回の組織会議では、再組織以来の闘争の重要な経験を集中して、さらに党のポリシエヴイキ化のために重要な一つの決議がおこなわれ、また公然と大衆のあいだにおいて熱烈な活動を



したその経験が集積された会議であるから、非常に熱心な討論がおこなわれ、その結果、数個の決議が可決された。

その第一は党の組織方針にかんする決議である。これは組織活動における従来のセクト主義的な残存物を徹底的に清算することの急務と大衆的な組織方法を断固としてとることの重要さを強調し、組織活動における機関紙として中央機関紙、地方機関紙ならびに工場新聞の重要な役割を強調し、工場とくに大工場の獲得に計画的・体系的な努力を集中することを強調したものである。

また党のスローガンについて一つの決議が通過した。ここにおいては「労働者・農民の政府」とは労働者・農民の民主的・革命的独裁を意味するものであることを確認し、また大土地所有の没収という共産党のスローガンと大衆のあいだにすでに採用されていた耕作権の確立とについても決議した。また大衆の日常闘争と党のスローガンとの結合についても決議し、一般にかかる問題の決議が通過した。

第三には、いわゆる大衆党としての無産政党的合同問題についての決議を可決した。ここにおいては、大衆党は労働者・農民の政治的ブロックであって政党ではないという考え方を根底においたものであって、この大衆党の合同はすくなくとも「労働者・農民の政府」というスローガンを中心とした闘争によって、この闘争の過程においてのみ統一の道ができるのであることを規定した。

第四には、総選挙後の諸闘争にかんする決議——総選挙戦において正体をばくろした社会民主主義者にたいする攻撃、きたるべき臨時議会の即位大典の予算にたいする闘争、これらを規定し

た決議が通過した。

第五には、当時の労農一派(五)にかんする決議を討議し可決した。ここにおいては、労農一派といわれる左翼社会民主主義者の先達者たちはいまや国内における階級的な反逆者でありまた国際的な裏切者であるという烙印をおして、そのなかのあるものになりたいする党からの除名を確認したのであった。これらの重要な決議をして、第二回組織会議は党のポリシェヴィキ化のための闘争の出発において一つの偉大なる功績をのこした。かくして党は、いまや真に大衆の党としての活動を開始し、大衆のあいだに自己の政策を知らしめるにいたって、大衆の信頼はだんだん共産党にあつまりつつあったのである。

こういう情勢のもとにおいて、党はコミンテルンの命じたとおり、この闘争の一段階を境として党大会を召集する準備にとりかかった。およそ四月中に開催する予定で、あらたに政治テーゼ、組織テーゼ、労働組合テーゼの草案を作成して、コミンテルンの指導者と党大会のための予備会議を開催する準備をなし、これらの諸テーゼ草案をたずさえて中央委員の一員がコミンテルンに派遣された。この間に、党大会の準備のまっさいちゅうに、日本共産党はかの最初の大弾圧たる三・一五検挙の襲来をうけたのである。

党が再組織されてからいわゆる三・一五大検挙までの党活動上の成果について、なおすこしく補足したい点がある。再組織は日本の党の存在とその政綱とを大衆に公表して大衆に一つの強い光をあたえたのであった。いままで労農党を唯一の革命的政党と考えてその旗のもとにたたかってきた革命的労働者ならびに貧農は、この日本共産党の公然の出現によって、はじめてブルジョアジーにたいする徹底的な政治闘争をする政党は日本共産党であることを知った。いままで労農

党のもとに積極的に活動しながらも一定の活動限度にぶつかって、漠然と労農党にたいする不満をいだいていた、彼ら革命的労働者ならびに貧農の進歩的部分は、いまはじめてプロレタリアの革命政党を発見することができたのである。この再組織後の党の公然の出現によって、共産党はかつてみないほどの急速な速度をもって、労働者大衆を量的に高度に吸収しうるようになったのみではなく、質のうえでも、従来党内にあった小ブルジョアの動揺分子を克服して、決然たる労働者党としての実質をおびるようになった。

この再組織の事業は、二七年テーゼを承認せずにこれに背反して党とコミンテルンをうらぎった明白な裏切者を党から駆逐しただけではなく、積極的にテーゼにしたがって党の再組織のために、党の拡大強化のためにたたかおうとしない小ブルジョア分子にたいしても断然たる処置をとって大掃除したのである。さきに第二回組織会議の決議のなかで労農派にたいする決議について述べたときに、労農派の除名を会議が確認したといったと思うが、これはことばがたりなく誤解をうける憂えがある。事實は、この明白な労農派の裏切者にたいしては、すでにこのときに党内の下部組織から、彼ら労農一派は断然と党内のものではないことを声明せよ、彼らを除名せよという要求がおこっていた。また第二回組織会議では、各地方で惨憺たる苦闘をつづけてきたオルガナイザーの同志諸君が党の中央委員会にたいして労農派にかんする問題を提出し、かくのごときものが党に存在するかぎりにはけっして党は進展することができない、これは結局妨害物である、すみやかに駆逐すべしという要求を出したのである。そこで第二回組織会議の決議として、労農一派の頭目連の除名を決議し、中央委員会が確認したのである。この種の明白な積極的な裏切者のほかに、さっきいったような積極的にテーゼにもとづいて活動しようとしぬ分子をもや

はり駆逐したのであるが、この当時においてはなお、完全に駆逐しつくすことができなかった。この当時では十分におこなうことを期待することはむりであったのである。当時における小ブルジョアのインテリゲンチアの要素は、コミンテルンの決議に表面は服従してその政治的方針のもとに党にしたがっていたが、その後、なかんずく三・一五事件の大検挙以後、ブルジョアジーの弾圧のもとにおいて、実践のうえでこのコミンテルンの決議をうらぎり、労農派の連中よりも大胆にコミンテルンをうらぎりさったのである。かかる分子はやはり党の実践活動、ブルジョアジーにたいする闘争の発展のなかにおいてその正体をはじめてばくろするようになったので、はじめのあいだにはこういう分子が一部党内にとどまりえたのも不思議ではない。

なお、三・一五にいたるまでのあいだにおいて、党は工場に確実な基礎を獲得しはじめた。また、党のスローガン、とくに「労働者・農民の政府」というスローガンはひろく大衆のあいだに普及しはじめた。また、社会民主主義者にたいする日本共産党の当初の闘争はまえに述べたようにきわめて寛大であって、大きな失敗であったが、しかしその失敗をみとめて爾後ただちにこれを清算して、このブルジョアジーの代理人、社会民主主義者にたいしてかしくなき闘争をするようになった。普通選挙を中心とした当時の社会民主主義にたいする党の失敗は大きな教訓をあたえたのであった。

三・一五事件は周知のごとく、一九二八年三月十五日の暁に全国二〇有余の検事局が動員され、共産黨員たる疑いをもって一千名ちかくの労働者・農民の戦士が逮捕されたのである。

### 3 三・一五から第六回世界大会まで

この三・一五大検挙からだいたい同年の夏、革命の都モスクワで開催されたコミンテルン第六回世界大会の前後にいたるまでの党活動について述べたいと思う。

三・一五の大検挙にさいして、ブルジョア政府はいっさいの新聞報道を禁止して、まったくの暗黒のうち何百という労働者・農民の前衛分子を処断しようとした。そして、あたかも暴動団、暗殺団のような陰謀が発覚したようにみせびらかしたのである。ブルジョア反対党や社会民主主義者たちはまた、この検挙は田中内閣が選挙干渉に失敗したことをごまかすためだ、あるいは選挙中に内務大臣鈴木不喜三郎が皇室中心主義の宣言を出して非常に不人気を買ひ、みそをつけたのをごまかすために、来議会の切りぬけ策として政略的にこの検挙をやったのだ、というようなしおらしい批評をしていた。しかしこれらはすべて、この検挙の階級的意義を滅却するものだという見地から、ただちにわが共産党は、この検挙はほかでもない労働者階級の前衛である日本共産党にたいする弾圧であり、労働者・農民の前衛にたいする弾圧検挙にほかならない、そしてつぎにきたるべきものは労働者大衆団体にたいする弾圧であることを大衆にうったえて大衆的抗議運動を組織し、種々の労働組合、農民組合等の大衆団体を共同闘争に立たしめ、このブルジョアジの狂暴なる弾圧に抗議せしめるようにはたらきかけた。党の中央委員会は、さらにこの検挙事件の真相を明白に摘発して大衆にひろく知らせる必要をみとめ、つぎの意味を大衆にひろく知らせた。

第一に、日本ブルジョアジは中国革命の発展におびやかされ、中国とくに満州、蒙古における日本帝国主義ブルジョアジの権益がおびやかされるのを防衛するために、武力をもって中国革命の発展に干渉する必要に当面している。そのみでなく、中国の問題を中心として日本を主

とする各帝国主義者のあいだの衝突はますますはげしくなり、あらたな帝国主義世界戦争の危機が切迫して、日本の帝国主義はいやおうなしに来るべきその戦いに一大主役を演ぜざるをえない。こういう状態にあるがゆえに日本のブルジョア政府は日本共産党にたいする大弾圧をおこなったのである。なぜかというに、この日本共産党こそ、中国革命の支持、帝国主義戦争反対のスローガンをかかげてそのために真にたたかい、さらに「帝国主義戦争を内乱へ」、「自国政府の敗北」というスローガンをもって、実際に自国ブルジョアジの政権と闘争する唯一のものであるからだ。ゆえに、日本共産党はブルジョアジとあいいれない敵手である。かかる恐るべき日本共産党が無事安全に活動を展開して成長することは、ブルジョアジの利益のために大衆を犠牲とする戦争を満足に遂行することができないから、日本共産党にたいする弾圧をおこなったのである。第二には、日本のブルジョアジはとくに金融恐慌以来、激烈な野蛮な産業合理化政策をきわめて強烈に遂行した。その遂行のために、日本共産党の影響のもとにあつて、それにたいしてたかう革命的労働者を弾圧しなければならぬ、という理由によって日本共産党を弾圧したのである。

第三には、農村における農業革命が農民のいろいろな暴動の形にあらわれて迫切しつつある。この危機において農民の蜂起を鎮圧するためには、農民の唯一の信頼すべき指導者であり味方である共産党、大地主の土地を没収して農民にあたえるためにたたかっている日本共産党をせひとも弾圧しなければならぬ。このために日本のブルジョアジはこの大検挙をおこなったのである。これらのことをわが日本共産党はあますところなく大衆にうったえた。

共産党は大検挙によって破壊された党組織の再編ならびにその機関の回復に着手して、四月の末日にはやくも全国的の連絡を回復し、『赤旗』の再刊すらできるようになった。日本共産党の中央機関紙である『赤旗』について、まえにすこしいもらしたから、ここですこしおぎなっておく。日本共産党が中央委員会の機関紙をもつにいたったのは党の再組織以来のことであつて、その以前には中央機関紙をもたなかつた。この党中央機関紙は党中央委員会の政策を黨員ならびに党外の革命的労働者大衆にたいして知らしめ、中央委員会にたいする信頼をつよめるのに重要な役割を演じ、それによって党大会からつぎの大会までのあいだにおける党中央委員会の活動が大衆のあいだに強い影響と信頼をうえつけ、大衆と党とをむすびつけるうえに絶対的な役割をもつものである。この党中央機関紙をもつようになってから、日本共産党は真に大衆的な組織運動を十分にすすめるようになったのである。この『赤旗』は三・一五事件によって一時ごく短い期間中絶したが、いまいったとおり、四月の末にいたつて再刊することができ、しかも以前よりもいっそう定期的にかつ頻繁に発行するようになった。この大弾圧のもとにおいても、党の旗じるしはさらにいっそう大衆のあいだに権威をつよめる働きをするようになったのである。

検挙をまぬがれた黨員および党外の革命的労働者、いわゆる同情者、シンパサイザーの同志諸君は、この検挙および検挙にひきつづくブルジョアジの白色恐怖的な弾圧の危険をおかして、自発的に工場細胞の再組織のためにはたらき、また破壊された大衆団体の再建のために、団体のいろいろな機関をつくるために、また大衆を動員して検挙にたいする抗議運動を組織するために活動したのである。しかるに社会民主主義者の連中は、右から左まで公然または隠然と共産党の検挙を支持し、検挙にたいする大衆的な反対闘争をボイコットした。右翼の社会民主主義者は、

日本共産党は天皇制廃止のスローガンをもっているが、そんなスローガンをもっている共産党が今日のブルジョア国家によって弾圧されるのはあたりまえである、と共産党の検挙が正当であるかのようにいって、公然と臆面もなくブルジョアジと天皇とにたいして忠誠をちかい、ブルジョア国家の安寧に味方したのである。また社会民主主義者のうちの左翼は、共産党があまりやりすぎた、あるいは共産党は戦術をあやまったといふらして、この流血的なブルジョアジの弾圧のもとにたたかっている共産党にたいしてあらゆる悪宣伝をはなち、このことによつて実質上ではブルジョアジの共産党検挙、プロレタリア運動の弾圧を幫助したのである。

133 五 二七年テーゼにもとづく党の再組織から第六回世界大会まで

かくして、彼ら社会民主主義者がブルジョアジの味方をしていゝるあいだに、ブルジョア政府はさらに一步ふみこんで、四月十日に三大衆団体——労働組合評議会、労働党および無産青年同盟、この革命的な左翼団体にたいする解散を断行した。日本共産党はこの三団体解散にたいして、三・一五事件検挙のひきつづきとして大衆的抗議運動を宣伝し、そして暴圧反対同盟なるものも成立をたすけた。このときに労働党の内部においては小ブルジョア幹部が、ブルジョア政府の解散命令にたいしては合法的な範囲でふたたび結党し、という敗北的な傾向をあらわしたが、わが共産党はこれにたいして断固としてたたかい労働協議会なるものをもつてたたかうべきことを主張した。労働協議会は、ブルジョアジの労働党の弾圧禁止にたいして政府のゆるす範囲で再結党しようとする敗北主義者にたいする闘争として、またすでに当時、労働者・農民の政党といわれている無産政党的小ブルジョア性にたいして党がもっていた考えを、労働党にたいする弾圧を機会として表面にあらわしたのであり、こういう労働党によつてたたかうよりも労働者・農民協議会の組織によつてたたかうことを主張したのである。

さらに党は、労働組合評議会の解散にたいしてただちに評議会再建のために闘争した。これは産業別合同の運動とむすびつけて、産業別評議会の組織を基礎にし、これを強化することによって、評議会再建のための運動とすることとした。

なお、無産青年同盟の解散にたいしては、わが共産党はまずなによりも共産青年同盟を再建する方針をとり、その方針の実現に着手した。この三・一五の検挙ならびに四月十日の弾圧以後、日本のブルジョアジーはまったく白色テロルの世界を現出したのであって、この白色テロルのもとにおいて、わが共産党は諸大衆団体の先頭に立って、しかもすこしもひるむことなく、いっそう大衆のあいだに強力な闘争を展開していったのである。

日本共産党は、この時代において、あれくるう白色テロのもとにおいて、なにより第一に力をそそいで日本ブルジョアジーの中国にたいする出兵、帝国主義戦争の危機にたいする闘争をおこない、その準備にたいして敢然と闘争した。わが党にたいする三・一五の検挙は帝国主義戦争の危機にたいするブルジョアジーの絶対的な必要事であった、という見解がまったく正しかったことはただちに証明された。四月十日の三団体解散直後の四月下旬に、政府は中国の国民北伐軍が日本の利権の根源地たる満州、北中国をおびやかすと称して、熊本、広島、久留米の各師団から混成旅団を編成して出兵し、五月四日の済南事件をひきおこした。この済南事件は、日本のブルジョアジーが済南という山東省の町に住まっている日本の阿片密売業者および売春婦を犠牲に供して、中国の軍隊との衝突を挑発したのである。周知のごとくに、国民軍のほうからは最初から、日本居留民を撤退してもらいたい、そのためには費用を出してもさしつかえない、といって日本政府に交渉したのであるが、日本のブルジョアジーはいわゆる現地保護なる名目のもとに、あく

までも中国の領土内にとどまって勢力範囲を確保しようとしたのである。

済南事件のために多くの日本人が惨虐な殺害をうけたように、日本のブルジョアジーはさかんにいふらして、「愛国心」を鼓吹して排外的敵愾心の挑発にこれつとめたのである。しかし済南事件は日本ブルジョアジーが中国領土侵略のために、これを一つの道具につかつたものにすぎないことは明白である。当時の田中内閣は臨時議会においてこの済南事件を口実としてただちに三〇〇万円の予算を要求し、さらに名古屋の第三師団、広島の通信隊、各務ヶ原の飛行隊などを中国の領土におくって、国民軍と対戦せしめることにした。田中内閣はすでにそれまでに、四〇〇〇万円を中国の武力干渉のために消費し、数千の兵を中国の領土におくって砲火の危険のもとにさらし、さらにまた一億五〇〇〇万円の「剰余金」を中国侵略のために自由に使用するという、ふとぶとしい帝国主義的政策をやったのである。

こういう日本の中国侵略は一方においてアメリカとの対立を激化した。当時アメリカの政府は、日本の満蒙における特殊権益なるものをみとめない、日本の中国出兵は不法である、として公然と抗議した。また日本政府も当然アメリカの抗議を予想していたので、この抗議にたいしては一步もしりぞかずにアメリカとの戦争の決意をかため、中国の領土を舞台として戦争を断行しようとするばかりになっていた。このことを日本共産党はただちに内外の情勢からみぬき、日本帝国主義者の帝国主義戦争にたいする周到な準備、陰謀を摘発して、プロレタリアおよび農民に帝国主義戦争に反対して立つべきことをうったえた。すなわち、わが党はその当時党の種々の機関を通じて、日本の帝国主義者たちがアメリカとの戦争を具体的に用意しつつあることの実際の証拠の一端をにぎったのである。東京砲兵工廠においては六五〇名の臨時工がやといわれられて武器

の急速な製造にとりかかったし、福岡の渡辺鉄工所は水雷の発射管の製造を急に開始し、また中島飛行機製作所、名古屋の内燃機工場、川崎造船所などではにわかには陸軍の飛行機五〇〇台の製造を開始した。こういうきわめてわずかな事実によっても戦争準備の一端が証明されたのである。党はこのときにおいて、全組織の破壊的な満身創痍の状態のもとにおいてもなお、この中国にたいする日本帝国主義の出兵に反対する闘争を大衆の先頭に立ってたたかた。まず中央機関紙『赤旗』をはじめその他の機関によって、中国を侵略する日本帝国主義の戦争にたいして反対した。また日本共産党はこのとき、中国共産党の同志と共同会議を開催し、中国および日本の両共産党の共同会議において日本帝国主義の中国侵略にたいする共同宣言を発した。かくのごとく、中国と日本とのプロレタリアートの前衛が日本帝国主義にたいする闘争を実質的に共同して公然おこなうようになったことは、日本の党において従来はきわめて微弱であった国際主義の強い発揚を証明するものであって、じつに中国と日本のプロレタリアートの友愛的提携の模範をしめしたものである。

なお、わが党は汎太平洋労働組合会議（五三）の日本の対中国干渉にたいする闘争の訴えにに応じて、労働組合評議会その他の労働組合をうごかし、対中国干渉にたいする大衆的な闘争を組織することをつとめ、この闘争は戦争反対同盟の形としてあらわれた。党はまた全国の主要都市において、あるいは演説会あるいは合法的または非合法的な示威運動を組織することに努力し、常にその先頭に立ってたたかってきた。しかして、わが党はけっして一般的な文書や集会の演説などだけでは満足せず、日本の出征軍隊にたいして、ブルジョアジーの利益のためにする戦争に反対せよと執拗に宣伝をおこなったのである。濟南占領とともに第四次出兵が決定し、名古屋の第三師団が

派遣されるようになったとき、わが黨員ならびに党の影響下にあつた革命的労働者、わけても年若き青年戦士たちは、第三師団にたいして、自己犠牲的にもっとも勇敢に戦争反対の宣伝運動をやつた。名古屋の金の鯨（五三）のもとで、戦争反対の「不穩」文書がいたるところから出たことだけでブルジョアジーは驚愕して、ついに治安維持法を死刑法にあらためたのである。当時の司法大臣は治安維持法を改正して死刑法にしなければならぬ理由として、共産党はいまなお絶滅どころではなく、中国にたいする戦争にじゃまをいれてこまる、帝国軍隊の出征を妨害してこまる、という理由をならべた。これによつてもあきらかなように、当時の日本共産黨員ならびに革命的労働者、わけても青年の戦士諸君が自発的に決死的に日本帝国主義の出兵にたいしてたたかたことは、じつにめざましいものがあつた。さらにわが党は、中国への軍隊の輸送や武器の輸送をとめるために、労働者にたいして中国への武器や軍隊の輸送を妨害せよと宣伝し、また実際に海陸交通労働者のあいだに組織的な活動を開始したのである。

わが党が三・一五の大打撃にひきつづく官憲の追及と白色テロルのあれるうもにおいて、かくも日本帝国主義者の中国侵略のための戦争にたいして頑強に闘争したことは、日本プロレタリアートの大きな成長をしめすものである。

なお、日本共産党の当時における重要な闘争の一つは革命的労働者を死刑にする治安維持法を撤廃するための闘争であつた。日本共産党にたいしてむけられた法律であり、反プロレタリア法律であり、反共産主義法律であるこの治安維持法の改悪にたいする闘争は、もちろんわが党がその先頭に立ってたたかうべきであり、わが党は当時の田中内閣が議會でにぎりつぶされた治安維持法改悪を、わずか十日後の閣議にふたたびもちだして緊急勅令として発布しようとしたのにた

いして、激烈な闘争を開始した。治安維持法の社会的な根拠は日本ブルジョアが労働者・農民の骨までしゃぶらなければやまない酷烈な搾取を維持するためで、そのためにこそ死刑法にあらためなければならぬという欲望はまた日本ブルジョアの骨の髄から出たものである。したがってこの治安維持法にたいする闘争はブルジョアの支配を転覆するための闘争でなければならぬ、ブルジョアジの支配そのものにたいする徹底的な闘争なしに治安維持法がゆるめられまたは廃止されるような、おめでたい平和的な日を待つわけにはゆかぬのである。こういうことをばくろして、国家権力にたいする大衆闘争とむすびつけて、治安維持法の改悪にたいする反対、撤廃の闘争をおこなった。なお、これを中国にたいする日本の出兵侵略反対の闘争、対中国非干渉の闘争と密接な関係をもたせ、両者を相結合させて闘争を展開した。またわが党は「共産党事件」の犠牲者の即時釈放のスローガンを大衆のなかにかけて、大衆的に「共産党事件被告釈放運動」を組織した。

かくのごとく、治安維持法にたいする闘争および「共産党事件被告」の釈放のための闘争の先頭に立って、労働者・農民の革命的運動をすすめていったが、これにたいして社会民主主義者たちは、社会民衆党、日本労農党そのほかいわゆる労農一派にいたるまで、この治安維持法にたいする闘争を陰に陽にこぼんだ。彼らが治安維持法改悪にたいして一応、反対のことばを述べたことはたしかである。けれども、それはただ、治安維持法の改正を緊急勅令をもっておこなわんとすることはいけない、それはあきらかに憲法を無視し議會を否認する非立憲的な行為だ、議會を召集する手続きの期間があるのにこれを避けて緊急勅令によってやるのは議會否認もはなはだし、というだけである。また日本共産党は「思想的犯罪」である、「思想的犯罪」を処罰し防止せ

んとすることは、かえって社会に悪影響をおよぼすものだ、または思想運動にたいしていたざらに極刑をもってのぞむのはたんに法律の野蛮にとどまってなんらの効果もない、——まずこんなところで、さんざん日本ブルジョアにたいして親切な忠言助言をしている以外には、治安維持法にたいする実際闘争を一つもしなかったのみでなく、大衆なかんずく自分の支配のもとにある大衆が反対闘争に参加することを、ふせぎとめるのに必死になっていた。

この期間における重要な闘争の一つは第五十五臨時議會にたいする闘争である。ここにおいては、対中国出兵の三〇〇万円の予算に反対することはもちろん、中国に派遣した軍隊艦隊をただちに召還する要求をかかえてせまり、また治安維持法の改悪に反対してその撤廃を要求し、共産党の検挙および三団体解散の不当にたいして議會に大衆の闘争をむけるように活動した。また議會に尾崎行雄が三大国難決議案なるものを提出したが、わが党は帝国主義戦争の危機ならびに共産党の成長に脅威されたブルジョアジの恐怖をそのままにあらわしたもつとも下劣陰険なる御用代弁であるとして、まっこうからこれに反対した。さらにまた、この議會提出の大典予算すなわち天皇の即位をいわずに七〇〇万円を国民からしほりあげる大典予算に反対した。大典において、いわゆる無産党議員がいかにもごとな裏切りをばくろしたとか。彼らはシルクハットをかぶり燕尾服をつけ、豊明殿にまねかれて御馳走酒によっぱらい、千鳥足で退出する写真をブルジョア新聞に出された。このもつともみごとな裏切りをわが党は容赦もなくばくろ弾劾して、かくのごとき無産党の議員なるものはけつしてプロレタリア農民の利益を代表するものではない、それどころかこれをうらぎるものであることを大衆のまえで痛烈に攻撃したのである。ブルジョアジの犬であるこれらの社会民主主義者たちは、すでに一〇年もまえから労働争議や農民争議

において、資本家や地主の餌につられてストライキや農民争議を資本家や地主に売っていたのだ。彼らがブルジョア国家の労働者・農民抑圧機関の一つとしてはたらいっていることは、彼ら自身の言動によって明白に大衆にせめられていたものであった。

農民運動の方面においても、わが党はこの白色テロのもとで農民のあいだに生じた一部の動揺や、指導者の右翼化などにたいして闘争し、右翼的な農民組合の合同運動に反対して、各地方の農民の地主ブルジョア政府にたいする現実の闘争によって合同にすすむべきことを主張したのである。さらに農民のあいだに革命的思想を宣伝することにつとめた。

東京電燈の争議、社外船の人員整理にたいする闘争をわが党は指導した。当時おこなわれた北海道における選挙および富山における電燈争議にたいしてわが党は大なる支持をあたえた。

三・一五の大弾圧からその年の秋にいたるころまでのあいだにおいて、さらに党の発展がすすむにしたがって、いわゆる八月検挙、十月検挙とひきつづいて検挙をうけたが、治安維持法発布、死刑法発布、警察暴力団のあれくるう白色テロ、かかる条件のもとにおいても政治的には断然と一歩もしりぞかず、つねにプロレタリアートの先頭に立って闘争したことは、日本の党がまだかつてなかったほどの強い根をもったことを証明するものである。このとき、わが党が政治的に一歩でもしりぞいたなら、ふたたびかの一九二四年の解党の悲惨をくりかえしたかもしれないが、すでにわが党はだんじてそうしたことができないほどに成長していた。かくのごとき、いままで日本に類例のない大弾圧と白色テロとのなかで、党はコミンテルンの正しい指導のもとに一歩も退却しないのみか逆に進出していったのである。かような日本共産党の白色テロのもとにおける進展とその成功は、客観的には日本の資本主義がもはや維持しがたくなってきつつあることと、

そのなかで労働者・農民大衆が左翼化し革命化していることがもちろんその条件ではあるが、さらに重要なことは、日本共産党が政治的に正しく頑強にたたかって公然と大衆のあいだに政策をかけた活動していることであって、この、党の主観的な条件があつてはじめて、自発的に労働者大衆が党の再建拡大のためにたたかうことができたのである。党がその機関紙をもって公けに政策を発表し、その他あらゆる非合法的な機関および諸集会等などの組織によって独自の活動を公然と大衆のあいだにおこなつてゆかなかつたならば、いかに客観的条件が有利であつても、かくのごとき白色テロのもとにおける、党の再建とその拡大強化がかくもすみやかにすすむことは不可能であつたらう。かような状態は二七年以前のわが日本共産党においては絶対に見ることができなかったところであつて、この期間における日本共産党の活動の成果をみると、三・一五以前において獲得しはじめた工場における組織は、この時期においてはとくに大工場経営に基礎を獲得することに発展し、ここに党のもつとも強い根城を築くことができたのである。またこの期間における対中国干渉にたいする闘争、戦争にたいする闘争は、党の国際主義の発揚を非常にかめたものであつて、これは重要なことであり、これなしに党は発展しないものである。社会民主主義者にたいする闘争は、彼ら社会民主主義者の翼下にある大衆に耳をかたむけしめ、右翼社会民主主義者の根城になつてゐる総同盟その他の右翼組合のなかにすら、わが党の党員ができたフラクションができ、右翼組合内における革命的反対派がうまれるにいたつたもつとも重要な出発点をあたえたのである。

最後に、この期間におけるわが党とコミンテルンとの結合についてであるが、激しい白色テロのもとにおいても、あらゆる危険をおかして、従来よりもいっそうコミンテルンとの連絡をつ



よめ、種々の手段を講じてコミンテルンの指導とむすびつくことに努力し、従来の数倍もコミンテルンとの指導的結合をつよめた。これは五月四日のいわゆるコミンテルン政治局の日本問題にかんする決議、党活動にたいする重要な批判をふくんだ決議、そのほか有力なコミンテルン指導者の助言指令が従来になく頻繁にかつ迅速にわが党にもたらされ、わが党の活動をたえず正しく指導してくれたためである。こういう状態にまで到達したことはまた大なる成果の一つでなければならぬ。

こういふふうになわが党の発展がつづけられてゆくあいだに、コミンテルン第六回世界大会がひらかれ、画時代的な重要なコミンテルン綱領をはじめとして重要な諸テーゼが日本にもたらされ、日本の党のポリシエヴィキ化の運動にたいして一大拍車をあたえることとなってきた。これからコミンテルン第六回世界大会の意義について述べることにする。

## 六 コミンテルン第六回世界大会以後

### 1 コミンテルン第六回世界大会（二八年テーゼ）

コミンテルン第六回世界大会は二八年七月から九月のはじめにかけてモスクワで開催された。この大会が開催されたころの情勢をみると、全般には国際資本主義の一次的・相対的安定も各方面からあらたな危機がばくろされて、いわゆる戦後資本主義第三期にはいったときであった。そして中国大革命をはじめ世界いたるところの植民地・半植民地に革命運動が燃えあがり、帝国主義世界をゆりうごかしていた。また、全世界にブルジョアジーの白色恐怖があれくるい、ファシズムおよび社会民主主義が労働者階級にたいする直接の徹底的な敵として立っており、ファシズムと社会民主主義とが結合して社会ファシズムはすでにあらそいがたい形で結成していた。これにたいして各国のプロレタリアートは、ブルジョアジーおよび社会民主主義者との激烈必死な闘争をおこなうこと、自己の陣営内における右翼日和見主義と闘争すること、これらを緊急避くべからざる任務としていた。<sup>（五五）</sup> こういう情勢のもとにコミンテルン第六回大会は開催されたのである。この大会は一九二四年の第五回大会以来の四年間における国際革命運動の経験を集積したうえにひらかれた大会であって、また最初のプロレタリア世界綱領たるコミンテルン綱領を討議決定すべき重大な大会であった。この重大なコミンテルン世界大会にわが日本共産党は、かの三・一

五検挙という打撃にもかかわらず、数名の代議員の派遣を執行した。コミンテルン世界大会に日本国内から数名の代議員が出席したことはいままでになく、コミンテルン大会の発展と日本共産党の発展をものがたるものである。

この大会では、第一にコミンテルンの綱領、第二に国際情勢とコミンテルンの任務にかんするテーゼ、第三に国際情勢の中心である帝国主義戦争の危機にかんするテーゼ、第四に植民地革命運動にかんするテーゼ、最後にソヴェト同盟の情勢にかんする決議が議題にのぼった。こういう重要な諸決議にたいして、全世界のすみずみからあつまった代議員は長時間の熱烈な討議をおこない、これらすべての画時代的意義のある綱領やテーゼが決定された。日本の代議員団ももとより全世界の同志たちに伍して積極的にここの討議に参加して、これらの綱領ないしテーゼの作成に力をつくしたのであった。

大会は日本の革命運動の発展にたいして注意をはらい、その国際情勢にかんするテーゼのなかで、日本共産党はなによりも第一に共産党自体が大衆党となる道をたどらなければならぬことを強調し、さらに、労働組合の獲得のために闘争すべきであり、また農民組合にたいして指導をよめなければならぬといっている。

この大会で決定された日本問題にかんする決議においては、なによりも第一に党の大衆化、党員の大衆的吸収（現実目標として五千人の党員獲得）、工場細胞の確立強化とくに大工場の獲得、地方委員会わけでも大工場の密集している大工業都市における大都市委員会の確立、およびそのイニシアティヴを發揮した活動の重要性を強調している。労働組合運動の方面においては、労働組合が共産党とともにプロレタリア運動にとって非常に重要な組織であることをさらに力説して、

評議会の再建のための闘争に力をつくすこと、青年および婦人労働者の獲得、工場委員会を基礎とする労働組合運動、とくに大工場の獲得、最後に改良派労働組合内における革命的反対派の結成、これらの点を強調している。

合法的無産政党の問題にかんすることはごく簡単に述べておく。合法的労働政党なるものについては、たんに日本だけでなく南米やインドやブルガリアにおける材料をもあつめて、コミンテルンはその植民地的革命運動にかんするテーゼのなかで、かくのごとき労働者や農民や小ブルジョアの二階級以上の融合の基礎のうえに立った党は、ある一定の時期では革命的性質をもつことがあるけれども、時期の経過とともに容易に小ブルジョア党となることを明白に指摘して、共産党はかくのごとき党をつくるべきではないと規定している。これにもとづいて、日本においても労働党のごときは当時までは多かれすくなかれ革命的役割をはたしてきたが、労働党およびいわゆる左翼政党にたいして、共産党はその根本的な大衆的性質をあきらかにし、共産党のみがプロレタリアの党であり、労働者・農民の唯一の味方であることを強調しなければならぬと述べている。<sup>(五六)</sup>

また農民運動の方面では、大土地所有の没収と土地を農民へのスローガンのもとに宣伝すること、そして従来のような小作農の地主にたいする小作組合団体ではなく、広範な貧農の大衆闘争組織たらしめなければならぬこと、そして共産主義者は農民暴動の指導にあたらなければならぬことを強調している。

最後に党の宣伝煽動の方面にかんしては、革命的闘争にみちびく平易なマルクスレーニン主義の線にそうした宣伝文書による大衆動員、大衆的示威運動、ブルジョアジーの決定にかかわりな

く合法的・非合法的に強行する大衆的示威運動の必要、重要な工場から直接に街頭へ大衆を動員することの重要、これらについて強調している。かかる意味の日本問題にかんする決議がこの大会において決議された。このコミンテルン第六回世界大会の決議がこの年の秋から冬にかけて日本に到着し、いかにこの大会の影響が日本共産党のあらたな躍進の一步に拍車をくわえたかはまゝに述べたとおりである。

このときにおける日本の一般情勢をみると、半年前に日本政府が三・一五の検挙を必要とした諸情勢はいささかも緩和されずに、かえってますます尖鋭化しつつあったといえる。まず日本帝国主义の軍隊は依然として中国の一部を占領しており、また日本、アメリカ、イギリスの対立はますますたかまりつつあった。中国民衆の日本帝国主义の侵略にたいする猛烈な反抗によって日本軍は日々に不利にかたむき、しかもそのために世界の帝国主义戦争の危機が緩和されるどころかますます進展してゆく状態にあった。日本ブルジョアジーはかくのごとき帝国主义戦争の準備と労働者・農民にたいする弾圧とを隠蔽しかつ有利にするために、莫大な国費を投じて即位大典のお祭さわぎをやった。日本政府はこの大典を無事におこなうために、その警備と称して数千名の労働者・農民の戦士を逮捕投獄してあらゆる蛮行をくわえた。じつに即位大典は労働者・農民の血によっていわれたのだ。治安維持法の死刑法への改悪は勅令をもって強行されており、日本の国家機関のファシスト化はますますするどくろこつとなっていた。じつに日本はファシスト・イタリアおよびポーランドとあいならんで、世界屈指の白色テロ国となりつつあったのである。

三・一五事件と三団体の解散とは一時的に労働者の闘争を減退せしめた。しかしすでにこの年

の六月ごろには、改良派幹部の抑圧をはねのけてストライキはさかんにおこり、ダラ幹の抑圧をやぶつての社外船のストライキが勃発し、七月・八月には東京市電の争議がおこった。三・一五と三団体解散とによって一時障害をうけて日和見主義の擡頭をもたらした農民の闘争も、ふたたびさらにいよいよ深刻化しつつあった。当時のブルジョア新聞があきらかにいっているがごとく、この労働者・農民の闘争が一時おさえられて減退したのは、共産党にたいしてブルジョアジーがくわえた弾圧のおかげにほかならぬ。このことはブルジョア新聞が明白に告白しているのだ。また一方、社会民主主義者の醜悪な裏切りは白日のもとにさらされ、彼らもつとも下等なブルジョアの番頭であることは大衆のまえにますますあきらかになりつつあった。

こういう情勢のもとにおいて、日本共産党はコミンテルンの重要な政治決議の精神にもとづいて、党大衆化、党ボリシェヴィキ化のための闘争に躍進したのである。

## 2 コミンテルン第六回大会から四・一六まで

コミンテルンの第六回大会の諸決定が日本の党にもたらされてから四・一六の大検挙にいたるあいだの、日本共産党の重要な活動について述べる。この期間は短いけれども、このあいだは党の偉大なる発展の時期であり、重要な諸活動があった。

第一にわが党は、このコミンテルン大会の国際情勢にかんするテーゼが日本の党について強調した、日本共産党自身が大衆党たるべき道をたどらなければならぬ、という方針をまず実行にうつすために活動した。ちょうどこのときは、一方においては三・一五以来の数次にわたる検挙によって党は打撃をこうむっており、回復の道につくかと思うとまたあらたな検挙をこうむった。

そしてこのあらたなる検挙とたえざる追求のもとにおいて、すこしもひるむことなく全党員と革命的労働者とは党をまもり、党のいっそうの拡大と強化のために自己犠牲的に活動したのである。が、しかしやはり、この数次にわたる検挙の打撃はあらそうべからざるものがあった。しかるに他方においては、労働者大衆の革命的圧力は、いよいよたかまるばかりであった。そこに、日本共産党の組織力と大衆の革命的圧力の高潮とのあいだに大きな不均衡状態が生じて、党はやもすれば孤立する危険にたえずおびやかされてきたのであるが、全党員の熱心なる活動と第六回世界大会の決定にもとづく新しいより強い大衆化のための闘争によって、日本共産党はこの労働者大衆の革命的圧力を自己の力としてみちびくことができるようになった。

党は大衆化のための闘争として第一に、共産党こそが労働者階級の唯一の党であることを精力的に宣伝した。とくに当時の新党準備会（三・一五以後、四月十日の政府の大弾圧をもって解散を命ぜられた労農党の後身たる新党準備会）および労農同盟（新党準備会が結党をよげた十二月の末における政府による禁止以後、政治的自由獲得労農同盟として再組織された同盟）等の左翼労農政党的革命的エネルギーを自己の組織のなかに吸収し、そしてわが党の大衆化のための重要な一つの力とする方針を現実にとった。

わが党はもちろん、党の大衆化をたんに量的に黨員数をふやすこととしてそれのみに没頭していたのではない。そのためにも労働者と農民の日常の利益を擁護し伸長するための闘争に熱心に参加してその先頭に立ってたたかい、改良主義的集団である社会民主主義政党的裏切りにたいしてたたかい、ブルジョアジーと社会民主主義者とにたいする闘争によって、第一には工場の中かに、第二には貧農の結集した農村部落において活動的分子を獲得することに努力した。

また党はとくに、大工業都市の重要工業方面と軍需産業の大工場との労働者を獲得するために、じつに執拗な計画的闘争に着手した。わが党のこの組織活動に接して、革命的労働者が従来は十分に發揮されなかったイニシアティヴを發揮して、党の政治的組織的活動に参加するようになった。

党はそのために、工場農村に党の細胞を組織せよ、というスローガンをかけ、すでに十二月の初めに再刊した党の中央機関紙『赤旗』に党大衆化のアピールをあきららかに声明している。労働者大衆、とくに労農同盟のなかにおいて今日まで共産党の影響のもとに革命的な政治闘争を遂行してきた革命的労働者大衆は、党にたいする信頼をますますつよめ、党の門前にはひしひしと多数の労働者がおしかけたという実情にあった。

ここにおいて、これら党の面前にせまっている大衆を急速に組織のなかに獲得する必要にせまられたために、党中央委員会は一九二九年二月に党外の革命的労働者大衆にたいして自発的に日本共産党の細胞を組織すべきことをうたったえて、新しい黨員の集団的・大衆的加入の道をひらいた。

日本共産党の党外労働者大衆にたいする自発的党組織活動のアピール、黨員の集団的参加の道をひらいたことは、このときの特別な事情のもとでは必要不可欠であったと思う。実際にもまた、このアピールに応じて、従来労農党のなかにとじこめられていた革命的大衆は、工場においてまた農村において、自発的に活動するためのグループをつくり、党の組織者の手がそこにおよんだときには、いままでに多くみられたたんに個人の党加入ではなく、一定の目標をもち一定の方針のもとに集合的に組織的に活動して党の組織を待ちかまえている集団的・革命的労働

者の団体があつたのである。彼らは党のその後における、なかんずく四・一六の大検挙以後における党の再組織のためのたえざる新しき源となつた。

もちろんわが党は、強烈苛酷な弾圧法であつた治安維持法がついに死刑法にまでたかめられ、日本のブルジョアジーの白色恐怖がこの治安維持死刑法を先頭として全国にあれくるっている状態のもとにおいては、とくに強固なる非合法組織の必要をみとめていたのである。強大なる建築物はかならず強固なる地下組織のうえにきずかなければならぬというコミンテルンのわが党にあつたところの指針は、われわれがこういう情勢のもとにおいてもっとも注意しなければならぬことである。

わが党はこのようにして党活動の方面においては党の大衆化のための活動をすすめていったのであるが、この運動のなかにおいてわが党が特別に注意をはらつたことは、大工場に組織運動を集中するとともに、党の各階級における指導機関に、労働者要素わけでも実際に工場のなかにはたらいっている就業労働者をひきあげてつかせるということ、従来よりもいっそうここに努力をむける方針をとつた。実際に、工場ではたらいっている革命的労働者を党の指導機関にひきあげることが、普通考えられるところでは多くの困難をとまなうのであるが、それらの困難をおしきつて、そしてできるだけ工場からはなさずに、工場ではたらいっている労働者を党の指導の旗のもとにひきあげることが絶対に必要であることとみとめて、この方針の実現に努力した。

また一方においては、日本共産党の方針政策が中央機関紙『赤旗』ならびにその他の種々の党文書および全党員の組織的活動によってひろく大衆のあいだに知られ、大衆が党の政策方針を支持し党に参加しようとする熱がますますたかまってきた。と同時に、たえず小ブルジョアの層か

らプロレタリア階級におちこんでくるところの分子、これらがやはり党の周囲において党の小ブルジョアの同情者としてますます豊富にあらわれてきていた。これら小ブルジョアの同情者のほかに、わが共産党の真に尊重する同情者はいうまでもなく工場労働者、産業労働者である。党の政策に賛成し党を支持し党に共鳴してはいるが、なお党の組織に参加するにはいたっていないこの労働者の要素、これこそ、共産党が真に同情者として尊重するものである。いうまでもなく黨員の意識的な積極的な働きかけによってこの同情者の労働者はすみやかに党に獲得しなければならぬものである。しかるに小ブルジョア同情者はたえず党の周囲にあつて、情勢によってはきわめて革命的な左翼的な言辞を口にし党を支持することを表面につよくあらわすが、大なる困難に遭遇したりあるいは情勢がかわつたりするとたちまち小ブルジョアの本性をばくろし、革命的な左翼的な非常にとびあがつた言動のその裏においてたちまち右傾化した動揺、はなはだしきは裏切り等を現出するにいたるのである。こういう小ブルジョア分子、これらを一口にシンパサイザ1として、真に共産党の尊重するところの革命的・労働者の同情者とは厳密に区別せねばならぬことを痛感したのである。これらの小ブルジョアの同情者は、とくに党の力が客観的情勢に対応して比較的小さく弱くばあひには、直接に党の方針に影響をあたえ、労働者の真の革命的方向を妨害する危険が十分にあるものである。

現実において当時の二、三の例をとるならば、東京市会の選挙戦において、労農同盟を中心として組織された選挙闘争同盟が、「労働者無産市民の市会をつくれ」というスローガンをかけた。これについてはのちに言及するが、これは党の周囲にあつて党に接近し、日本共産党の方針のもとに活動しているつもりでいた小ブルジョアの同情者たちが、このろこつきわまる小ブルジョア

的スローガンを採用せしむるにいたったのである。

そのほか、検閲改正同盟のごときも、わが党は検閲制度の撤廃のスローガンをかけて、一つの大衆的組織をつくってたたかわさせる方針をとったのであるが、しかし党の比較的弱い力の周囲にあった小ブルジョア分子に大なる影響をあたえ、検閲制度改正期成同盟の小ブルジョア的な動揺的なスローガンを出すにいたったのである。そういう種類の小ブルジョアの同情者にたいしては、わが党はその党外の諸活動において演ずるところの多かれすくなかれ進歩的な役割を見のがしてはならないと同時に、党内における重要な諸活動にこれらの小ブルジョアの同情者の影響の侵入をふせぐためにあらゆる手段を講ぜねばならぬ、という方針をとることにしたのである。

これは四・一六の検挙以後においては、もちろん闘争の発展とともにますます重要な意義をおびてきて、以上のような方針が実現されたと思うが、当時においては、ただそういう方針をとっただけであってまだ十分に実現の緒についていなかったといわねばならぬ。

しかしこういふすべての情勢は、やはり共産党にたいする大衆の広大な信頼支持が、日本共産党をますます大衆党となす見通しを証明する、偉大な一つの歴史的進行をものがたる事実であると考えられる。実際においても当時のわが党の大衆化の展望はきわめて豊富にひらかれていたのである。

わが日本共産党が、かくのごとく大衆化の道をたどるにいたったのは、労農党の新党準備会、その後、労農同盟となった新党準備会が密接に関連しているのである。そこで、わが党が新党準備会、のちの労農同盟にたいしてとった方針について一言する必要がある。二八年の春、労農党

の解散直後、労農党の内部にあった小ブルジョアの指導者のあらわした激しい動揺、それからわが党の力づよい働きかけによる活動、新党準備会内部につよまってきた労働者の革命的潮流、これらについてはくわしく述べぬが、いわゆる百度解散せられるならば百度結党するという百度結党主義が、その秋になると比類なき敗北的な合法的結党方針にひっくりかえってしまった。これは新党準備会の小ブルジョアの本質をみずからばくろしたものであって、「労働者・農民の政府」というスローガンを撤去し、新党は大衆党であって共産党ではない、新党は社会組織および経済組織の改革を目的とするものではない、というような未曾有の右翼主義、日和見主義を露出した。これは階級闘争の激烈な発展のもとにおいて、共産党でないところの小ブルジョア党がその本質をばくろしたものだ。

共産党は新党内に擡頭したこの小ブルジョアの日和見主義にたいしてまっこうから反対し、これと反対に、当時の新党準備会内にあった革命的労働者の潮流を支持して、「労働者・農民の政府」というスローガンを撤去することなしに新党準備会は結党にむかって邁進すべきことをうたえて、この運動を支持したのである。むしろわが党はこのときにおいて、コミンテルン第六回大会において採用された植民地の革命運動にかんして規定されたテーゼにある労働者・農民政党にかんする規定、すなわち労働者・農民等の二階級以上の寄合世帯のうえにきずかれたところの政党は、たとえ一時的には革命的性質をおびることがあっても、時期の経過とともにすこぶる容易に小ブルジョア党に転化するものである、という規定に立脚して、プロレタリア党はただ共産党のみであること、すなわち労働者・農民の二つの異なった階級の寄合世帯であるところの労働者・農民の政党はわれわれの真実の政党たるべきものではないことを解明し宣伝

することにつとめた。それと同時に、その宣伝だけではこの大衆のほうはいたる新党準備会の革命的結党への潮流をくいよめることができないのみでなく、これをくいよめようとすることは大なる困難と事実上における後退をもたらすという見地からして、わが党と大衆党とのあいだに存在する事実上のギャップをみとめ、むしろそうした革命的結党への潮流を支持しこれをリードして、この流れを共産党の大衆化のために利用しようという方針をとった。大衆はこのときもたんに宣伝のみによっては一般の労働政党のもつ傾向をすてさせることはできない、わが党に一举にして参加することはできない。この革命的結党にむかってすすんでいる大衆にその結党運動をおしすすめてブルジョア政府と衝突させ、彼ら自身の経験によって、ブルジョアジーの国家権力と抗争しうる真の党はかくのごとき労働者・農民の寄合世帯の党ではない、そういう党にはもとむることはできない、共産党でなければならぬ、ことをまなばしめること、これがその当時においてわれわれのとった根本方針であった。

この方針は、十一月初頭にわが党がうけた検挙によって、それを発表することになつていた『赤旗』再刊号が発行不能となつたため、ただちにこれにかわる宣伝方法をとつたけれども、この間に多少の困難を生じたことはあらそわれぬ。しかも結局において、この方針はそののち当時の労働党にたいする党の根本方針として革命的労働者の圧倒的支持を得て、ついに十二月二十五日の結党大会となつたのである。わが党はこの結党大会を共産党自身の大衆化のための宣伝舞台として、最大限に、あるいは合法的に、あるいは非合法的に利用したのである、そしてそのかぎりにおいて成功をおさめた。

新党準備会の結党大会はもちろんブルジョア政府の解散をくつたが、わが党はまっさきにこれ

にたいする抗議の運動をおこし、共産党の大衆化、共産党のみがブルジョアジーによって解散しえざるところのものであることをひろく大衆に知らしめるとともに、従来の新党準備会運動に熱心に活動した労働者にたいしてわが党に参加すべきことをうつつたえ、同時にこの広大な労働者と農民の左翼的エネルギーを労働者・農民の同盟の組織にみちびくために活動したのである。これをまず、最初の労働同盟、新党準備会の結党大会の強制解散にたいする抗議の意味において、抗議闘争の一つの組織として政治的自由獲得労働同盟という組織に再組織し闘争を遂行させる方針をとつたのである。しかし労働同盟はその成立後まもなくきわめて急速な経過のうち、一方において内部にのこつていた小ブルジョア分子の動揺と日和見主義と政府にたいする屈服の傾向が、同盟をしてふたたび同じ労働政党に固定せしめる方向となつてあらわれたが、同時にその他面では、労働同盟のブルジョア政府にたいする闘争のなかにおいて、労働同盟の運動を共産党の大衆化のためにむけられなければならぬという方針のもとに自発的に活動するにいたつた革命的労働者の分子があつた。

この二つの矛盾する潮流は、わが党がぜひともここで徹底的に解決しなければならぬものであつた。わが党の陣営内においても、党の影響下にある左翼労働組合の陣営においても、また革命的貧農のあいだにおいても、なお旧い労働党にたいする愛着はのこつていたのであつて、プロレタリアートの党はただ共産党あるのみ、ということにたいしてなお遅疑の念があり、共産党が大衆党となることにたいする鉄のごとき確信が欠けている部分があつたことはあらそわれぬ事実であつた。これは、共産党が第一の党であるには相違ないが、しかしながら現在の日本のごとき事情のもとにおいては、この共産党を支持し共産党にたいしてたえず新しい力をおくる源たるべき

党の貯水池となり、また党と大衆とのあいだのベルトとなるべき一つの労働者・農民の政党がべつに必要であろう、という空気が濃く存在していたことによってもわかるのである。共産党のほかに個別の特殊な政党が必要であるというような考えがいささかでもあったことは、当時のごとく階級闘争の発展したもとのにおいては、あきらかに党の大衆化にたいする矛盾を証明するものであり、その骨髄において小ブルジョアの動揺であると断言すべきである。

かかる動揺は、プロレタリア階級党がかの一にぎりの金融資本家たちの自由に操縦するブルジョア政党の分派とはちがって、プロレタリア大衆の下から統一された絶対的に組織された共産党だけであることにたいする十分な確信のないことを証明するのであった。わが党はかのごとき動揺や不確信を清算するため労働同盟の革命的解体を断行しなければならぬという決定に到達したのであった。現在の労働同盟は他のいかなるものにも変化さるべきではなく断固として解体させねばならぬ、しかしこの解体たるや、労働同盟内の革命的エネルギー、革命的労働者の要素を日本共産党に組織することなしにはおこなわれない、これなくしては労働同盟の解体はできない、労働同盟の革命的勢力を日本共産党に組織することによって労働同盟は解体の道につくことができる。——これが三月から四月にかけて党中央部の会議において最後の、従来の多くの経験を総合的、集中的に批判した結果えた解決であった。

この解決のためには、従来ながく共産党ならびに左翼内にあった共同戦線政党——一般に労働政党といわれている共同戦線党にかんする従来の見解を清算する必要があった。これらの決定は四月の検挙前に到達したわが党の見解であって、これは党のごく少数のものにしか当時発表されていなかったのである。しかし、これが当時においてはもっとも重要な意義をもつものである

ことを強調する必要がある。

日本におけるいわゆる共同戦線党なるものは最初わが共産党が主張したものであった。一九二四年から二五年にかけて当時の日本共産主義グループの政策は、大衆とくに農民大衆を獲得するために労働者と農民とのブルジョアジーと地主とにたいする広大な反対闘争同盟組織が必要であるとして、無産政党組織運動の先頭に立ったのである。しかしながら、当時における日本共産党の共同戦線党の主張は、二八年当時において労働一派の主張していたもの、すなわち自己の小ブルジョアの・社会民主主義的・左翼民主主義的政党組織論をおおいかくすためにもちいていたものとは全然別物であった。

一九二五年十二月に組織されてただちにブルジョア政府により解散された農民労働党、ここにいたるまでの無産政党運動は、そのなかにおいて日本共産党がとってきた方針のために十分に革命的性質をもっていたのであった。これはなによりも第一に、当時きわめて弱い勢力にすぎなかったといえ日本共産主義グループの独自の存在が前提されていたからであり、それが当時無産党運動がなお革命的性質をもっていたことの一つの重要な条件であった。これは当時わが党があまりに主張していたとおり、共産党の大衆獲得の舞台であった。コミンテルンの二五年一月のテーゼならびに二六年二月テーゼにも、この主張、この意義は明白にいあらわされている。実際に当時、わが党の無産政党組織運動の過程において、この無産政党をして革命的な行動綱領を採用せしめるために闘争したことは、その後もながく革命的な労働者・農民大衆のあいだに強い記憶となつているところである。その第一回無産政党綱領審議会(五九)において、死んだ同志渡辺政之輔がわが党の主張する革命的行動綱領のためにいかに強くたたかたかは、わするべからざる一



つの記憶である。なかんずく植民地の独立解放という主張を擁護していかにわれわれの代表がたかかったか、そして社会民主主義の代表者たちが植民地の自治という日本帝国主義にたいする支持援助を意味する恥ずべき日和見主義的綱領をもってわれわれに対したかは、当時の無産政党組織運動における革命的潮流と社会民主主義的潮流との闘争の一つの頂点をしめしていたのである。

さらに無産政党の組織方面にかんする問題については、わが党がもっとも頑強に主張した大衆団体の連合組織、大衆団体を中心とする組織の主張、すなわち団体中心主義の主張、これによって無産政党なるものがわが党にとっていかなるものであったかがしめられていたのである。無産政党なるものはけっしてプロレタリアートの党ではない、厳密な意味においては政党ではない。労働組合、農民組合のもろもろの大衆団体をあつめて、ブルジョアにたいする闘争の渦中において、共産党の代表する左翼の主張と社会民主主義者の代表する右翼の主張とを公然とあらそわしめ、これらの大衆諸団体のなかにおける公然の共産党の勢力獲得のための闘争舞台とするこゝと、これがすなわちわが党の無産政党組織運動においてとった方針であった。当時山川均氏が主張していたとき、労働者と農民と小ブルジョア、これら種々の階級のあいだの特殊な政治的共通戦線党であるということがごとき見解は、けっして当時におけるわが党の無産政党組織運動にかなる根本方針ではなかった。むしろその反対であったといえるのである。

実際において左翼労働組合はわが党の当時における方針を支持した。かの無産団体評議会なる組織をもってわが党にたいする支持を表明していたのである。一方社会民主主義者たちがわれわれの無産政党組織運動の方針につよく反対して、これを一個の社会民主主義のもとに統一された社会民主主義政党たらしめんとしたが、これらの運動はわが党にたいする大衆の支持によってうち

くだかれ、二五年十二月の農民労働党の成立となったのである。しかし、この成立にたいしてはブルジョア政府は社会民主主義者が失敗したことを自己の国家権力をもって遂行し、この政党の禁止解散を命じたのであった。そして、その後における社会民主主義者たちの卑劣な厚顔無恥な無産政党運動の日和見主義化右翼化のためにはらった惨憺たる努力がいかなるものであったかについては、いまさらくわしく述べる必要がない。いずれにせよ、この農民労働党にたいする禁止を境として、いわゆる無産党組織運動は社会民主主義的政党の組織運動にまったく変形されてしまったのである。

しかし、ブルジョアと社会民主主義者とのもっとも密接な協力結合によっておこなわれた、この無産政党の社会民主主義化の運動も、けっしてたやすくはこぶことはできなかった。当時の労働組合評議会を先頭とした革命的諸大衆団体の重要な頑強な闘争によって、その後の無産政党運動は一般に知られているように、最右翼の社会民衆党から日本労働党をへて労働党にいたる分裂をしたのであった。この分裂後における左翼労働政党運動の根底には、労働者・農民の闘争同盟という思想が存在していたことはうたがいないところであるが、しかし、政党の形にもついていたことが必然的に、労働党の運動をプロレタリアートのヘゲモニー、真の革命的指導のもとにおける労働者・農民の同盟という正しい道からそらせ背馳せしめたのであり、三・一五事件以後、とくにその二八年の秋の合法的・屈服的結党方針にそのことがろこつにあらわれた。この期になると労働党の運動は、それがいかに左翼の側に立っていても、政党として存在するかぎりには、いやでもおうでも右翼日和見主義におちいり、必然的に社会民主主義政党化する道をふまねばならぬことを証明したのである。

二八年の初めごろは、共産党が唯一の大衆的プロレタリア党であることを強調するとともに、一面においては大衆党あるいは大衆的労働党という名前によって労働政党的存在を一時容認していたが、二八年の後半においては、もはや絶対に容認する余地のないものとなったのである。すでにいっさいのプロレタリア政治闘争は最高に集中された強力な共産党のみあつめられねばならぬことは、わが党員においてももちろんのこと、ひろく革命的労働者大衆のあいだに理解されるにいたつたのである。

かくのごとくにして、わが党は二九年の三月から四月にかけて労働同盟の革命的解体という方針を決定し、その実行を用意したのであった。

以上は、わが党の大衆化に関連して、無産政党、労働同盟の問題についてわが党のとつた方針を述べたのである。

一九二八年十二月、有名な板舟事件<sup>(六〇)</sup>で東京市会が解散されて選挙がおこなわれた。その選挙活動ならびにひきつづいて二九年三月ごろから六月ごろまで全国的に挙行された市町村会議員選挙戦、これらの闘争は当時の日本共産党の活動の重要なものであった。これについてごく簡単に述べたいと思う。

日本共産党が全国的に選挙戦に参加したのはその当時まで二回あった。その第一回は一九二七年（昭和二年）秋の普通選挙による最初の府県会選挙戦であった。このときにはまだ党独自の大衆のあいだにおける公然たる活動がなく、完全に労働党を通じてのみ選挙戦に参加したのであった。この選挙戦において労働党をはじめ他の諸無産政党は幾人かの府県会議員を選出することができたが、しかしこれらの議員諸君は、共産党のある同志をのぞくほかはすべて、当選したのちに厳格なプロレタリア的政党の統制がなかったため、当時すでにその大部分は墮落してプロレタリア農民の利益をうらざり、またあるものはそれほどでなくとも、活動の基準がないために無力なものになってしまつていた。つぎに日本共産党が参加した選挙戦はまえに述べた二八年春の国会総選挙——最初の普通選挙による国会選挙戦であった。そして二八年末の東京市会議員選挙をはじめとしてひきつづく全国的な市町村会議員選挙にのぞむにいたつたのである。

この選挙戦において、党はまず東京市会議員選挙であらたな経験を得たのであった。東京市会議員選挙では、ブルジョア諸政党が「市政浄化」とか「人格本位の候補者」とかいつて大衆を欺瞞しようとしたのにたいして党は正面から抗争した。社会民主主義者たちは「市会を民衆の手に奪還せよ」という、一見景気はよいが、そのじつはまったく小ブルジョア的なスローガンをかかげて大衆を獲得しようとしたが、党はこの小ブルジョアの本質を摘発ばくろして闘争した。さらに、当時の左翼の労働同盟を中心として組織された選挙闘争同盟が採用したスローガン——それはさきにもちよつと引合いに出したが「労働者無産市民の市会の樹立」という日和見的なスローガンにたいしては、それをかかげた選挙闘争同盟が左翼の団体であるにもかかわらず、党は痛烈なる攻撃をはなつたのである。そして、わが党は「革命的労働者を市会におくれ」というスローガンのもとに、当時獄中にあつた「日本共産党事件の被告」同志唐沢清八をはじめとして革命的労働者数名を候補者に立て、これらの革命的労働者の候補者を支持してたたかい、また党の東京地方委員会は重要工場を目標としてそこに工場細胞を建設し確立し拡大するために、労働者の日常闘争を激発してその先頭に立ち、党のスローガンをしめしたビラやポスター類をさかんに工場地帯に撒布し、さらにまた種々の合法的・非合法的な大衆集会を組織することにつとめた。

こういう方法によってわが党は東京市会議員選挙戦に参加したが、その成績は東京地方委員会の同志諸君の熱烈な活動にもかかわらず、結果においては不十分であり、とくに旺盛な煽動宣伝の活動にたいして組織的の活動が不足であったことが痛感された。

これらの経験によってきたるべき全国市町村会選挙戦にたいする日本共産党の方針を十分に討議決定する必要をみとめた。党の中央部は数次の会合において市町村会議員選挙にたいする方針を討議し、四月に最終的に決定したのである。市町村会議員選挙にたいして党が決定した方針の主な点をあげてみる。

これらの市町村会選挙戦へ参加する原則は、前回国会総選挙にかんする党の活動のときに述べたとおりの革命的議会議主義の原則、これである。また市町村会選挙戦は国会選挙戦ほどに大きい全国的な強い影響を大衆のあいだにおこしはしないが、労働者および農民とくに貧農の日常の利害に密接なる関係があり、したがってその意味の強い興味を大衆が感じていた。これにたいしてわが党は第一に地方自治体と称せられている市町村の階級性をばくろすること、すなわち市町村は地方自治体とはいわれてはいるが、実際にならぬ地方的なものでも自治的なものでもなく、じつにブルジョアジーの中央集権国家の不可分なる構成要素にほかならないものであること、それは資本家、地主、富農が利益を独占して労働者・農民の利益を劫掠するための機関であること、その骨の髄まで搾取しなければ承知しないブルジョアどもの投資買収の具としてくさりはてていること、とくに大都市は今日においては金融ブルジョアジーの自家薬籠中のものであること、こういうことをばくろする方針をとった。

われわれの方針に対立して、社会民主主義者たちはさかんに地方分権、地方自治徹底、都市社

会主義、農村ギルド主義など、さまざまの幻想を大衆のあいだにふりまき、市町村会に労働者・農民の代表が多数を占めさえすれば、労働者・農民大衆の自治機関に転用することができる、という社会民主主義的・議会議主義的幻想をふれまわっていた。これにたいしてわが党は徹底的に闘争すべきであるという方針をとった。

今日のブルジョア中央集権国家の圧制から市町村をすくい出すという改良的言辞にかくれた、じつは反動的な社会民主主義の主張、これとの闘争なくしてはわが党がプロレタリア階級の利益を代表して市町村会選挙に参加する意義はうしなわれるのである。

当時においても、左翼シンパサイザーのなかには、たとえば内務大臣や府県知事らが市町村政に干渉する権利に反対する、すなわち干渉権絶対反対というスローガンをかかげる可能性が十分にあった。こういうスローガンは、まえにいった見地からみて、まったく小ブルジョアのスローガンであって、けっしてプロレタリアートのスローガンではないことを、わが党は大衆に知らせた。そしてわが党はこの選挙戦におけるスローガンとして、各地さまざまな情勢や力関係の相違によって一律にきめることはできないが、その主要な基本的なものとして、つぎのような体系を必要とすることを決定した。

第一には、労働者・農民の日常利益を主張するスローガン、たとえば、労働者とくに市町村機関ではたらいっている労働者の賃金そのほかいっさいの労働条件の改善、労働者住宅、無料宿泊所、労働者の食堂、浴場、そのほか労働者および貧農のための文化的・娯楽的な諸施設の要求、農村においてはとくに帝国主義的重圧をくわえられている租税、高利貸による莫大な借金、土地、水利、肥料、そのほかこの種の問題で農村人口中の貧農の利益を主張するスローガン、こういうも

の必要である。

第二には、市町村の政治にかんしては、一八歳以上の男女の公民権、労働者の投票日における公休、労働者・農民の投票を事実上において妨害するいっさいの障害の除去、村長の一般投票、市町村財政なかつく農民における歳入・歳出および村有財産や共有財産の処分にかんして地主や富農たちの利害にたいして貧農の利益を主張すること、ブルジョアおよび地主の掌中にある現在の産業組合、農会等を廃すること、青年団、処女会などを自治化すること、そのほか、とくに農村における地主的・旦那的・官僚的な種々の支配にたいして反対すること、こういう要求を表現したいろいろなスローガンが必要である。

第三には、一般的・全国的なスローガンが必要である。労働者・農民の言論、集会、出版、結社の自由、団結権、示威運動の自由、治安維持法そのほかいっさいの反労働者法令の撤廃等で、これはいかなる選挙戦においても全国的・一般のスローガンとして大衆のあいだに宣伝されなければならぬ。

そして最後に、中心スローガンとしては「労働者・農民の政府」をとることに決定したのである。

つぎに、これらの選挙戦において、選挙闘争のための組織として、党は東京市会選挙戦までの経験にかんがみてつぎのように決定した。

第一に重要なことは、これらの選挙戦における指導の中心を共産党のみがかたくにぎることである。これは党がいっさいの革命的階級の勢力を編成し集中して、その中心に立たねばならないことを意味する。東京市会選挙戦のときにあらわれたような、労農同盟と日本共産党との二重の

不一致な指導、したがって小ブルジョアの動揺や、日和見主義をまぬがれなかつた状態を断然と清算しなければならぬ。党が選挙闘争の中心に立つて唯一の指導者としてはたらくためには、まず工場内に、また経営細胞の周囲に大衆的な労働者選挙同盟を組織すること、そして革命的労働組合や農民組合および改良派労働組合のなかの革命的反対派を糾合して、工場や農村にこれらの諸団体連合のプロレタリア的な選挙連盟を組織し、わが党はいたるところにおいて選挙連盟の仲介となり、またその精神となつてはたらかねばならぬ。しかしながら、この連盟はいかなる意味でもけつして共産党にかわりうるものではない。そのスローガンにおいても、その候補者においても、その他すべての活動においても、この選挙連盟をもってわが党にかえてはならぬ。党はあくまでもスローガンその他の活動いっさいにおいて独自でなくてはならぬ。ただこの連盟を現在の状態のもとでは党の宣伝を有効に大衆と結合するものとしなければならぬ。以上が選挙闘争の組織にかんして決定した事項である。

なお、党は二八年の春の国会選挙の経験およびコミンテルンの指導的意見や批判にかんがみて、社会民主主義の諸党派、いろいろの名前をつけて労働者・農民の味方であるようによそおっているブルジョア代理政党、これらはいかなる意味においてもわれわれの味方でない、これにたいしては断然と階級の敵として徹底的に抗争しなければならぬとの方針をとった。わが党と社会民主主義の諸政党とのあいだにはいかなる意味でも妥協協調はゆるされないが、しかしこれらの諸政党に属している労働者・農民の大衆にたいしては、共産党および革命的労働組合が下から、工場から農村から共同戦線をはってくりあげてゆく必要をすこしもさまたげるものではない。このことは重要であつて、工場の選挙連盟やプロレタリア選挙連盟はやはりこの方法で、農村から工

場からの大衆の共同的戦線としてきざぎざあげべきである、という方針をとった。

選挙闘争において重要なことは大衆行動を組織することである。そのために、労働者の経済的ストライキの激発、農村大衆闘争の示威運動、また情勢に応じて政治的ストライキの組織、大衆集会、示威運動、これらが選挙闘争において党が大衆をリードし獲得するために必要であることを決定した。さきに述べたとおり、東京市会選挙戦においては文書による宣伝煽動がさかんであったのにくらべて、組織的な指導がともなわなかったために、種々の失敗をしたことにかんがみ、とくに工場内におけるまた工場から街頭への労働者の動員、大衆集会への示威運動、家庭にかえる労働者を家庭からさそいだすのでなくて工場から集団的に街頭に動員すること、これらを合法的にだけでなく非合法的にも強行しなければならぬことを決定した。また党の候補者はすべてこれらの諸闘争の先頭に立って大衆の注意と信頼とを一身にあつめ、とくに街頭の政見発表演説会よりは、むしろ工場内の諸集会や闘争に参加しそれを指導することが重要であることも決定した。選挙戦における候補者については、党は党の候補者を党の厳密な統制のもとにおくこと、選挙連盟の候補者として立つものでも、これを選挙連盟の統制のもとにおくのでなくて、党の統制のもとに活動せしめることが必要である。党候補者を出せない地方においては、革命的労働者候補を支持する方針をとったが、もちろん、革命的な約束は百でも千でもするが、ひとたび当選してその椅子にすわりこむとかならず階級をうらぎるような分子は、徹底的に排撃することが必要である。

なお、ブルジョア政党や社会民主主義諸党派は、投票を正しく行使すべしということとをさんざんに宣伝して、大衆の利益は一に投票にかかっているようにいいふらす、これにたいしてはあくまで闘争しなければならぬと同時に、左翼の陣営内に存在する当落は問題でないというような一種の消極主義的傾向にたいしてもやはりたたかわなければならぬ。そして、重要なことは散票をかきあつめるのではなく、工場、農村とくに工場の大衆の組織され集中された投票を獲得することである。これをもってはじめて投票が真にプロレタリアートの力のバロメーターであり、党の選挙戦における活動のバロメーターであるということが出来る。「組織され集中された」、これが必要である。

このようにして当選したばあいには、市町村会議員はいわゆる選挙区にたいする責任ではなくて、完全に党に責任を負うべきであり、これがまた真に選挙人に責任を負うことになるのである。この議員のいっさいの議会的行動は完全に党によって統制され、重要問題にたいする発言、提案、演説はすべて党の承認のもとにおこなうべきであり、党の命ずるところをいっさい無条件に服従し実行しなければならぬ。党の議員たるものの重要な任務は、議員の特権を最大限に利用し、必要なあいには特権の限度をふみこえても、ブルジョア議会の階級性をばくろし、大衆行動を煽動してその先頭に立ってブルジョアジーとたたかうことであって、議員の特権を利用して共産党およびそのスローガンを公然と大衆のあいだに宣伝煽動することである。

以上、要目だけをあげたが、こういう趣意のもとに、市町村会議員選挙にたいする方針を決定し、その実行にうつろうとしていたのであった。

四・一六検査までにおける党の活動の重要なものは多々あるが、それらはここでは述べないこととする。

ただ一つ、三・一五以来二八年、二九年とひきつづいて依然としてあれくるっているブルジョ

アジアの白色テロとの闘争について述べる。これはいかなる闘争においてもたえずわが党の直面するものであり、つねに闘争しなければならぬものである。このブルジョアアジアの労働者・農民にたいする弾圧迫害はじつに多くの同志にたいする拷問傷害そして殺害、じつにありとあらゆる犠牲を出している。なかならずわが共産党の古き指導者であり、当時におけるわが党の最高指導者であった日本共産党書記長同志渡辺政之輔は、一九二八年十月七日、党の用務をおびて活動中、台湾の基隆で日本ブルジョア官憲のためころされたのである。

この同志渡辺政之輔の犠牲にたいしては、当時、ブルジョアはありとあらゆる綿密周到な手段をもって、同志渡辺政之輔は官憲にころされたのではなく自殺したのだとさかんにいいふらして、この優れたわが党の指導者同志にくわえたブルジョアアジアの惨虐行為にたいする大衆の憤激をかくしおおわんとつとめたのであった。

わが党は、同志渡辺政之輔は日本ブルジョアアジアの白色テロルの犠牲となったもので、けっして自殺ではなくてブルジョア官憲のために殺害されたことを事実によって確認することができた。同志渡辺政之輔の台湾における行動はすべてわが日本共産党の正規の連絡においておこなわれたのであって、同志渡辺政之輔の台湾基隆におけるブルジョア官憲による殺害の報はすぐにはわが党に到達しなかったが、まもなく海外の道を通じて——正式にコミンテルンの道を通じて——わが党に到達した。これによって、同志渡辺政之輔はブルジョア官憲にとらえられて殺害されたのだ、ということが明白になったのである。

これにたいしてわが党は、同志渡辺政之輔がわが党のためにいかに活動したか、わが党の発展のためにいかに偉大なる働きをなしたか、なかならず一九二七年の日本問題にかんするコミンテ

ルンの決議を実践にうつすために、いかにすべての同志の最先頭に立って犠牲的に英雄的に活動してきたか、そして彼が台湾においてたおれるそのときまで、わが党のもっとも困難なる時期においてつねに大衆に率先してわがプロレタリア階級の英雄として活動してきたか、を大衆に宣伝した。同時に、この同志渡辺の遺業をついで、わが共産党に参加し、日本共産党の事業のためにたたかい、日本共産党のボリシェヴィキ化のためにたたかわなければならぬことを大衆にうたえた。この同志渡辺の犠牲はブルジョアアジアのあらゆる逆宣伝にもかかわらず労働者・農民をあざむくことはできなかつた。同志渡辺の犠牲はますます大衆のあいだに共産党の勢力をやしなだすところのたえざる偉大な力となった。

なお、当時の白色テロルにころされた同志山本宣治がわが党を間接に支持してたたかった功績を回顧し、暴力団の兇刃にたおれた同志山本宣治は、たんなる暴力団の犠牲となつたのではなくして、じつにブルジョアアジアの白色テロルの犠牲であるという見地から、同志山本をわが党の旗のもとにほうむることにしたのであった。

ことに白色テロルのあれくるうもとにおいて、わが党は三・一五の第一周年をむかえ、これを記念するためにいたるところにおいて合法的に非合法的に集会をひらき、党の大衆化のために闘争し、この日を記念して種々の事業をなすこと、各細胞においてはおのおの工場新聞を発行すること等、党の具体的な活動を決定して実行したのであった。

この間において「日本共産党事件」の公判はひらかれた。とらえられた同志たちが公判廷において、日本共産党の正しいことを一歩もゆずらず主張して、いかに強くたたかっているかをあきらかにし、またブルジョアアジアが公開を禁止して暗黒のうちにはうむろうとするのにたいしては、

ブルジョアジーが「共産党事件」の公開を禁止せんとした禁止するのはなぜか、わが日本共産党がプロレタリア階級の唯一の正しい党であり全労働者・農民大衆の味方であることを知り、それが大衆のあいだに知れわたることをおそれるためであることを、あきらかに宣伝してたたかったのである。

かようにして、四・一六事件までにわが党は大いに闘争をすすめて、新しい組織の発展をみるにいたったので、全国組織者会議をひらき、つぎに党大会を開催する準備にかかった。そのために当面の政治情勢とわが党の任務にかんするテーゼ、党の組織にかんするテーゼ、農民運動にかんするテーゼ、この三つの重要なテーゼ草案の作成のために特別委員会をもうけ、ことに組織問題の特別委員会はすべて海外におき、着々と大会の準備をはじめていたのであった。この大会準備のまっさいちゅうに四・一六の大検挙をうけたのである。

四・一六の大検挙はいまさらいうまでもなく、一九二九年の初頭からまたもや燃えあがってきた労働者および貧農の階級闘争の激化、帝国主義戦争の危機の切迫、このもとにおいて日本共産党が絶滅しないのみかますます大衆の信頼を得、大衆の味方となり、大衆のあいだにその勢力を拡大しているのにたいして、ブルジョアジーが一大打撃をくわえなければならぬ必要に当面したからであったのだ。

## 結 語

以上で、だいたいわが党の創立から四・一六の検挙までの重要な活動を述べた。もちろんわが党の活動の十分の一をも百分の一をも述べつくしてはいない。しかしこれによって、わが党がその創立以来いかにプロレタリア階級のためにその先頭に立ってたたかってきたかはわかると思う。わが党は創立以来九ヵ年のあいだ、けっして斬新奇抜な奇想天外なことをしたのではなく、ただ労働者階級の利益をまもり、労働者階級の解放のためにたたかい、貧農の利益、その解放のためにたたかっただけにすぎないのである。

すなわち、わが党は、労働者の日常利益の擁護伸展のために闘争し、とくに資本主義的産業合理化にたいしてたたかかった。労働組合の組織とその革命化と統一戦線とのためにいかなるものよりも熱心に忠実にたたかかった。またさらにわが党は農民とくに貧農の利益のために、また切迫した農業革命のために闘争した。

わが党はあらゆる青年ならびに婦人労働者のために闘争し、共産青年同盟の支援のために活動した。なお、労働者・農民の団結のために、労働者・農民の言論・集会・結社の自由のために、またブルジョアジーの惨虐な反プロレタリア法律、階級法案、過激社会運動取締法、治安維持法、その他の反プロレタリア法にたいして、また世界に類例まれな惨虐な警察テロルにたいして——白色テロルにたいして、ファシスト化しつつある政府にたいして、闘争してきた。

わが党は世界におけるプロレタリアートの唯一の国家たるソヴェト同盟防衛のために、また中国革命支持のために、植民地解放独立運動のためにたたかひ、そのほか国際的な労働者の団結のために闘争した。また、帝国主義戦争の危機にたいしてたたかひ、対外出兵にたいしてはもちろん、あらゆる排外主義軍国主義にたいして闘争した。これらすべての闘争をわが党は現日本国家の倒壊——天皇制の廃止をふくむ全国家の倒壊のために、労働者・農民解放のために、プロレタリア独裁のために、プロレタリアの闘争のために集中したのである。かつ、すべてこれらの闘争においてわが党はつねに社会民主主義との激烈な闘争をおこなってきた。

また重要なことは、わが党それ自身の内部における種々の右翼的日和見主義にたいして、とくにコミンテルンの指導の援助によってその克服のためにたたかってきた。

党はこの間に多くの成功とともにまた失敗をもかさねた。このことをなんらかくそうとするものではない。日本共産党はコミンテルンの支部として、コミンテルンの指導との結合が強かったときにはつねに正しく発展している。党がコミンテルンの指導からはなれたときには、かならずくずれて、どんな形においてか固定してしまつて大衆からはなれ孤立してしまつていた。

革命的理論なくしては革命的行動はありえない、この革命的理論はマルクス・レーニン主義の理論によって武装されることが絶対に必要である。この革命的理論は労働者・農民の闘争のなかにおいては困難なく容易に党が獲得することのできるものである。

また党は工場内に深く深く根をおろし、工場からいささかでもうかびあがろうとするすべての傾向にたいしてたたかかねばならぬ。

また党はあらゆるばあいに自己批判が絶対に必要である。自己批判は党の発展にとってなによ

りも必要である。そしてこのことは、党の発展を妨害する諸要素、諸傾向、すべてマルクス・レーニン主義、コミンテルンの線からはなれる諸要素を遠慮なく駆逐することによって党は成長しうるのである。またわが党はたんにそういう過失、誤り、偏向だけでなく、大きな政治的誤謬や過失にたいしても断然たる処置をとらねばならぬ。それなしには党は発展しえないことをおしえている。

わが党は過去九年間に種々の行程、逆路の道をへてきた。なかんづく三・一五、四・一六の大検挙をうけて、白色テロルのもとにわが党の犠牲となつた諸同志らのプロレタリア英雄主義と革命的忠誠とに刺激され、あれくるう反動のもとに党を再建するために、あとからあとから新しい同志が立ってたたかっている。これは中国共産党の大きな英雄的な活動にはまだまだどうていおよびもつかないが、しかしこれは党にたいするますます増大する大衆の支持と党の大衆化とを約束するものであつて、わが党はもはや、だんじて三・一五、四・一六の大検挙を敵にゆるさないであらう。

しかし、わが党はなんらの犠牲なしに成長し勝利することは不可能である。かくのごとき犠牲は党がたたかうかぎりにはまぬかれぬものである。われらの同志がいつておるとおり、つぎの数百数千の党員が得られることに比較すれば、多少の犠牲はなんでもないことだ。

党の発展は必然である。党の勝利、すなわちプロレタリアートの勝利は必然である。



## 最終陳述

一九三二年七月五日検事論告、七月十四日から最終陳述にはいり、市川正一のは二十四日であった。

天皇、三井、三菱、徳川等々の一にぎりの大金融資本家、地主的貴族を代表して、検事は、死刑、無期、その他、百数十人の同志にたいする千数十年という前代未聞の有期懲役を求刑した。しかも、この求刑にさきだつて同志渡辺をはじめとする数十人の同志が虐殺されているのだ。また、論告の日にはこの裁判所のまぢかに機関銃がすえつけられたとのことである。この機関銃が労働者・農民にたいしてすでに火ぶたをきつたとはまだ聞いていないが、この機関銃が労働者・農民を虐殺するために用意されたことはあきらかだ。同志にたいして死刑を要求した資本家・地主どもはガツガツと血にうえているのだ。労働者・農民の血を欲しているのだ。

だから労働者・農民はこの裁判を自分自身の身にせまる危険だと感じている。そしてこの死刑重罰に憤激して、工場に農村にいたるところに決起しているのだ。東京だけの例をみても、すでに城北の四一の工場代表者会議がひらかれて共産主義者の死刑重罰反対を決議しており、城南方面でも十いくつかの工場の代表者があつまつて「おれたちの前衛の即時無罪釈放」、「前衛の奪還」を決議している。それから十九日の夜には共産党公判批判演説会がひらかれたそうだが、そこには官憲隊の重囲をついて七百余人の聴衆がおしよせ、労働者は工場から会場へなだれをうつておしかけてきたとのことである。そして、大衆の憤激を恐怖した官憲によって演説会が解散される

と「共産主義者の死刑重罰絶対反対」、「共産黨員ならびにいっさいの階級的政治犯人の即時無罪釈放」をさげびながら、革命的労働者がデモを敢行したとのことである。

じつに労働者・農民その他いっさいの勤労大衆がわれわれの死刑重罰に断固として反対し、身をもって闘争していることは、この一事をみても明々白々である。

裁判長は、先日、検事の論告求刑を支援して、裁判長を激励する意味の手紙が裁判所にきているなどと得意になっているが、ブルジョア・地主がこの階級裁判に激励の手紙をよこすのは当然だ。どんな連中が共産主義者の死刑に賛成なのか、ちょっと名前を知らしてくれ。

元来、共産党事件全体が白テロとデマとででっちあげられている。検事はきわめて空々漠々たることばで論告をやり、そのなかで「七千万国民の信念であるわが国体」とか「社会の安寧秩序は私有財産制度のうえに維持されている」とかなんとかデマっている。

だがこんな抽象的な文句でもうっかりと聞きのがすことはできぬ。なぜなら、検事はわが党ならびに共産主義者が七千万同胞の敵である、だから死刑重罰をもって断罪しなければならぬとデマするため、公開の法廷を利用して、論告の形式のもとに悪煽動をやるからだ。今日までも検事が警察政治の手先としてまた資本家・地主の代理人としてわが党ならびに共産主義者をどれほど讒誣中傷してきたか、どんなに悪煽動をやってきたかは、彼らが解党派の製造にいかにか狂奔したかの一事をあげることとたりる。この方面で最大の手柄をたてて資本家・地主どもからおほめにあずかったのは亀山検事だとのことだ。また現にそこにすわっている戸沢検事のごときは近ごろ保釈出獄を要求した同志たちにかつて「外の同志たちが愛想をつかさうな一札をいれなければ外にはだせぬ」と強要し誘導し、われわれの同志を腐敗墮落せしめることにうき身をやつ

しているとのことである。彼らは「七千万国民の信念」だとか「千古不磨の憲法」だとか「三千年来の確信」だとかいかげんな抽象的な文句で、階級裁判の一部である論告求刑の階級性を神秘化しようとした。しかしながら、検事が軍事的・警察的天皇制の子飼いの犬であり、資本家・地主の忠実な奴僕であることはあきらみかねた。

平田検事は資本家の最高の政策決定機関である工業クラブに出かけて行って、共産党検挙の経過報告やら同志たちや解党派連のいちいちの傾向行動の報告やらをやったとのことである。検事がこのたびの論告求刑にさいして工業クラブや経済連盟から直接の指揮命令をうけたかどうかは知らぬが、平田検事は大資本家連と会合し懇談して、今度の論告求刑になんらかの教訓をえたことはうたがう余地がない。

検事ばかりではない。裁判長もこの公判を利用してわが党ならびに共産主義者をさかんにデマった。ブルジョア国家の司法官でありながら、わが党の組織原則を批判して「鉄の規律が鉛となるのではないか」とデマったり、背教者カウツキーや第二インタナショナル社会民主主義者の裏切者を引合いに出して、マルクスやレーニンまでをデマったのである。

天皇の名による裁判の超階級性とはこんなものだ。わが党ならびにわが党の旗のもとにたたかう労働者・農民にたいして、検事は陰然と裁判長は公然と毒つきデマるのである。

さて検事はわれわれ共産主義者が犯罪人であると論告した。だがいったい、共産主義者はだれにたいして犯罪人であるのか。

国民の八割を占める労働者・農民大衆の自由を根こそぎうばいと、人民大衆を奴隷の鉄鎖にしばりつける反動的・反革命的な天皇制を打倒することが、いったいだれにたいして犯罪である

のか。一にぎりのブルジョア・地主の利益のために労働者・農民大衆を同胞殺戮戦においやる帝国主義戦争に反対するものはなんびとの敵であるのか。労働者の生活条件の根本的改善、七時間労働制の確立のためにたたかうわが党がはたして労働者の敵であるというのか。農民が土地を要求して闘争に決起しつとあるとき、この闘争の先頭に立ち、皇室領、官公有領、寺社領ならびに一部の寄生地主領の土地没収のためにたたかうわれわれが農民大衆の敵であるというのか。

じつに圧倒的多数たる人民大衆は資本家、地主、天皇制をこそ敵としているのだ。天皇制と帝国主義戦争に反対し、米と土地と自由のための労働者・農民政府樹立のための人民革命にむかって闘争しつとあるわが党は、だんじて労働者・農民にたいする犯罪者ではない。われわれは一にぎりのブルジョア・地主にたいする敵なのである。パーセンテージにもあがってこないほどのきわめて少数の資本家・地主の敵であるにすぎないのだ。

しかるに検事はわが党ならびに共産主義者が人民大衆の恐るべき敵であるかのようにデマリ、われわれを「七千万国民」の敵として断罪せんとしているのだ。これこそが空々漠々たる論告の政治的意図である。

検事はまた、われわれ共産主義者は現実を無視するものであるとデマリ、あたかもわれわれが労働者・農民大衆の利益となんらの関係もなしに空想家として行動しているかのようにいった。だが、現実にあるものは検事のいうところと正反対である。わが党のスローガンである天皇制の打倒、寄生地主土地の没収、七時間労働制確立は労働者・農民大衆の利益としたがって信念と背馳するものではない。わが党はこのスローガンのもとに、すでに一〇年間たたかってきた。このわが党に大弾圧をくわえたからといって、労働者・農民の利益はすこしも伸長されないのである。

現に日本では、七千万国民の九割余を占める労働者・農民その他いっさいの勤労大衆、さらに二千名をこえる朝鮮、台湾の植民地民衆は飢餓のどん底につきおとされてきているのだ。そして、人民の大多数が食うや食わずでいるときに大資本家どもがどしどし腹を肥やしているのは、天皇政治の警察的支配が労働者・農民の反抗を屈服して資本家・地主の利益を擁護しているからにほかならぬことを、すでに人民大衆は気づいてきたのである。国体とか私有財産とかにたいする人民大衆の信念はどしどしとおしながされ、これにかわって、階級闘争の信念が、共産主義の信念が、プロレタリア独裁の信念が、日本共産党にたいする信念が、労働者・農民大衆のあいだに洪水のよう増大し成長している。これがいつわらざる現実だ。検事はわれわれが現実を無視すると論告しているが、これこそとんでもないさかさまごとである。

しかしながら、検事が国体の尊厳、天皇の神聖をいつているのは、たんに現実無視のためのみではなくて、じつは深い階級的な魂胆があるのだ。今日の天皇制は資本家・地主の利潤追求の武器である。また日本の国体すなわち軍事的・警察的天皇制には前時代的な反動的な野蛮性があつて、これが人民大衆の政治生活をしめつけているのだ。検事はこういう現実をば陰蔽し欺瞞せんがため、七千万国民の信念を引合いに出したり、千古不磨の大典というような美辞麗句をならべたてたのである。

この検事のデマゴギーは東京市長永田秀次郎の述べている国体論すなわち皇室論と同一である。永田秀次郎は皇室の效用と云うことを論じているが、その第一効用は皇室の存在は人心を安定せしめ国民間のあつれきを緩和することであり、第二効用は大赦をおこない慈善事業をおこなつたりして社会風教上の最高役割をつとめていることであり、第三効用は国家存在の表象であり国民

精神の表象であり国防の表象であり、軍人精神の表象であることであり、第四効用は国民の文化生活を奨励し向上せしめる役割をすることであるとしている。

だが天皇はこんな超階級的な存在ではない。

第一に、皇室は年に二〇〇〇万円の利潤を生ずる大土地所有者であり大株式所有者である。だから、皇室はブルジョアジー・地主の利益を代表し、ブルジョア・地主の労働者・農民搾取の前面となつているのだ。

第二に、皇室の慈善事業大赦とはなにか？ 一九二八年の大典のときの大赦はどうであったか？ 階級的の政治犯すなわち治安維持法違反者を全部除外し、さらに大典を口実に八千人の労働者・農民を逮捕し弾圧したではないか。また日本帝国主义の蹄鉄の下からふるいたつた植民地大衆を飛行機の爆撃と毒ガスとで大衆的に虐殺して鎮圧しているではないか。ほんのちよつぱり傷痍兵士の救恤金を出したところで、天皇が労働者・農民にたいしてやっている流血の弾圧をめぐなうことはできぬ。たちの悪いごまかしやにすぎない。

第三に、天皇は軍人精神の表象であるというが、今度の中国侵略戦争においては戦争を拒否した兵士を数百人も大衆的に虐殺したではないか。

第四に、皇室は国民文化生活を向上せしめるといふが、それは日本のいっさいの反動的・封建的野蛮文化の中心となつていではないか。

かくのごとき天皇制すなわち国体なるものは「七千万国民の信念」どころか、その九割八分をしめる人民大衆の敵対物である。かくのごとき国体は変革しうるし、またせひとも変革しなければならぬものである。

かくのごとき反動的・革命的国体を人民革命によって粉碎することはブルジョア・地主にとって絞首台にあたいする犯罪であるかもしれない。だがそれは七千万民衆にとっては大罪ではない。それは労働者・農民大衆の信念となりつつあるのだ。

検事は論告において「私有財産の将来においてあるいは改革を可とする点あらんも、現在においては社会秩序は私有財産制度のうえに維持されつつある現状でございませう」といつている。このことはブルジョアジーの手先である検事みずからが、ブルジョアジーの欺瞞をばくろしたことをしめしているものだ。日本ブルジョアジーは治安維持法を一九二八年に改悪するにあたって、国体の変革を私有財産制度の変革と区別し、とくに国体の変革にたいしては死刑無期をもって処罰することにした。これによって彼らは治安維持の主要目的が国体の防衛にあるかのようにみせかけようとした。けれども平田検事は、論告において私有財産こそ社会制度の根本であり、国体すなわち天皇制はそのうえに立つその擁護物であることを述べている。これ治安維持法の根本目的は資本家的私有財産制度、地主的私有財産制度の擁護であることをばくろしたのだ。ブルジョアジーは神秘的な神聖な仮面をして天皇制をまっさきにつきだし、それによって労働者・農民大衆を欺瞞し、自己の階級利益をまもっているのだ。

昔のことわざに「将を射んとするものはまず馬を射よ」というのがある。国体——天皇制は馬で資本家的私有制はその将である。ブルジョアジーは天皇制という馬にのって労働者・農民を弾圧している。だからわれわれはまず馬である国体——天皇制を打ちたおすことに主力をそそがねばならぬ。

第一にわれわれは天皇制を打ちたおさなければならぬ。馬からおちても大将はすぐには死なぬ。おちた大将の首をかきとらねばだめだ。だから天皇制を打ちたおし、さらに資本家的私有財産制度、資本主義制度を粉碎するのである。

ブルジョアジーは私有財産制一般というものがあるかのようにみせかけ、それを擁護するかのようにごまかしている。だが、一般的な私有財産制度というものはけっして存在しない。あるものはただ、資本家的・地主的・搾取的私有財産制度である。われわれはこれとたたかい、これを転覆せんとするものである。

資本家的搾取財産制度は労働者を賃金奴隷として資本の搾取にしばりつける鉄鎖である。労働者を貧困と奴隷と失業と飢餓と墮落と、いっさいの悲惨な非人間的な状態につきおとして置けるのは、この資本家的搾取財産制度だ。さらにまたこの私有財産制度は農民を零細農として地主の搾取にしばりつけて高利貸の収奪にまかせている。またなお、この制度は小市民中間層を窮乏と没落においやり、彼らをしてヒステリックな反抗と無気力に彷徨せしめている。労働農民大衆を惨虐な帝国主義戦争にひっぱりこみ植民地労苦大衆を苛烈に搾取弾圧しているのもこの搾取的私有財産制度なのだ。

この資本家的・地主的搾取私有財産制度は打破されなければならぬ。収奪者は収奪されなければならぬ。大工場、大鉱山、大交通運輸機関、大銀行等の搾取財産は大資本家の手から労働者の手に収奪され労働者の管理にうつされなければならぬ。天皇および地主の寄生的土地は没収され農民にわかれなければならぬ。検事はいう、「私有財産制度は将来において改革を可とする点、これもある」と。これはたんなる欺瞞だ。ブルジョアジーは資本主義の矛盾のために、また労働者階級の猛烈なる反抗のために自己の搾取財産制度がぐらついたので、これを国家権力によって

くいとめて強力にしようとして、ファシスト的・暴力的変革をつけくわえ、もって自己の生命のはかなき延長をはかっているのだ。すなわち、検事はファシスト的独裁支配への道をひらかんとするものだ。

平田検事は被告等が千古不磨の大典にもとづく七千万国民の信念のうえに立つ国体、私有財産制度の変革を企図していると責め、暴力革命によらんとしていると攻撃する。このブルジョアジの手先たる検事はかくして、日本共産党をごろつき団のごとくきわめて兇暴なものであるかの感を労働者・農民大衆にいだかせようとし、たくらんでいる。だが、この検事の陰謀は失敗だ。労働者・農民はストライキや小作争議そのほかきわめて切実な日常闘争のばあい、警官、憲兵、ごろつき団がいかに兇暴な暴力をもって彼らにせまってきたか身をもつて経験している。そして彼らは自己の勝利を得るためには武装し暴力によってこの資本家的暴力とたたかわなければならぬことをあきらかに知るにいたった。さらに労働者・農民大衆は資本家と地主との搾取、隷属、失業、飢餓、墮落から解放されるためには、また帝国主義戦争の悲惨からまぬかれるためには、日本共産党の指導のもとに大衆的な武装蜂起をもって公然と資本家・地主の国家権力と武力闘争をなし、労働者・農民の日本ソヴェト権力を樹立しなければならぬことを知るにいたっている。平田検事のブルジョアジのための陰謀は失敗に帰している。

労働者・農民の暴力とはなんであるか、検事のこのんでいう「七千万国民」の圧倒的多数をしめる労働者・農民の力そのものである。組織された集団的な力だ。個々人が爆弾をなげてはしりまわり、ダンピラをさげてはねあるくことが共産主義者の暴力でない。平田検事は日本共産党を暴力団のごとくにいう。だが、兇暴な反動的暴力の使用者こそ平田検事そのまえにひれふす資

本家・地主なのだ。警官、憲兵、検事、裁判官、看守、ごろつきをつかって日々、労働者・農民に暴力をくわえているのは資本家・地主ではないか。みずからつくった欺瞞的な法律をみずからやぶって労働者・農民に白色テロをくわえている。共産主義者の検挙において、ストライキ、小作争議においても、暴行、凌辱、拷問、あくことをしらぬ惨虐な野獸的的白色テロを労働者・農民にくわえている。これを否定しうるか。ブルジョアジこそ兇暴な暴力の使用者だ。このことは労働者・農民大衆が身をもってふかく知っているところだ。

検事は日本共産党が秘密結社であることを攻撃する。はたして日本共産党は労働者・農民大衆にとって秘密の存在であるか。労働者・農民はその力関係において労働者・農民の組織が資本家・地主の国家権力にたいして秘密であるべきことを知っている。しかも日本共産党は労働者・農民大衆にたいしてはいかなるときにもその存在を公然とし、その政策を公表してきた。労働者・農民にとっては日本共産党はだんじて秘密結社ではない。

じつに秘密をおこなうものはブルジョアジおよびその手先どもである。この裁判をみよ。ブルジョアジの手先たる警官、検事、予審判事、判事等が暗黒のうちにプロレタリアートの前衛を断罪せんとしているのだ。秘密の行為をなすものはブルジョアジおよびその手先たる警官、検事、判事、ブルジョア学者、ブルジョア代議士とその亜流どもである。このことを労働者・農民大衆は身をもって知っている。

検事は、日本共産党員およびその支持者が労働者・農民大衆の利益を代表して、帝国主義戦争反対のために、天皇制の廃止と資本家・地主政府の転覆と労働者・農民の日本ソヴェト政府樹立とのために、たたかったという理由をもって、共産主義者の虐殺、永久的拘束を要求し、労働

者・農民の前衛の血をもとめている。これこそ、検挙以来ブルジョアジーの手先どもによって警察、裁判所、監獄内でおこなわれた血にうえた白色テロの集中的な帰結である。検事の暴虐な求刑はかくのごときもので、それはブルジョアジーが労働者・農民の前衛の血をすすらんとしていることをしめしているものだ。

検事の求刑もまたじつに欺瞞にみちたものである。ほとんどすべての被告に五年六年という重刑を要求しているが、治安維持法の法文をすらすらやぶるかのようにみえるこの重刑は、四年五年にわたる長期の未決拘留を合理化せんとする魂胆だ。

つぎに検事は同志にたいして死刑を要求し首をもとめている。この同志にたいする首の要求はじつにわれわれ全被告にたいする断罪の集中的なものだ。いな、全労働者・農民にたいする弾圧の集中的なものだ。検事は同志が逮捕にむかったスパイ高木信平にむかってピストルを発射したことをあたかも無頼漢の行動のごとく印象せしめて死刑を合理化せんとしている。しかしながら、同志のピストル発射はまったく党防衛の政治行動である。彼らは同志の死刑によって四・一六以後の党防衛のために勇敢に武器を使用したいっさいの共産主義者を死刑にするためにその前例をつくろうとするのだ。さらになお同志がプロレタリアートの前衛として忠実に勇敢にたたかい優れた指導者として活動してきたから首を要求しているのだ。われわれはブルジョアジーのかかる弾圧にたいして徹底的に最後までたたかうものである。

ブルジョアジーおよび地主は検事の論告求刑によって、自己の利潤追求と搾取支配の維持のために、労働者・農民労苦大衆の指導者として、革命運動の組織者としてたたかってきた日本共産党員およびその支持者にたいして、法律の名によって、人民大衆の名をかたってその血を要求し

ている。帝国主義戦争反対、天皇制の廃止、資本家・地主政府の転覆、労働者・農民政府の樹立、米と土地と自由のための人民革命の実現、をめざしてたたかいたった前衛の血を要求しているのだ。

われわれはかくのごとき検事の論告、求刑、裁判にたいして大衆が一齊に立って反対をさげぶのみならず、行動をもって抗議し、彼らのたくらみを不成功におわらしめ、搾取者とその手先どもの息の根をとめるためにこれを転覆しほうむりさるであらうことを信ずる。

われわれはいま戦争と革命の時代にいる。周囲にはブルジョア・地主の支配維持の最後の努力がもっとも残酷に兇暴にすすみつつある。労働者・農民にたいする日々の弾圧、帝国主義戦争と満州侵略戦争による日満人民の虐殺、そしてソ同盟にたいする干涉戦争の危機が目前に進行している。

帝国主義戦争反対！ 天皇制の打倒！ 米と土地と自由のための人民革命は切迫しつつある。  
人民革命はかならず到来する。

日本共産党万歳！

コミンテルン万歳！

## 編者注

(一) コミンテルンは、共産主義インタナショナルの略、第三インタナショナルともいう。これは、「日和見主義および社会排外主義にたいする多年にわたる闘争、とくに戦争中の闘争の過程を通じて、多くの国民のなかに共産党が結成された一九一八年に、事実上創立された。形式的に第三インタナショナルが創立されたのは、一九一九年三月、モスクワでおこなわれたその第一回大会においてであった。そして、このインタナショナルの最大の特徴、その使命は、マルクス主義の遺訓をはたし、実行にうつし、社会主義と労働運動の一世紀にわたる理想を実現する、という点にある」とレーニンが言ったが(本文庫版『共産主義における「左翼」小児病』六三ページ)、成立以来各国共産党の統一指導体としての役割をはたし、一九四三年(昭和十八年)五月十五日に解散。その活動などのくわしいことは、山辺健太郎著『コミンテルンの歴史』を参照。三五

(二) 当時は三二年テーゼのままで、「天皇制の役割を過小評価すること、議会および政党内閣は、独自の、天皇制から独立したブルジョア国家形態であるかのごとく」考えた、まぢがった意見も党内にあった。したがって、この日本ブルジョア政府ということばはやや不正確である。独占資本、地主、天皇制官僚の政府で、このなかで天皇制は独自の地位をたもつていた。注(七)参照。三五

(三) 日本では、明治三十四年(一九〇一年)の社会民主党(即日禁止)、明治三十九年(一九〇六年)の日本社会党(翌年禁止)以来、労働者・農民の政党はなかった。さらに明治四十

三年（一九一〇年）の大逆事件以後は、社会主義者の宣伝活動までも禁止されていた。それが、大正三年（一九一四年）ごろからふたたび宣伝活動をはじめ、ロシア革命、米騒動のあとにおこった大衆運動に刺激され、大正八年（一九一九年）ごろから労働運動と社会主義とがむすびつくようになった。しかし、労働者の政党はなかった。日本共産党は、コミンテルンの成立後、直接その指導によってできたものである。三七

（四）このことは、スターリンが『中国革命の見通しについて』という論文の第二節「中国における帝国主義と帝国主義的干渉」のなかで、あますところなく論じている（本文庫版『中国革命論』四〇ページ、全集第八巻四〇五ページ）。三九

（五）第二インタナショナルの崩壊と第三インタナショナル創立の意義については、本文庫版レーニン『第二インタナショナルの崩壊』および『共産主義における「左翼」小児病』を参照されたい。四〇

（六）第一次世界戦争は一九一四年（大正三年）におこったが、戦争前から日本は不況であった。当時は工業もヨーロッパやアメリカからの輸入に依存する度合が強かったので、貿易絶が日本経済に大きな影響をおよぼし、戦争のはじめには商工業の停滞がひどかった。それは一九一四年（大正三年）の後半期から一九一五年（大正四年）前半期にわたってつづいた。物価は下落し、企業の破産が続出し、あらゆる工業部門に生産縮小がおこなわれた。一九一五年の後半期から、軍需品の輸出増大、海運業の好況、東洋市場にたいする独占的輸出の増大などによって、工業はかつてない活況を呈した。貿易は出超に転じた。一九一六年（大正五年）も依然として活況、一九一七年（大正六年）には活況がややおちついた程度、一九一八年（大正七年）には米騒動、講和によって沈滞はしたが、ひどい不況はなかった。むしろ、大戦によって日本の経済がうけた利益は大戦がおわってのちもしばらくはつづいた。こうし

て、一九二〇年（大正九年）前半は、戦後最大の好景気であった。だが、ヨーロッパ工業の復活とともに、日本はふたたびアジアの諸国で諸外国と激しい競争をするようになった。戦時中のできた工業の生産力は工業製品の需要をはるかに上廻るものであった。こうして、一九二〇年から戦後恐慌にはいったのである。一九二一年（大正十年）、一九二二年（大正十一年）、一九二三年（大正十二年）と不況はつづいたが、これが九月の大震災で経済界の大混乱となった。この震災は日本の経済に大きな打撃をあたえ、さらに中国革命の影響をうけて、一九二六年（大正十五年）から日本の経済は危機がだんだんひどくなり、一九二七年（昭和二年）の金融恐慌となって爆発した。これはさらに一般的な経済不況となり、回復しないうちに一九三〇年（昭和五年）の世界恐慌にはいったのである。労働者階級の闘争もこれに応じて発展している。四〇

（七）昭和六年（一九三一年）に発表された政治テーゼ草案には、「経済界における支配的地位はその政治上における支配的地位をも保証する」ということを書いた一節があるが、このま

ちがいは、三二年テーゼによって根本的にただされた。この意味で、ブルジョアジーが「今日の日本国家の指導者であり支配者である」というのはただしくない。なお注（二）参照。四一

（八）済南事件——一九二六年七月、広東を出発した中国の国民革命軍は、人民の支持をうけて着々と北上した。当時中国北部には日本帝国主義と関係のふかい軍閥張作霖が支配していたが、国民革命軍の「北伐」がこの旧勢力をよわめ、逆に蒋介石とむすんだイギリス・アメリカ帝国主義の勢力をつよめることとなるのをおそれ、日本帝国主義は一九二七年（昭和二年）に一度三東省に出兵したが、翌一九二八年五月三日にはさらに山東省首都の済南に出兵し、中国人を虐殺した。これが「済南事件」（中国では済南惨案といっている）である。こ



のとき日本がわは中国人暴徒が日本人居留民を惨殺したということを出兵の口実としたが、これが日本がわのうった芝居であることは、当時の『無産者新聞』がばくろしている。四八

(九) 労働農民党が解散させられてから、党内の小ブルジョアの指導者はひどく動搖し、本書一一〇ページに記している小ブルジョアの政党「無産大衆党」をつくった。一方、労働党内の革命的エネルギーを共産党に吸収してゆく運動は、政治的自由獲得労働同盟となつてあらわれたが、このなかでも、「比類なき敗北的な合法的結党方針」があらわれるようになった。この労働同盟内の合法主義分派については注(五七)参照。それが、いわゆる新労働党となつてあらわれた。このほかに、旧労働党の時代から、日本労働党、日本農民党、社会民衆党、などがあつた。これらはみな、小ブルジョアのな党であつた。無産政党的合同運動は旧労働党時代からあつたが、その時代には労働党が内部にいる共産党員の指導によつて革命的活動をやっていたので、右翼や中間派の党指導者が合同に反対した。だから、ここにいう合同成立は、いわゆる無産政党的革命分子が出てしまつたあとでおこなわれたものである。はじめの合同は、無産大衆党を中心にして、日本労働党、日本農民党、それに地方政党的である民衆党、中部民衆党、信州大衆党、島根自由民衆党の七党が、昭和三年(一九二八年)の十二月二十日に合同して日本大衆党となつた。その綱領の第一は、「わが党は合法的手段を通じて現在の不合理なる土地・生産・分配にかんする制度の改革を期す」というのであつた。中央執行委員長高野岩三郎、書記長平野力三、同次長河野密。この日本大衆党はまもなく分裂して、旧無産大衆党の連中が岩手その他の地方政党的といつしよになつて、無産政党的統一全国協議会をつくつた。一方、これまでの合同に参加しなかつた社会民衆党も昭和五年(一九三〇年)に分裂して全国民衆党ができた。ところが、昭和五年(一九三〇年)の総選挙で無産党の当選者がすくなかつたので、あわてて、またまた合同をやることになり、日本大衆党、

全国民衆党、無産政党的統一協議会は、同年の七月に合同して全国大衆党となつた。こうして、労働党、全国大衆党、社会民衆党という三つの社会民主主義の党ができ、この三党的合同運動がおこつた。社会民衆党の指導部はこの合同に反対したが、合同に賛成するものが「三党的合同実現同盟」(社会民衆党からは除外されていた)をつくり、この同盟と労働党、全国大衆党が昭和六年(一九三一年)の七月五日に合同して全国労働大衆党になつたのである。五〇

(一〇) 管刑は封建時代からあつた野蛮な刑罰を総督府になつてからうけつたものであるが、圧制はこれだけではない。根本は、領土の併合、つぎは土地を朝鮮、台湾の人民からとりあげたことである。いずれも併合後、朝鮮、台湾の人民に所有地の申告をさせたが、もともと、土地にかんする近代的所有権が確立しておらず、私有地の觀念がはっきりしていない朝鮮や、これほどではないが、だいたいこれに似た台湾では税金をおそれて届出をしなかつた。この土地が全部取りあげられて日本の地主にただ同様ではらいさげられたのである。法律も、総督府がかつてに制定できた。要するに、政治的・法律的圧制は、ひどい植民地搾取を確保するための手段である。五三

(一一) この辺のところは叙述が前後しているが、明治時代、ことに近代的な労働運動がおこつた一九〇〇年(明治三十三年)のすこしまえから一九〇五年(明治三十八年)ごろまでの運動史である。片山潜はつぎのように言っている。「日本における近代的労働運動は、一八九七年(明治三十年)の夏、日清戦争のちにはじまつたと言つてよい。日本の工業は、清国からとつた戦争の賠償金によつて、日本の歴史上ではじめての活況を呈していた。労働者階級は目ざめ、労働者は生計費騰貴のために賃金の値上げを要求した。成功、失敗、様々の多数のストライキが報告された。近代的工業制度は、日本においては新しい経験であつたため、労働運動やストライキはなんら法律上の制限はうけなかつた。」こうして、まず片山潜

らの努力で「労働組合期成会」ができ、会員は二千名以上になった。つぎに「一八九七年（明治三十年）の十二月一日、東京で、一千名以上の組合員をもつ鉄工組合が組織された。これが日本における最初の労働組合であった。」翌三十一年には、日本鉄道会社の大ストライキのほか六三のストライキがあり、六、七六二名の労働者が参加している。これから三十二年までは運動の全盛期で、これが一九〇〇年（明治三十三年）の治安警察法（団結禁止、ストライキ禁止の第十七条）制定で大きな打撃をうけた。最初のプロレタリア政党である日本社会民主党は、労働運動にたいするこのような政治的弾圧に対抗するために起こったのであるが、十分な大衆的基盤がなかったこと、指導者の合法主義のために、政府の禁止命令にたいしてたたかえなかった。これよりのちは社会主義者のグループによる宣伝活動の時代。一九〇三年（明治三十六年）以後は日露戦争と反戦運動の時代である。「日本の社会主義たちはいまや二カ年にわたって戦争反対の闘争をつづけてきた。……同志たちは東京で『平民新聞』という社会主義の週刊新聞を発行し、この新聞を反戦闘争の道具にした。」この『平民新聞』が禁止されてのち発行したのが『直言』である。このころおこった事件が本書五五ページにある「大衆蜂起的な」事件で、その経過と、この事件を利用した一種のどっちあげによる『直言』の禁止にいたる経過は、つぎのとおりである。一九〇五年（明治三十八年）、アメリカ合衆国ニューハンプシャー州のポーツマス市で日露講和条約がむすばれたが、この条約に反対する「国民大会」が同年九月五日に東京にひらかれた。主謀者は右翼の対露同志会で桂内閣を打倒するのが目的であったが、同内閣の圧制や戦争の犠牲にたいする人民大衆の不満が主謀者の予期しない暴動となった。当局は戒厳令をしいて、これを口実に社会主義運動の鎮圧をはかり、運動の機関誌『直言』を禁止した。以上のくわしいことは、片山潜『日本の労働運動』（岩波文庫）第一章「日本の労働運動とその背景」、第二章「全盛時代」、を

参照されたい。またアムステルダム大会のことは、片山潜『日本の労働運動』（岩波文庫）第四章第二節「日露戦争と反戦運動」（三四二ページ）およびその注（三九七—四〇〇ページ）、日露戦争のことは、本文庫版『ソ同盟共産党小史』第三章、またブレハノフのことは同じく『党小史』人名索引を参照。なおトロツキーの評価も、『党小史』の索引によって見られるよう希望する。 五六

(一一一) 第一次世界戦争中、日本資本主義は、欧米帝国主義の東洋市場からの一時的後退に乗じ、中国その他の植民地を独占的に略奪し、国内の労働者と農民にたいする搾取を強化することによって発展した。都市人口、ことに工業人口の増加はその現れの一つである。ところが、農村では半封建的生産関係が支配し、政府は地主の利益を擁護して米価をつりあげる政策をとって、外米輸入関税、この輸入の一部商人による独占がおこなわれていた。そのうえ、シベリア出兵（ロシア革命干渉）準備のための備蓄米があつめられていた。これが米の投機を刺激し、米商の買溜をおこした。このため米価が騰貴した。しかし、労働者の賃金はあがらなかった。生活は非常に苦しくなった。大正七年七月二十二日、富山県魚津町の婦人たちが米の県外移出に反対して自然発生的なデモンストレーションをおこなったが、これが口火となって、八月三日、同県の西水橋町、六日、滑川町と県下一帯に騒擾が拡大し、これが新聞に出るとたちまち全国各地に波及し、その範囲は三三府県にわたり、参加したものは一千万人以上に達し、空前の全国的暴動に発展した。この暴動には労働者が積極的に参加したが、組織的指導がなかったので天皇の軍隊によって鎮圧された。しかし、このため寺内軍閥内閣はたおれ、民衆は団結の力を自覚し、労働運動はこれを機会に大いに発展した。いうまでもなく、この全国的暴動はその前年十月のロシア社会主義革命に直接に影響されておこったものであるが、くわしいことは片山潜『日本における一九一八年の米騒動』（歴史

評論』三二号に転載)を参照されたい。 五

(一三) これは三・一運動として知られている朝鮮民族の独立運動である。その原因は、日本の侵略以来、多少の起伏はあるが、たえずおこっていた独立運動が、ロシア革命、日本の米騒動、第一次世界戦争後の民族自決を要求する諸民族の運動に刺激されておこったものである。たとえば、一九一〇年(明治四十三年)に、当時韓国といっていた朝鮮が日本に併合される。たとい、武力闘争の形をとった独立運動の主力はだんだんと満州方面にうつるようになり、民族独立運動者も、上海、アメリカ、ハワイ、ロシアことに沿海州方面に亡命、ここで活動するようになった。このほか、これらの地方には朝鮮人移民労働者もいたことはもちろんである。独立運動はこれら移民労働者のなかでおこなわれていたが、このうちロシアにいた朝鮮人移民労働者は、ロシア革命の影響を強くうけ、直接革命戦に参加したのもたくさんいた。日本人がまだ出席していないコミンテルンの創立大会にも朝鮮人グループの代表者がでており(大会議事録)、この人たちが中心になって、日本にいた留学生なども連絡して秘密の独立運動をこのころ組織していたことに注意しなければならぬ。しかし、朝鮮は併合後、日本帝国主義の政策として、その工業化をおさえられ、ただ日本商品の販売市場と収奪的な農業経営の対象となっていた。したがって、民族資本家や労働者は、三・一運動のころはあまり有力ではなかった。したがって、この運動の中心になったのは古い民族主義者やインテリゲンツィアであった。彼らがこの運動のなかで無力なことをみずからばくろすると、朝鮮人民は、これをのりこえて、自然成長的に武装闘争までやったのである。この運動は、朝鮮人民の解放運動のなかで古い民族主義者が指導権をうしない、共産主義者が民族運動を指導する動機をつくった、朝鮮民族解放運動史の大事件である。騒動は三月一日から二カ月間、全鮮約六一八箇所におこり、参加者五〇万(総督府発表でうちわに見てある、実際は一〇〇

万以上)で、その多くが農民であった。これは農民の土地の収奪が強行されたこととつながりがある。この騒動は約一年ほどつづいたが、一年間の検挙者総数一万九五三五人のうち、労働者は二五四人、学生三、七二二人という総督府の発表は、当時まだ幼かった朝鮮プロレタリアートの状態をよくものがたっている。 五七

(一四) 過激社会運動取締法案はあきらかに、極東民族大会後コミンテルンの指導のもとに日本共産党ができることを予想してつくったもので、当時の政府の提案理由は、外国の同志と提携した運動がおこり、いままでの法規では十分でない、ということであった。注意すべきことは、草案第四条に、シンパサイザーの処罰規定、第五条、罪の発覚しないうちに自首したものにたいする刑の減免を規定し、脱落分子のスパイを奨励し、第五条は、日本の領土外で罪をおかしたものにも適用するという規定があつて、だいたい後年の治安維持法と同様であつた。一九二二年(大正十一年)二月十八日に貴族院に提出されたが、貴族院は国内の反対をおそれ、修正のうえ三月二十四日に可決。翌二十五日衆議院でにぎりつぶされた。 五八

(一五) ここはすこし事実とちがう。麻生久はのちに変節裏切りをやつたが、このころはサンディカリストで、「社会主義同盟」の発起人の一人である。一九二一年一月の、日本労働総同盟の機関誌『労働』に、当時総同盟東京連合会主事の棚橋小虎は『労働組合へかえれ』という一文を発表した。棚橋の反対は、ここにいったようなこともあつたが、革命的サンディカリズムにたいする改良主義的組合主義の立場を代表していたのである。 五九

(一六) 同志佐藤三千夫は宮城県登米郡の生まれ。一九二二年六月以来沿海州バルチザン部隊に参加し、白衛軍、帝国主義日本軍に抗戦した。病軀をおして奮闘していたが、同年十二月四日、ハバロフスク陸軍病院にたおれた。ときに二四歳。彼以外にも、日本からロシア革命を援助するため、ことに日本の干渉軍にたいする宣伝活動をやるために、印刷労働者も日本

軍占領下のシベリアにいった。これらの同志が片山潜と協力して出したのが、本文庫版片山潜『反戦平和のために』にある『日本老革命家の心からなる勸告』というピラである。六一

(一七) 極東民族大会はたゞしくは極東共産主義的革命団体第一回大会である。日本からは、片山潜、徳田球一、ほか数名が出席、片山潜が「日本の政治経済情勢」について報告している(本文庫版片山潜『反戦平和のために』参照)。三

(一八) コミンテルンの綱領(五月書房版参照)は、一九二二年(大正十一年)の第四回大会に草案がはじめて提出され、のち第五回大会をへて、一九二八年(昭和三年)の第六回大会で決定。それは、「プロレタリアートの国際的革命運動の全歴史的経験のをもつとも包括的な批判的普遍化として、共産主義インタナショナルの綱領は、プロレタリアの世界独裁のための闘争の綱領、世界共産主義のための闘争の綱領である。」(綱領序章)その他の組織上の土台は、一九二〇年(大正九年)の七月十九日から八月六日までひらかれたコミンテルン第二回大会できまつた。つまり、コミンテルンに加入しようとする各国の党の資格をきめた『加盟二十一カ条』、『コミンテルンの規約』がきまつたのである。各国共産党の標準規約は、一九二五年(大正十四年)五月四日、コミンテルン執行委員会組織局で決定された。戦前の党規約はこれである。六五

(一九) 一九一九年(大正八年)以後の日本のプロレタリア運動のなかで俗に「アナ」と「ボル」の対立というのは、起源としては、無政府主義とボルシェヴィズムとの対立である。ロシア革命の様子がよくわからないときには、「アナ」も「ボル」も対立はなかった。たとえば、アナキズムの指導者である大杉栄、岩佐作太郎、近藤憲二らのやっていた『労働運動』(大正八年創刊)には、「ボル」の近藤栄蔵も参加していたし、また堺利彦なども寄稿していた。この両方の思想的対立は一九二〇年(大正九年)ごろからである。二〇年の一月に当時

の日本社会主義運動の宣伝誌である『新社会』の巻頭言に堺利彦が『マルクス主義の旗印』というのをかかげ、われわれはマルクス主義を旗印とするという意味のことを宣言した。アナキストのほうは、世界的なアナキストの、ロシア革命、ことにそのプロレタリア独裁の国家制度にたいする非難攻撃と歩調をあわせたので、ここにロシア革命をめぐる社会主義者とアナキストとの論争がおこった。しかし、一九二二年(大正十一年)に日本共産党ができるまでは、日本の社会主義者はいっさいの議会活動や政治行動を否認していた。したがって厳格な意味ではマルクス主義ではない。ただロシア革命を支持したというだけである。しかし、このロシア革命の事情やレーニンの理論は、不十分ではあるが山川均の『社会主義研究』が紹介していた。社会主義者の政治運動がなかったので、プロレタリア運動の政策にかんする「アナ」と「ボル」の論争は労働組合の組織問題が大部分をしめていたのである。この組織問題にかんする、いわゆる「ボル」の組合(日本労働総同盟が中心)と「アナ」の組合(印刷工組合の信友会が中心)との論争は、一九二一年(大正十年)以後の激しい資本攻勢に対抗する組織としての、労働組合総連合の組織形態をめぐるおこなわれた。総連合を、しっかりした中央指導部をもつ合同体にするか、各組合が完全な自主権をもつ、自由な連合体にするかが、中心問題になったのである。総連合そのものは成立しなかったが、その後の激しい闘争は、合同主義のただしことを証明し、またロシア革命の真相があきらかになるにつれ、アナキズムは、しだいに労働者のあいだからその影響力をうしない、一九二三年(大正十二年)には、社会的勢力をほとんどもたなくなった。七〇

(二〇) 方向転換論——『前衛』(注二四)の一九二二年(大正十一年)七・八月合併号に、山川均が『無産階級運動の方向転換』という論文を書いた。これは全篇が九節(第八節は検閲で全部けずられた)からなるかなり長いものであるが、そのだいたいを紹介すると、つぎ